

新修 茨木市史 史料集 8

しょうぐんやまこふんぐん  
將軍山古墳群 I

—考古学資料調査報告集 1—

平成 17(2005)年 3月

茨木市

将軍山古墳群 I

—考古学資料調査報告集1—

平成17(2005)年3月

茨木市

卷頭図版 1  
將軍山古墳出土普通円筒埴輪 1











## 将軍山古墳群I－考古学資料調査報告集1－の発刊に際して

本書は、茨木市安威小字將軍山に所在した將軍山古墳の出土埴輪についての整理報告を中心とし、周辺の遺跡から出土した考古資料についてもまとめた報告書である。

將軍山古墳は全長107mの前期古墳で、市内の紫金山古墳とともに北摂地域における古式の前方後円墳を代表するものである。しかし、1964年に住宅開発によって消滅し、現在では残念ながら目にすることができなくなってしまった古墳である。この古墳に対する調査は幾度かおこなわれてきており、その調査記録や出土遺物が保管されている。それらのうち、1964年に実施された埴輪調査の資料が茨木市文化財資料館に保存されており、その公開を進めることを目標として、市史編さん室では資料整理をおこなってきた。埴輪の洗浄からはじめ、破片の接合、実測図の作成など、丹念な作業の結果、50個体以上の円筒埴輪（器台形円筒埴輪を含む）を復元することができ、また13点以上の壺形埴輪について図化することができた。これらの資料をすべて市史の考古編にもりこむことは困難であるので、『新修 茨木市史史料集』の1冊として刊行することとした。

本書にも示されているように、埴輪に対する詳細な検討の結果、その年代的位置づけや系譜上の位置を明らかにすることが可能になった。これは、円筒埴輪に対する研究が飛躍的に進んだことを反映しており、大和や山背などの隣接地域との比較を通して、より具体的に將軍山古墳の位置づけができるようになったためと言える。それと同時に、將軍山古墳出土埴輪の資料群としての重要性も改めて認識されることとなる。今回報告した資料にもとづいて、古墳時代前期の社会に対する研究がいっそう進展することは間違いないであろう。

過去の調査資料であっても、今日の水準で再検証することの重要性は、どのような学問であれ、改めて言うまでもないことである。本書に収めた將軍山古墳出土埴輪をはじめ、安威1号墳の壺形埴輪、そして阿為神社所蔵の三角縁神獣鏡は、いずれも重要な歴史資料としてよく知られているものである。すでに実測図などが示されているものもあるけれども、新たに図面を作成して、研究の便を図ることとした。茨木市内の文化遺産に対する最新の記録として、市民はもとより多くの方に利用されることを願っている。

遺物の整理から報告書の作成にいたるまで、廣瀬覚氏と若杉智宏氏には力を尽くしていただいた。奥井哲秀氏をはじめとする教育委員会文化財資料館の皆様および耳原小学校の各位には、資料の貸出、整理場所の提供など、多くのご援助をいただいた。また、貴重な神宝であるにもかかわらず、阿為神社宮司 森川正啓氏には、三角縁神獣鏡の調査をご快諾いただいた。末筆ながら謝意を表する次第である。

平成17（2005）年3月

茨木市史編さん委員会

菱 田 哲 郎

## 例　　言

- 1 本書は、長らく大阪市立博物館にて保管され、昭和 59（1984）年に同館より茨木市文化財資料館に移管された将軍山古墳群の出土遺物、および調査資料のうち、『新修 茨木市史』編さん事業の一環として実施した将軍山古墳（2号墳）から出土した埴輪を中心とする遺物の整理・検討作業の報告書である。また、合わせて安威 1 号墳出土壺形埴輪、阿為神社所蔵一角縁神獸鏡の調査成果を掲載した。
- 2 将軍山古墳群の整理・検討作業は平成 14 年 4 月から開始し、現在も進行中である。本書はひとまず「将軍山古墳群 I」としてこれまでの成果について報告するものであり、次年度以降も継続して整理作業、および報告書の作成にあたる予定である。
- 3 将軍山古墳出土埴輪の整理・検討作業については、遺物の洗浄・注記・接合を廣瀬覚が、実測・製図は廣瀬と若杉智宏が中心となって行った。
- 4 安威 1 号墳の壺形埴輪は、茨木市教育委員会によって昭和 56 年に実施された発掘調査の際に出土したものである。同古墳の発掘調査の成果については、茨木市教育委員会 奥井哲秀氏よりご教示を賜った。
- 5 阿為神社所蔵鏡の調査および本書への掲載については宮司 森川正路氏にご快諾を頂き、京都大学特別研究員の下垣仁志氏に製図および検討を依頼し、玉稿を賜った。
- 6 掲載した写真の大半は菱田哲郎が撮影し、埴輪の細部写真のみ廣瀬が撮影した。また、安威 1 号墳の調査写真については茨木市教育委員会から提供を受けた。
- 7 第 4 章掲載の大阪府教育委員会所蔵の羽曳野市御旅山古墳出土埴輪の実測図については、同教育委員会より掲載のご快諾を賜った。
- 8 将軍山古墳の発掘調査以前の状況について免山篤氏に、出土遺物については大阪府教育委員会 一瀬和夫氏、明治大学博物館 忽那敬三氏よりご教示を賜った。
- 9 本書の編集は菱田の指導のもと若杉の協力を得て廣瀬が行った。執筆分担は目次の通りである。

# 目 次

第1章 はじめに－将軍山古墳群について－	.....(廣瀬 覚)	1
第2章 将軍山古墳（2号墳）出土の埴輪	.....(廣瀬)	3
1 普通円筒埴輪	.....(廣瀬・若杉智宏)	4
2 器台形円筒埴輪	.....(廣瀬・若杉)	14
3 壺形埴輪	.....(廣瀬)	15
4 動物形土製品	.....(廣瀬)	19
第3章 将軍山古墳出土埴輪の検討	.....	21
1 配列状況の復元	.....(廣瀬)	21
2 生産組織像をめぐって	.....(廣瀬)	22
3 黒斑からみた焼成方法	.....(廣瀬)	24
4 動物形土製品について	.....(廣瀬)	27
5 墓輪からみた将軍山古墳の築造時期	.....(廣瀬・若杉)	28
第4章 考察－将軍山古墳出土埴輪の系譜と意義－	.....	30
1 将軍山古墳出土円筒埴輪の系譜と位置づけ	.....(若杉)	30
2 壺形埴輪の大型化とその背景	.....(廣瀬)	39
第5章 おわりに－課題と展望－	.....(廣瀬)	51
将軍山古墳出土埴輪観察表	.....	55
附篇1 安威1号墳出土の壺形埴輪	.....(廣瀬)	59
附篇2 阿為神社所蔵三角縁唐草文帯二神二獸鏡	.....(下垣仁志)	66
図 版	.....	卷末

## 卷頭図版目次

- 卷頭図版 1 将軍山古墳出土普通円筒埴輪 1  
卷頭図版 2 将軍山古墳出土普通円筒埴輪 2  
卷頭図版 3 将軍山古墳出土壺形埴輪  
卷頭図版 4 将軍山古墳出土動物形土製品  
卷頭図版 5 阿為神社所蔵三角縁唐草文帯二神二獸鏡

## 図版目次

- 図版 1 普通円筒埴輪 1  
図版 2 普通円筒埴輪 2  
図版 3 普通円筒埴輪 3  
図版 4 普通円筒埴輪 4  
図版 5 普通円筒埴輪 5  
図版 6 普通円筒埴輪 6  
図版 7 普通円筒埴輪 7  
図版 8 壺形埴輪 1  
図版 9 壺形埴輪 2  
図版 10 器台形円筒埴輪・動物形土製品  
図版 11 普通円筒埴輪細部 1 (外面調整)  
図版 12 普通円筒埴輪細部 2 (突帶)  
図版 13 普通円筒埴輪細部 3 (突帶)  
図版 14 普通円筒埴輪細部 4 (内面調整・底面)  
図版 15 壺形埴輪細部 (胴部・底部)  
図版 16 壺形埴輪・動物形土製品細部  
図版 17 安威 1 号墳調査風景 1  
図版 18 安威 1 号墳調査風景 2・出土壺形埴輪 1  
図版 19 安威 1 号墳出土壺形埴輪 2  
図版 20 阿為神社所蔵三角縁唐草文帯二神二獸鏡

## 挿図目次

- 図 1 将軍山古墳群周辺の地形 ..... 1  
図 2 将軍山古墳墳丘復元図 ..... 3  
図 3 普通円筒埴輪実測図 1 ..... 6  
図 4 普通円筒埴輪実測図 2 ..... 7  
図 5 普通円筒埴輪実測図 3 ..... 8  
図 6 普通円筒埴輪実測図 4 ..... 9  
図 7 普通円筒埴輪実測図 5 ..... 10  
図 8 器台形円筒埴輪実測図 ..... 14  
図 9 壺形埴輪実測図 1 ..... 16  
図 10 壺形埴輪実測図 2 ..... 17  
図 11 壺形埴輪実測図 3 ..... 18  
図 12 動物形土製品実測図 ..... 20  
図 13 普通円筒埴輪における  
黒斑の付着状況 1 ..... 25  
図 14 普通円筒埴輪における黒斑の付着状況 2 ..... 26  
図 15 普通円筒埴輪全形復元図 ..... 31  
図 16 低位置突帶をもつ埴輪 ..... 35  
図 17 普通円筒埴輪の類別 ..... 36  
図 18 将軍山古墳出土埴輪復元模式図 ..... 40  
図 19 徳島県板野町黒谷川郡頭  
遺跡出土「東阿波型」壺 ..... 41  
図 20 羽曳野市御旅山古墳出土埴輪 ..... 43  
図 21 豊中市小石塚古墳出土埴輪 ..... 46  
図 22 安威 1 号墳出土壺形埴輪実測図 1 ..... 60  
図 23 安威 1 号墳出土壺形埴輪実測図 2 ..... 61  
図 24 安威 1 号墳出土壺形埴輪実測図 3 ..... 62  
図 25 阿為神社所蔵三角縁唐草文帯  
二神二獸鏡平面図・断面図 ..... 67

## 第1章 はじめに－將軍山古墳群について－

茨木市安威小字將軍山にはかつて墳長 107 m を測る前方後円墳、將軍山古墳が存在した。この古墳は宅地開発によって今はその姿を完全に失っているが、攝津を代表する重要な前期古墳の一つであり、「茨木將軍山古墳」として全国的にもその名は良く知られている。

將軍山古墳は北摂山地から南に向かって伸びる洪積丘陵の南端に位置し、南北 150 m ほどの小尾根の頂部、標高約 63 ~ 60 m 付近を利用して築かれていた。古墳のすぐ西を佐保川が、東約 1 km を安威川が流れしており、丘陵の周囲には両河川による沖積地や低位段丘が広がる。古墳は南の平野部を望む絶好の地に築かれており、古墳頂部と丘陵裾との比高差は 35m 前後を測る（図 1）。

將軍山古墳の本格的な調査は、戦後の古墳時代研究を牽引した故小林行雄氏が 1956 年 3 月に文部省科学研究費を用いて後円部墳頂に存在した竪穴式石室を学術調査したことから始まる。小林

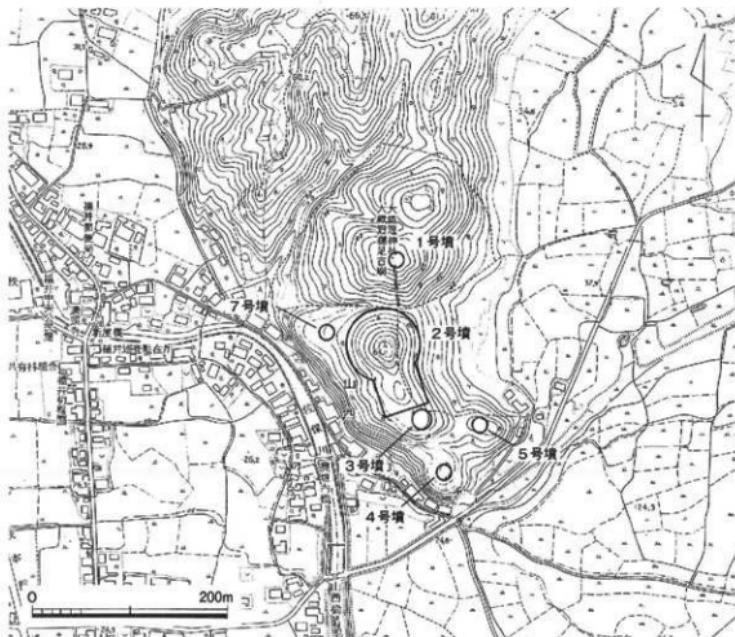


図 1 將軍山古墳群周辺の地形  
「大阪府航空写真測量図」(大阪府地形図)1961 年に加筆

は1947年に緊急調査がなされた佐保川対岸に位置する紫金山古墳の調査担当者である。小林が將軍山古墳の発掘調査に着手した背景には、近接して築造された二つの前期古墳の関係を具体的に解明しようとした明確な問題意識が窺える。この時の調査成果については小林の記述によつて、堅穴式石槨の構造や構築過程の概要、石槨内に残された副葬品の品目（硬玉製勾玉6、硝石製小玉4、碧玉製鏡1、銅鏡16、鉄鎌50、鉄劍7、鉄刀1）等を窺い知ることができるが（小林1956）、正式な調査報告書は未刊のままであり詳細については不明な点が多い。

將軍山古墳群周辺の宅地開発は、小林による調査から8年を経た1964年に持ち上がった。緊急調査の後、古墳は地上から姿を消すことになるが、この時、茨木市教育委員会の委託を受けるかたちで、埴丘調査が大阪市立博物館によって、後円部に存在した堅穴式石槨の解体・移築調査が堅田寅氏によってなされている。重機による掘削が押し迫るという重圧の中にあって文献的な調査がなされ、後円部にあった堅穴式石槨が北側の山頂、將軍塚古墳（1号墳）の西脇に移築されるとともに、將軍山古墳の前方部のはば全域と後円部の一部、周囲に存在した後期古墳もあわせて調査・記録化が図られた（大阪市立博物館1965、堅田1968）。

ところで將軍山古墳群なる名称は、將軍山古墳とその周囲に存在した5基の後期古墳の総称であり、1964年の調査の際にそれぞれ1～7号墳の呼称が与えられている。將軍山古墳の北側の山頂に位置したため開発を免れた將軍塚古墳が1号墳、將軍山古墳本体が2号墳であり、將軍山古墳前方部に接する形で存在した径約25mの円墳が3号墳、3号墳のさらに南でわずかに石室床面の一部が残存していたものが4号墳、3号墳の南東で重機掘削を受けて半壊の状態で調査された石室が5号墳、將軍山古墳後円部の西側で一部残存していた石室床面が7号墳である。なお、6号墳の呼称は將軍山古墳前方部南側で検出された箱式石棺に対して与えられたようである。本来は周辺埋葬として扱うべきものであり、調査終了後に独立した古墳としての認識は改められたようである。

これら將軍山古墳群の発掘成果は、調査終了直後に公表された概要報告があるので、詳細は明らかにされていない。將軍山古墳群が地上から姿を消して既に40年が経過し、調査時の記憶の風化が懸念される中で、茨木市史編さん室では当古墳群の実体の一端に迫るべく、まず大阪市立博物館から引き受けた將軍山古墳（2号墳）の埴輪を中心とする出土遺物の整理作業に着手することにした。造構や埴輪の詳細な出土状況等については今後の検討に委ねざるを得ないが、本書はひとまずこれまでの整理作業によって明らかとなった当古墳出土埴輪の内容とその検討成果について報告するものである。

（廣瀬 覚）

## 第2章 将軍山古墳（2号墳）出土の埴輪

将軍山古墳の埴丘調査は、古墳全体の記録保存を念頭に実施されたものと考えられるが、最終的に全面を完掘するまでには至らなかったようである。図2は遺構検出終了段階での測量図をもとに作成した埴丘復元図である。これによると、後円部は部分的な調査にとどまっており、また、ほぼ全域にわたって調査された前方部も、西側くびれ部から側面の下段堀は未検出に終わつたらしい。ただし、全体的に各段下半部の葺石の残りは良く、後円部・前方部ともに3段築成で、前方部側面はほぼ直線的に伸びる柄鏡形の形状をとることが判明する。後円部北側の調査区が主軸上から若干外れるため墳長は推定値となるが、107.3m前後とみて大きな間違いはないだろう。

埴輪列は前方部中・下段の平坦面で検出されている。取り上げられた埴輪はほとんどが未洗浄、未注記の状態にあったが、幸い袋内に出土場所を記載したカードが同封されており、さらに原位置出土と思われるものには同カードに「上1」「中2」「左首1」といった具合に取り上げ番号が記載されていた。「上」が中段平坦面、「中」が下段平坦面、「左首」は西側くびれ部を示すものと考えられるが、測量図自体には取り上げ番号がいっさい注記されておらず、各埴輪の正確な出土位置は明らかでない。しかしながら、西側くびれ部下段平坦面で検出されている2本の埴輪については別図の注記によって南か

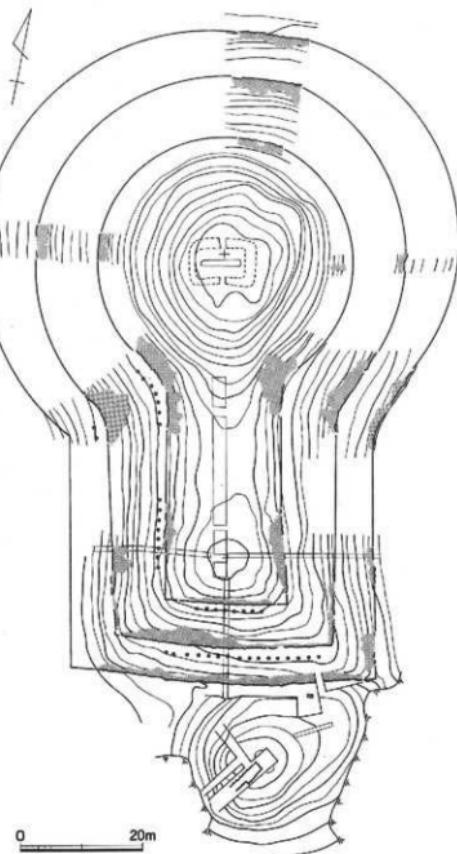


図2 将軍山古墳埴丘復元図

ら「1→2」と番号がふられたことが判明した。これに従えば、南から北へ、東から西へと時計回りの方向で順次、番号がふられていったことが予想できる。よって現状では、中段、下段の埴輪列とも前方部前面の最も東に位置する埴輪がそれぞれ上1、中1となり、両者とも西にむかって番号がふられていった公算が高く、さらに埴輪列が西側面でも残存する中段では、最も南の埴輪が上9となりくびれ部の最も北に位置する埴輪が上26であると推測される。ただしその場合、全部で26個体分の番号が与えられた中段埴輪列では、測量図中の埴輪の位置を記すドットが西側面で3個体不足することとなり、厳密な出土位置の把握にはなお問題が残る。今後、遺構図面等の整理を進める中で検討を深める必要があることは言うまでもない。

ところで当古墳の出土埴輪の中には、通常の円筒埴輪の他に一定量の大型の壺形埴輪が含まれる。概要報告で「茶臼山式の壺形土師器」とされたものがこれに該当する。測量図中には正確な位置が記されておらず詳細な出土状況は不明であるが、東側くびれ上部で原位置を保って出土したとされる壺形埴輪の底部が1個体あり、壺形埴輪が配列に用いられたことはほぼ間違いない。また原位置を離れて出土した壺形埴輪の破片の大半は後円部・前方部の上段斜面から出土している。各段平坦面で原位置を保っていたものはいずれも円筒埴輪であったことからも、壺形埴輪は墳頂を中心にして樹立されていた可能性が極めて高い。

埴輪以外の出土遺物としては動物形土製品が4点ほどあり、前方部前面の上段斜面から出土している。前方部墳頂の前面寄りの部分に置かれていたものが転落したものであるとみられる。前方部墳頂では埋葬施設は確認されていないが、前面寄りの部分は鞍部よりもセンターが余分に向っており、そこでこれらの土製品を用いた儀礼が行われた可能性も十分考えられよう。

以下、埴輪および土製品の整理、検討成果について述べていくが、上述のように埴輪は円筒埴輪と壺形埴輪からなる。さらに前者には普通円筒埴輪に加えて受口状口縁をとる器台形円筒埴輪がごく少量含まれる。説明の都合上、普通円筒埴輪、器台形円筒埴輪、壺形埴輪、動物形土製品の順に報告していくことにする。残存状況の良好なものを中心に図化したため、すべての個体を実測できたわけではない。また原位置出土のものについては、右下にナンバーとともに「上○」「中○」として出土位置を付記している。未実測のものについては巻末の図版および観察表を参照して頂ければ幸いである。

(廣瀬)

## 1 普通円筒埴輪（図3～7、図版1～7）

**形態** 原位置から出土した埴輪の多くは2条目の突帯までが残存する程度で、完全に復元できたものはない。ほぼすべての個体が高さ4cm前後のところに1条目の突帯を貼り付けている。低位置突帯のかたちをとり、2条目突帯はそこから14cmほど上に貼り付けられる。透孔は、確認できるものはいずれも長方形で、3段目に4方向穿つ。

一方、原位置を離れて出土したものの中に、口縁部から下3段分が復元できたものが2個体と図上で復元できたもの1個体がある（1、2、18）。これらは口縁部直下の段と、一段とばして

その下段に長方形透孔を4方向穿つ。こうした透孔の配置を手がかりに原位置から出土したものと対応させた場合、口縁部から数えて4段目となる穿孔を有する段が、本来の（底部から数えて）3段目に相当するとみるのが自然である。よって普通円筒埴輪は低位置突帯を含めて5条突帯6段構成で、3段目と5段目に長方形透孔を並列するかたちで各4孔配備する形態が基本であったと理解できる。

口縁部は1の他に9、18、32などがあり、いずれもゆるやかに外反する形状をとることが判明する。その他の破片資料においても、こうした外反口縁のもの以外は見当たらない。口縁部高は6～9cm前後を測る。

**法量** 2段目の突帯間隔はほぼすべての個体で14cm前後を測る。一方、3段目以上に相当する部分が残存した1、2、10、18では突帯間隔が各段とも18cm前後となる。前述のように底部高は4cm前後であるため、2段日の突帯間隔は底部高の分、他の段よりも短くなっていると理解できる。すなわち、2条目突帯は1条目突帯が貼り付けられるよりも前に、底部下端を基準として他の段の突帯間隔と同じ値で割付けられたものと推測されるが、そのことは後述する突帯間隔設定技法のあり方からも追認される。よって、低位置突帯となる1条目突帯の割付は他の段と比較して変則的なものであり、製作工程上は2条目突帯までが通常の円筒埴輪でいうところの1段目（底部）に相当するものとして評価することも可能である。なお、1条目突帯の割付を行わず、倒立状態で底部下端に突帯を接合しているものが1個体存在するが（34）、この個体においても2条目突帯は底部下端から18cmの位置にある。

底部・胴部径は26cm前後を測るものが多いが、底部を欠損した状態で樹立されていた10、12、13はいずれも胴部径が30cmを上回る。底部の欠損は破面が上向きの円弧を描く傾向があることから、故意に打ち欠かれたものとみられる。したがって、こうした底部を打ち欠く径の大振りな個体は、本来、段数、器高が他を上回る大型品であった可能性が高い。

**成形** 全体的に粘土紐巻き上げに先立ってなされた基部成形の痕跡が明瞭で、2段目の途中までを分厚い粘土板を用いて成形されている点が、断面や内面の接合痕の観察、器壁の厚みの変化からみてとれる。ただしわずかではあるが、33～35のように明確な基部成形をとらずに直接、粘土紐を巻き上げていくものも存在する。

基部を円形に巡らせたのち、その上部から粘土紐を巻き上げていくことになるが、19や23では高さ12cm前後を境にして粘土紐の接合痕が明瞭に現れ始める。基部内面にはこうした粘土紐の巻上げに先立ってナデ他の調整が加えられた状況が確認できるものもある。とりわけ、18や37では基部内面に限って縱方向に伸びる棒状の窪みが明瞭に残る（図版14-3）。最終的にナデ消されているために判然としないが、基部を円形に巡らせた直後に棒状工具で器面を押圧した痕跡の可能性がある。

底面は全体的に木目の圧痕を残すものが多いが、13～18では茎状の圧痕が目立つ（図版14-6・7）。また35では底面が外傾しそこにナデによる擦痕がみられることから、ある時点で倒立させて底面をユビナデ調整したことが判明する。

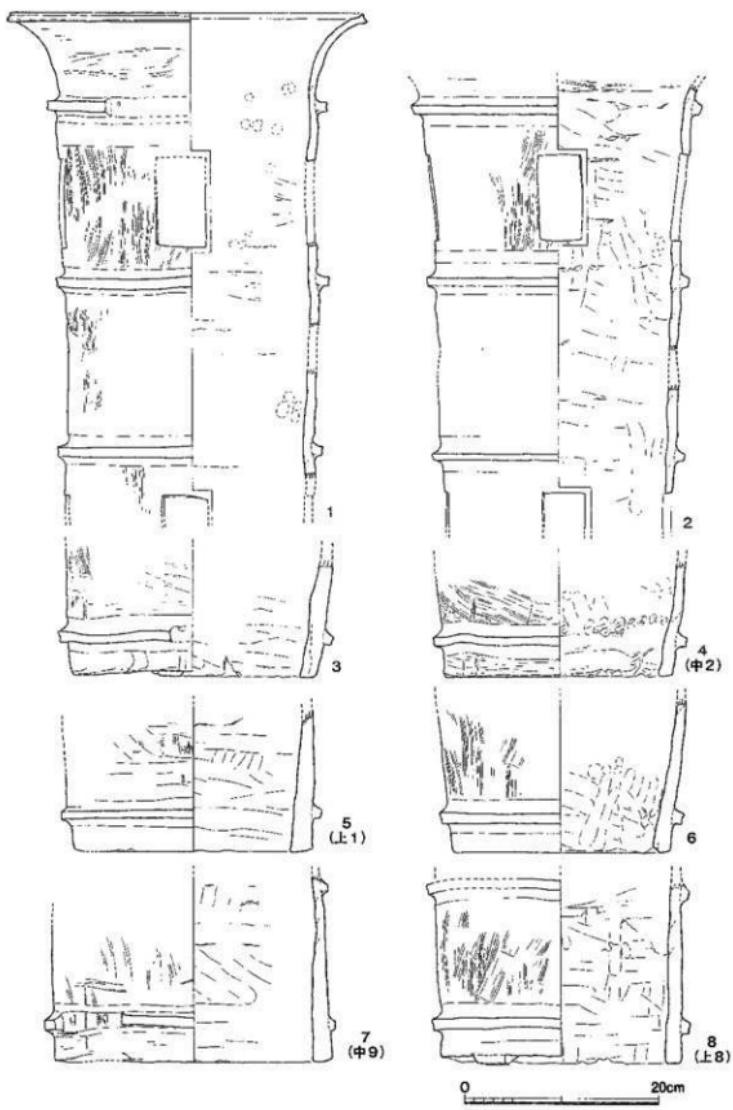


図3 普通円筒埴輪実測図1(a類)

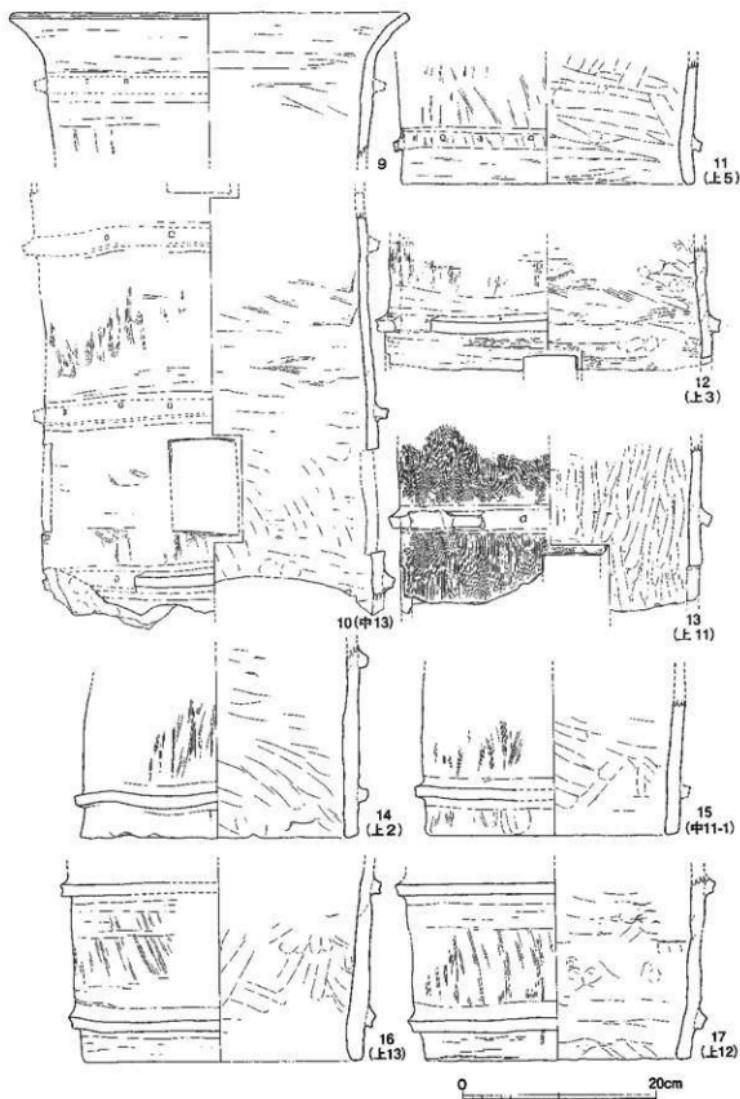


図4 普通円筒埴輪実測図2( b類：9～13、c類：14・15、d類：16・17)

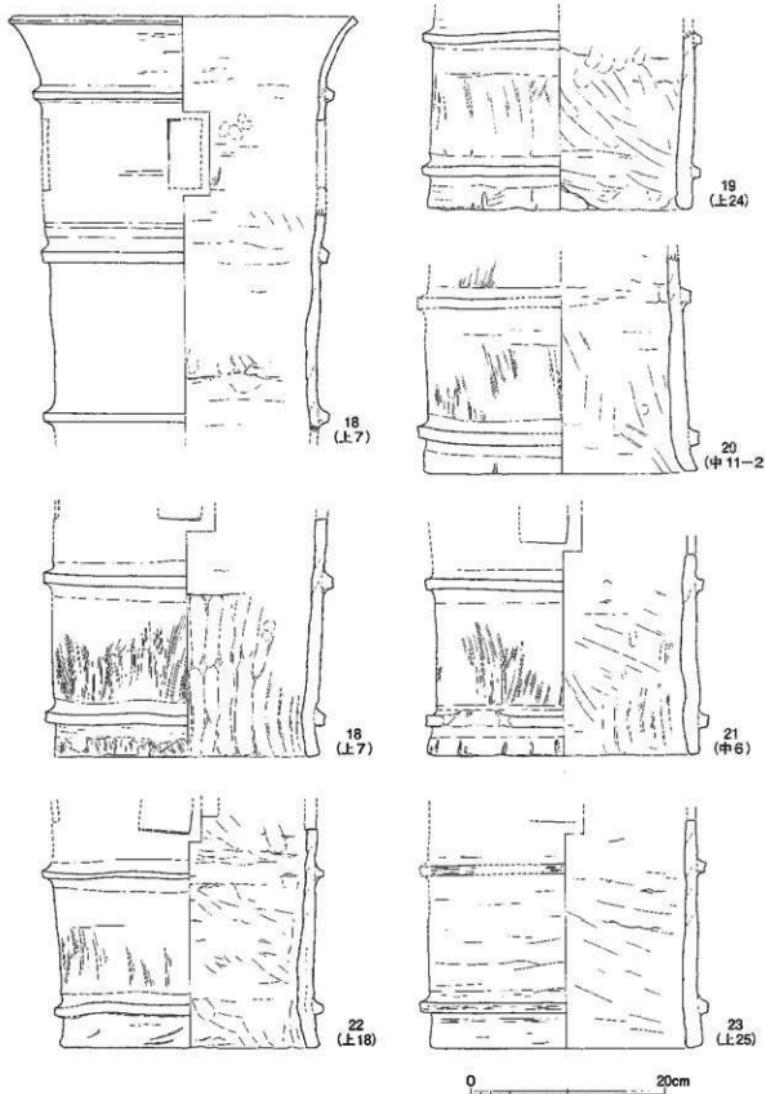


図5 普通円筒埴輪実測図3( e類 )

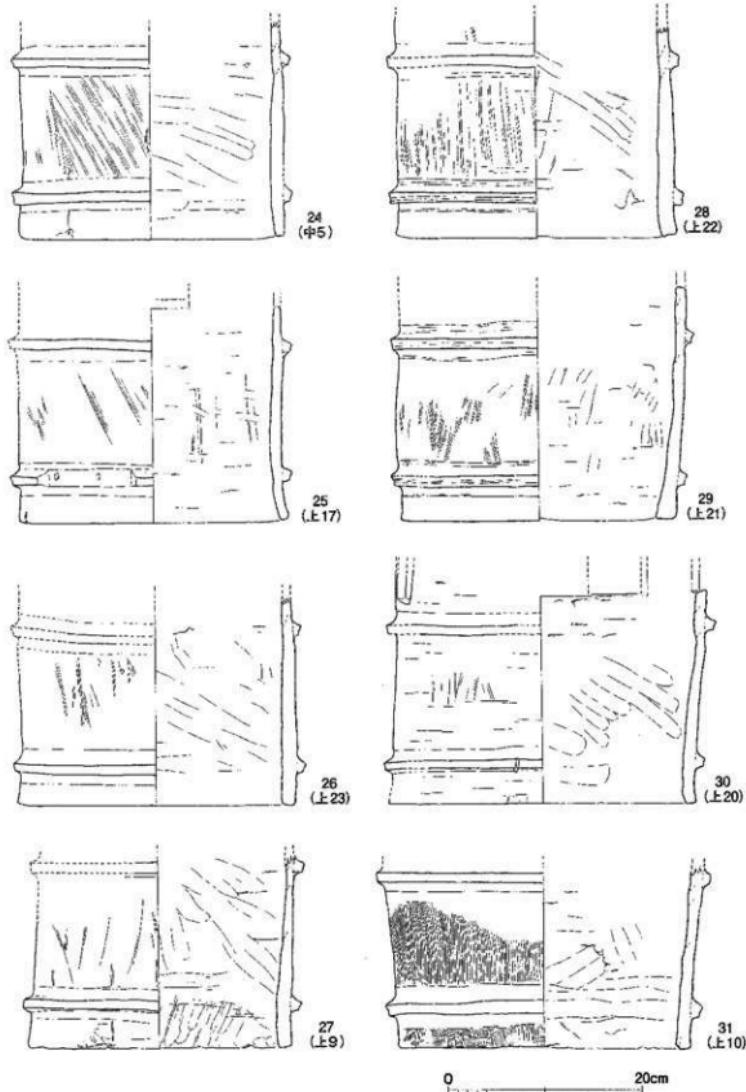


図6 普通円筒埴輪実測図4(f類: 24~27、g類: 28・29、その他: 30・31)

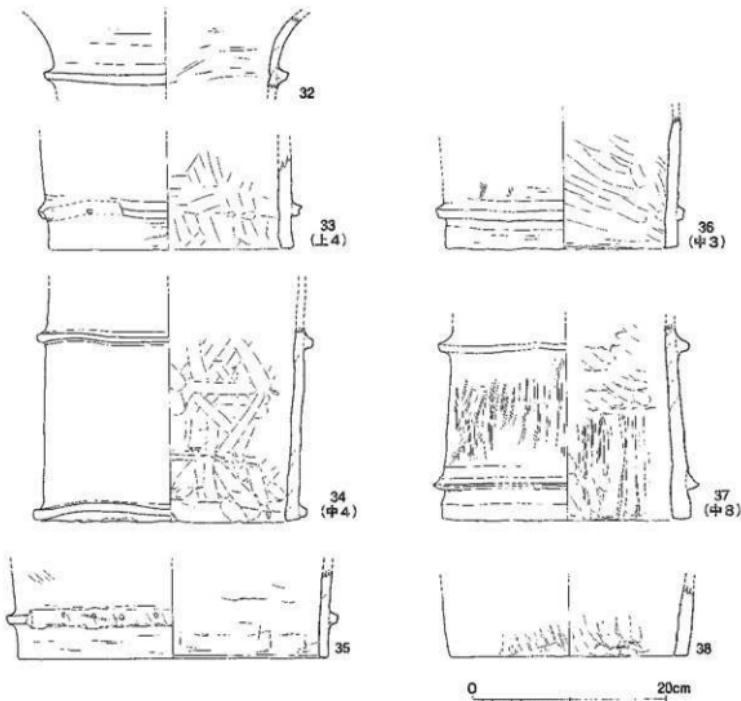


図7 普通円筒埴輪実測図5(その他)

器面調整（図版11、14-1~5） 器面調整は、外側がタテハケ、内側はナデを基本として仕上げる。ただし、外側のハケ目は一般的な針葉樹のものと比較して条線の隆起が各個体とも不鮮明である。いわゆる板ナデ状（板目材）の痕跡に近いが、摩滅を受けていないものでは単位ごとに一定の凹凸をもつ微細な条線が多数走っているのが確認できる。横山浩一による実験結果を参考にすると、こうした当古墳の普通円筒埴輪にみられるハケ目の原体は、広葉樹の柾目材を用いたものである可能性が高い（横山1978）。しかしながら工具の材質の違いを問わなければ、調整手法自体は一般的な前期古墳のものと大きな差異はない。また、13や31では通常の針葉樹によるハケ目が残されている。13は突堤剥離面には明瞭なハケ目が確認できず、二次のタテハケ調整であることが判明する。

内側は基本的にハケ調整されないが、個体によっては部分的に明瞭な条線や工具端部が接触した際に生じたと思われる鋭利な圧痕が残されており、調整に板状工具が使用されたことが示唆される（図版14-1・2）。口縁部は内外面ともほぼ全面をヨコナデ調整する。ただし、内面につ

いては頭部の調整と同様に板状工具によるとみられる擦痕を残すものがある。

**突帯間隔設定技法**（図版 12、13-1・2）各個体とも刺突技法が用いられており、それ以外の設定技法は確認できない。底部下端や 2 段目外面には縱方向に伸びる多数の棒状工具の圧痕が残されており、突帯剥離面の観察が困難なものも含めてほとんど大半の個体で、こうした痕跡を確認できる。いずれも刺突を施す際の「規格工具」の側面が器面に接触した痕跡とみられる（辻川 1999）。また、12 の 3 条目と推定される突帯では、上面に円形の圧痕が確認でき、突帯間隔の設定に伴い「規格工具」の下端が突帯上面に置かれた状況がみてとれる（図版 12-4）。しかしながら、1 条目突帯の上面にはこうした「規格工具」下端の圧痕を残す個体は全くみられない。一方、19 や 21 では、底部下端のはば全周にわたって形状や深さの異なる 2 種の圧痕がそれぞれ 4 に近接しながら残されていて、一方が 1 条目突帯、もう一方が 2 条目突帯の割付に伴うものであることが示唆される。21 ではこうした底部の圧痕に対応する位置で 1 条目突帯が剥離している場所があり、実際に規格工具の圧痕と刺突との関係が検討できる。それによると、近接する 2 つの圧痕のうち 1 条目突帯剥離面において対応する位置に刺突を有するのは一方のみであることが確認できた（図版 12-1）。よってもう一方の圧痕は 2 条目突帯を割付けた際に残されたものと判断することができる。先に、底部高や突帯間隔のあり方から 2 条目突帯は 1 条目突帯の貼り付けがなされる以前に、底部下端を基準として割付けられたものと判断したが、この点は以上のような工具痕跡からも追認することができる。

**突帯** 突帯は断面台形状のものを基本とするが、中には断面が若干 M 字状を呈するものや、著しく幅細のもの、調整の甘い不整形なものなどがある。注目すべきは、ほぼすべての個体において補充技法（赤塚 1979）が確認できる点である。これは突帯の中心部分となる粘土紐を貼り付けた後に、主に下面を覆うように再度、粘土を付加する技法である。剥離した突帯の接合面には下辺寄りに明瞭な接合痕が確認でき、断面では器面との間に小三角形状の空洞が生じているのが観察できる（図版 13-3～6）。また、当古墳の円筒埴輪は突帯下辺に隙間がほとんど生じておらず、表面観察によっても補充技法が徹底されている状況を窺うことができる。ただし、1 条目突帯については例外であり、ほとんどの個体で下辺にも隙間が生じており、断面や剥離面の観察からも大半の個体で補充技法が省略されているのが確認できる。全体の調整の仕事もあって 1 条目突帯は 2 条目突帯と断面形状を大きく違えるものが多い。

**焼成** 焼成はいずれも土師質で、外面の対称の位置に 2ヶ所一対の黒斑を有する。さらに、原位置出土のものを中心に黒斑の着き方を詳細に観察すると、一方の黒斑のうち一方は 2 段目以下の低い場所に付着するに対し、もう一方は縦長に 2 段目以上にも黒斑が伸びていく傾向が認められる。中には一方の面において 2 段目以下には全く黒斑が付着していない個体も存在する。また、3 段目～口縁部までが残存した 1 では、破損や摩滅した部分もあるが、黒斑は一方の面においてのみ縦長に付着しているのが確認できる。以上から判断すると、普通円筒埴輪では黒斑が外面に 2ヶ所一対で付着するところに、一方は 2 段目以下の低い位置に、一方が 2 段目以上の高い位置にというようにその高低においても対称的な配置をとる傾向が読み取れる。

ただし、前述の底部打ち欠きの3個体については、外面のみならず内面にも広範囲にわたって黒斑が付着しており、一般的な普通円筒埴輪のあり方とは大きく異なる。

**顔料** 3段目以上が残存する1や18では外面にベンガラとみられる赤色顔料の塗布が確認できる。原位置から出土した埴輪では2段目以下しか残存しないこともあり明確な顔料の塗布は見られない。しかしながら、それらにおいても詳細に観察するとしばしば水滴状の顔料の付着が確認できることから、基本的には各個体とも3段目よりも上部には顔料を塗布していたものと推測される。

**型式細分** 普通円筒埴輪は、以上のように形態・技法をよく共有しており基本的には均一的に製作されているが、細部の特徴に基づいてさらに細分をすすめることも可能である。ここでは、以下のように工人差を念頭にa～g類に細分しながら、それぞれの特徴を説明していく。

**a類** 基部の器壁が2cm前後と極めて厚く、底部の形状が若干内凹する一群。突帯はやや細手の台形を呈するものが多い。外面2段目の器面調整にはタテ方向のものにナメ方向のハケ調整がみられる。圓化した3、4（中2）、5（上1）、6、7（中9）、8（上8）の他に上6、中14、左くびれ中1がこれに該当し、さらに原位置以外のもので2個体この類型として理解できるものがある。3や8（上8）では器形の傾きを調整するために底面に1ヶ所、小粘土塊を貼り付ける手法が確認でき、また3、7（中9）、左くびれ中1ではいずれも突帯設定のための刺突が断面三角形状に深く刻まれるなど、個体間で細部の手法においても共通点がみられる。3段目～口縁部が残存する1、2も、突帯の形状や胴部径からこの類型に該当する可能性が高い。

**b類** 脇部径が30cmを上回る大型品で、突帯はM字形だがやや下向きに貼り付けられる。内面調整はナデの他に板状工具を用いた調整が確認できる。また刺突の形状は1辺5mmほどの方形を呈する。10（中13）、12（上3）の2個体が該当するが、両者はともに底部を打ち欠かれた状態で樹立されており、前述のように大型品となる可能性が高い。また、両者は後述のように黒斑が内外面全体に付着し、焼成時に火回り不良の状態にあった可能性が高い。9の口縁部は径が大きく、刺突の形状が類似すること、器面の色調が全体的に暗いことから、この類型に該当する可能性がある。同様に11（上5）の底部も刺突や突帯断面の形状、器面の色調からこの類型に該当する可能性があるが、同個体は底部を打ち欠かれることなく樹立されていたものであるため、同個体をb類とみなすと、この類型の製作者は大型品と通常の普通円筒埴輪の両者を作り分けている可能性が生じる。底部打ち欠きの13（上11）は、外面に針葉樹による二次タテハケ調整を施し、内面はタテ方向にユビナデを加えるため、上記の一群とは明らかに異なる特徴をもつ。ただし、内外面全体に黒斑が付着するほか、刺突や突帯の形状にはb類との共通性が認められる。他に類例が存在しないため、一応、この類型に含めて理解しておく。

**c類** 14（上2）、15（中11-1）の2個体で、突帯は端面が僅まず全体が丸みを帯び、内面のナメナデは単位が規則的で明瞭な条線を残す。刺突はともに浅く隅丸方形を呈する点で共通する。

**d類** 16（上13）、17（上12）の2個体で、突帯は偏平なM字形で、1条目は下向きとなる点、2段目外面は上約1/3の範囲をヨコナナする点、内面には基部成形時の凹凸がよく残る点で共通する。小片だが上16と、原位置を離れて出土したものの中に1個体、d類に該当する可能性をもつものがある。

**e類** 全体的に器壁が薄く、底面付近が外反する一群。外面のハケ目は全体的に目が細かい。高さ12cm前後から内面には粘土紐の接合痕がよく残り、また底部外面には突帯間隔の規格工具の圧痕が明瞭に残される傾向が認められる。突帯はやや細手で稜が鋭いM字形を呈する。補充技法を省略する1条目突帯は下面の隙間が明瞭で、逆に2条目はやや太めの粘土で下面を丁寧に補充する。3段目の透孔は下段の突帯より5cmほど上の位置に下辺がくるように穿たれている。18（上7）の4段目～口縁部にかけての破片では、同様に透孔の下辺が下段突帯よりも5cmほど高い位置にあり、段間のやや上寄りに穿たれているのが確認できる。a類に該当すると理解した1や2では透孔がやや下寄りに穿たれており、こうした透孔の微妙な位置の違いにも工人差が表れている。図化した18（上7）、19（上24）、20（中11-2）、21（中6）、22（上18）、23（上25）の他に、上26や原位置を離れて出土したものの1個体がこれに該当する。

**f類** 器壁が薄手で一部に底部が外反するものを含む点でe類と類似するが、突帯が全体的にやや丸みを帯びる点や、器面調整がやや斜位となる部分を含む点、ハケ目がやや粗い点で違いがある。図化したものでは24（中5）、25（上17）、26（上23）、27（上9）などがこれに該当する。ただし、全体的には細部で特徴にばらつきもみられるため、少なくともここに含めたすべての個体を同一工人の製品とするには問題がある。現状では明確な指標を欠くけれども、突帯細部の形状や器面調整の差から、①24（中5）と未実測の中7の一群、②25（上17）と未実測の中12、上14の一組、③26（上23）、27（上9）の3グループ程度に細分される可能性を残す。

**g類** 28（上22）、29（上21）の2個体で、底部径が28cm前後とやや大振りで、突帯はe類に似るがやや扁平で各面に明瞭な条線を残す。外面のタテハケは若干左上がりとなる部分もあるが、全体的に垂直方向を志向する。

**その他** 残存状況などの資料的制約によって、現状では分類が困難なものが13個体ほどある。上記のいずれかの類型に入る可能性を残すものもあるが、非常に個性的な特徴を有する個体も多く含まれる。例えば、31（上10）は針葉樹の工具による明瞭なハケ目を残す点で普通円筒埴輪の中では異質である。また34（中4）は1条目突帯を割付けせずに底部下端に接合しており、37（中8）は1条目突帯のみが断面三角形状の特異な形態をとる。38は器面調整は他と差がないが、低位置突帯をもたない。さらに33（上4）、34（中4）、35は基部成形を行わずに直接粘土紐を巻き上げて成形していく。こうしたやや変則的な特徴を有する埴輪は全体の中ではごくわずかな量しか存在しない。突帯の割付や基部成形など当古墳の普通円筒埴輪の基本となる製作技法を放棄している点からすると、臨時に動員された製作者による製品である可能性が高く、正規の位置に突帯を貼り付けない34（中4）や38などはそうした製作者によ

るごく初期の製品である可能性も考えられる。

以上のように、将军山古墳出土の普通円筒埴輪について人工差を念頭に分類を行ったが、残存状況が均等でなく問題も残る。またハケ日も2個体を除いて条線の隆起が明瞭でないことから、ハケ日パターンの異同に則してここでの分類を検証する作業も今回は断念せざるを得なかった。したがって、人工単位を厳密に捉えているかどうかについてはなお課題を残しているが、将军山古墳の埴輪生産組織像を理解する上ではここで分類は一定程度有効と考える。この点については、器台形円筒埴輪、壺形埴輪を含めて次節で検討する。

(廣瀬・若杉智宏)

## 2 器台形円筒埴輪（図8、図版10）

受口状口縁の破片39、43によってその存在が確認できるが、これらは最上段に三角形透孔を配置し、かついずれも外面には明瞭な条線をもつハケ日が残される。40、41、44はそれらと同一のハケ日パターンをもち、40には三角形透孔が確認できる。44は底部片で、底部高は不明だが低位置突帯を持たないことは確かである。内面はナデ調整であるが、板状工具によると思われる鋭利な擦痕もみられる。いずれも底部・胴部径は30~35cm前後に復元される。

こうした特徴をもつ埴輪は小片を含めても全出土埴輪中30片ほどしかなく、後円部北側の上段斜面からまとまって出土していることから、ほとんどが同一個体である可能性も十分考えられる。しかしながら、口縁部形態の他、透孔が三角形である点、低位置突帯を持たない点、条線が明瞭で通常の針葉樹によるハケ日をもつ点で、上述の普通円筒埴輪とは明らかに特徴を異にしており、意識的に作り分けられたものと判断される。

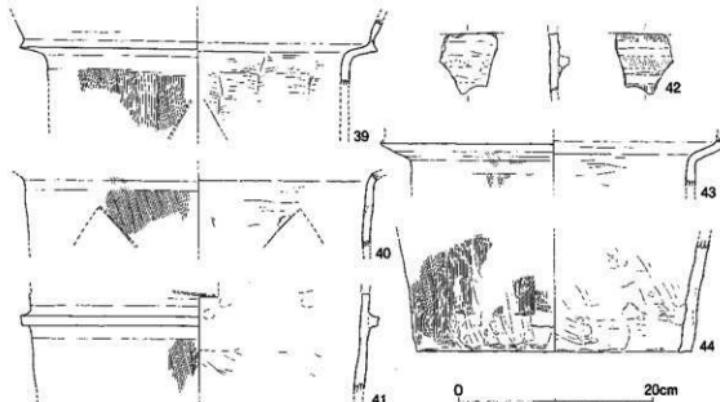


図8 器台形円筒埴輪実測図

ただし胎上は普通円筒埴輪と大きな違いがなく、基本的には同一のものを用いている。底部には黒斑が付着し、口縁部・胴部片には顔料の塗布が確認できる。

(廣瀬・若杉)

### 3 壺形埴輪 (図9~11、図版8・9)

**形態** 口縁部は二重口縁を基本とし、底部には焼成前穿孔を施す。完全に復元できたものはないが、口縁部、肩部、底部の各部位ごとにそれぞれ形状の判明するものがあり、図上で全形を推測できる。それによると、長胴化が著しく、頸部も通常の二重口縁壺よりも長い大型の壺形埴輪であったことが判明する。当古墳では確実に朝顔形埴輪と判断できる破片は不在であり、むしろ朝顔形埴輪を補完するようなかたちでこうした大型の壺形埴輪が配列されていた可能性が考えられる。

口縁部は大半が二重口縁の形態をとるとみられるが、52・53は端部が若干摩滅を受けているものの單口縁となる可能性があり、53の端部外面には擬円線状の擦痕が残る。頸部はやや外開き気味ながらほぼ直立して立ち上がる。口縁部は若干外反し、端部は一次・二次口縁とも丸みを帯びる。

**成形** 胴部下半の器壁は極めて厚く、49では底部付近の成形に幅10cm前後の粘土帯が使用されたことが断而観察によって判明する。一方、上半は胴部最大径となる付近から徐々に器壁が薄くなり、肩部上端の器壁は5mmほどと通常の土器と変わらない厚みとなる。一方、頸部は再び器壁が極端に厚くなる。ただし、頸部の下端は肩部と同様の厚みを維持しており、乾燥期間前に肩部上端から連続的に成形されている。乾燥後に太い粘土紐をその上端ないしは内面に覆い被せるようにして頸部の本格的な立ち上げが開始される。47の頸部下端内面には乾燥期間以前に施されたハケ調整が残っており、この部分が乾燥期間以前に成形されたことが判明するが、頸部の本格的な立ち上げはそのハケ調整を切って開始されている(図版16-4)。その後、一次口縁端部まで成形した後、再び乾燥期間がとられたものと推測されるが、その端部はいざれも擬口縁として外方に突出するかたちで残される。二次口縁は擬口縁端部の内側の後に粘土紐を接合して立ち上げる。

**調整** (図版15) 胴部外面の調整は普通円筒埴輪と同様に、広葉樹を原体とするとみられる全体的に条線の浅いハケ目を基調とし、底部にはヘラケズリを加える。57の底部には、ヘラケズリの隙間から先行するハケ目がわずかに確認できることから、ヘラケズリに先行してハケ目調整は胴部下半にも施されていたものと考えられる。またヘラケズリは砂粒の動きが下向きであることから、倒立状態でなされたことが理解できる。なお、破片資料中において特徴的なタタキ目を残すものが確認できた(図11)。一本一本は比較的細筋であるが、目の間隔は8mm前後と広い。ただし、目の沈みが比較的浅いこと、単位の重複がさほど顕著でないことから判断すると、タタキというよりは部分的に加えられる板オサエ状の調整であった可能性もある。

胴部内面は下半部がヘラケズリ、上半部にはナデおよび明瞭な指頭圧痕が残される。「指頭圧

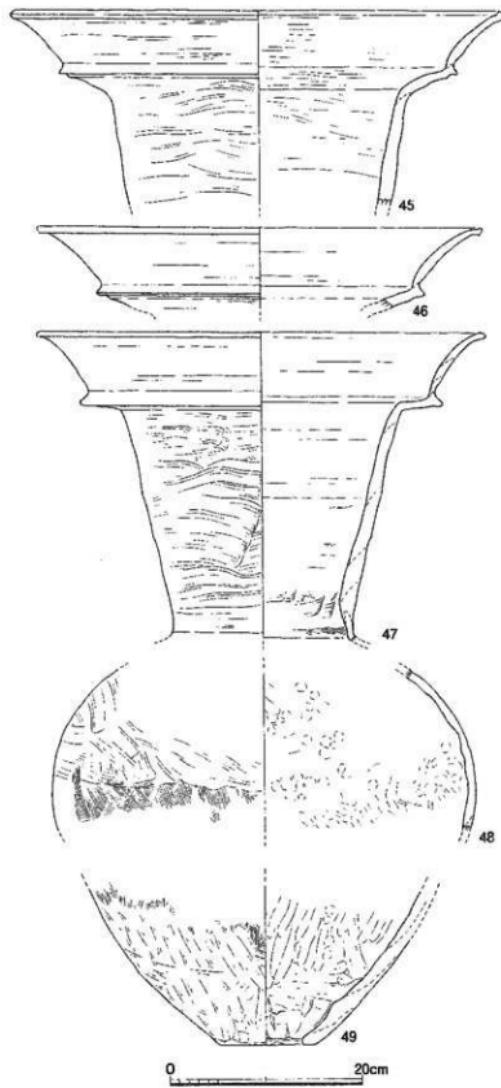


図9 壺形埴輪実測図1

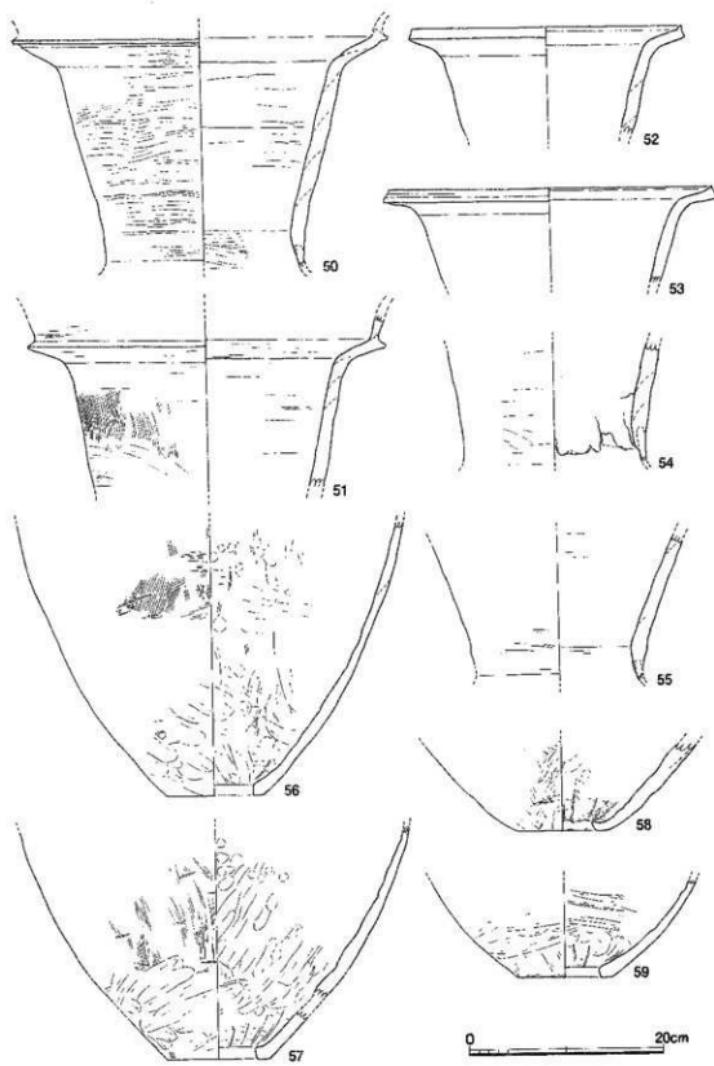


図 10 塚形埴輪実測図 2

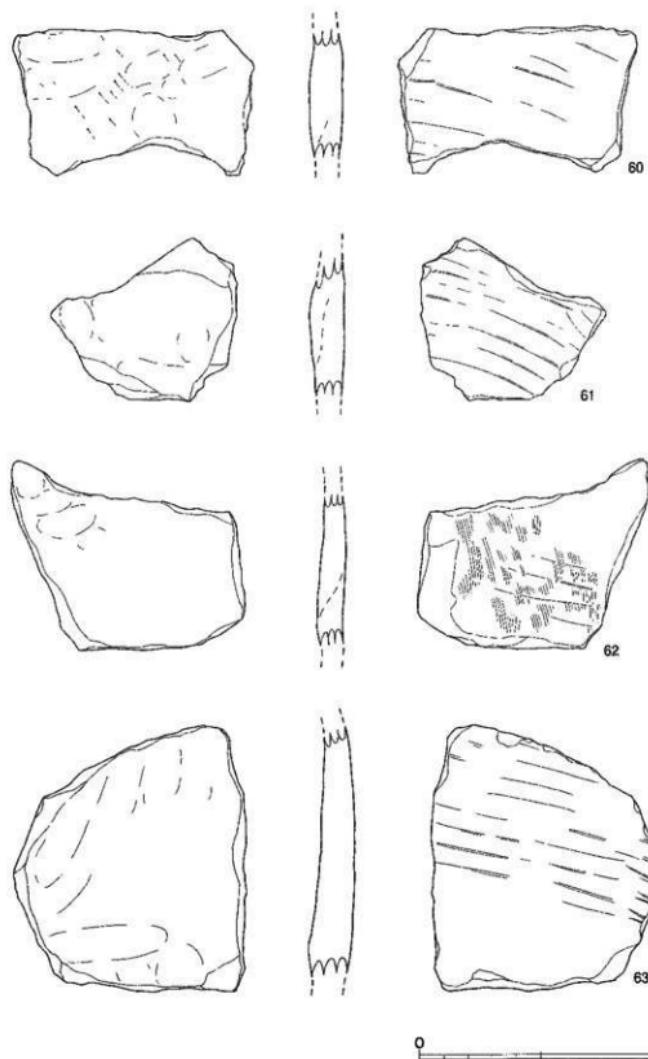


図 11 壺形埴輪実測図 3

痕」は単位内に指紋ではなく並行する 2 ないし 3 本の降線が残されていることから、厳密には拳の第 2 間接部分の压痕であるとみられる。外面のハケあるいはタキを施す際に、内面側に拳を当てて器面を支えた痕跡である可能性がある。下半部のヘラケズリは砂粒の動きが上向きで、外面とは異なり成立状態で施されたと判断できる。また穿孔部周辺は横方向に削り取るが、円周に沿って断続的に調整されていることからすると穿孔後に施された可能性が高い。

口縁部の調整は、内外面とも横方向のナデである。ただし、外面および内面上半は顔料が鮮明に残り、顔料の塗布に用いた原体の擦痕によって当初の調整の痕跡はほとんど観察できない。口縁部や頸部内面で顔料の及ばない部分では鋭い擦痕がみられ、部分的に板状の工具端部の痕跡もみられるが、擦痕の条線は胴部外面にみられるハケ目よりも細かくかつ浅い。

**穿孔** 穿孔面の状態が平滑なもの (56・57・59) と、凹凸を呈するもの (49・58) の 2 者がある。後者については、工具による穿孔の痕跡とは考えがたく、凹凸のあり方はむしろ成形当初から底部が開放されていた状況を示唆する。最終的に穿孔面が鋭利な工具で切り取られている前者についても、成形時には底部が開放されていた可能性も十分考えられよう。両者とも穿孔面は最終的にナデ調整されており、そのナデの際に生じた粘土が外面のヘラケズリに薄く被さるのが確認できる個体がある (図版 15 - 49)。

**顔料** 赤色顔料は、外面は肩部から口縁部まで、内面は頸部上半から上部に塗布される。ただし 47 では、乾燥期間以前に成形された頸部下端内面にも顔料が付着している。頸部立ち上げ時の粘土紐がその顔料付着面に覆い被さることからも、肩部外面の顔料は頸部が成形される以前、肩部が完成して乾燥期間に入る直前段階に塗布されたものとみられる。顔料塗布に用いられた原体は、隆起は不明瞭ながら単位ごとに規則的に平行して条線が走る。器面調整と同様に板状の工具が用いられた可能性も考えられる。

(廣瀬)

#### 4 動物形土製品 (図 12、図版 10)

前方部前面の上段斜面から出土したもので、前方部墳頂の前面寄りの部分に置かれていたものが転落したものである可能性が高い。頭部 2 片、胸部 2 片が出土しており、概要報告で「動物埴輪」とされたものがこれに該当すると考えられる。通常の動物埴輪よりは小型で、円筒の基台部に載せられていた状況も窺えないため、動物形土製品とするのが妥当であろう。

頭部 2 片は大きさ、形状が大きく異なることから、少なくとも 2 個体以上の存在が確認できる。最も残りのよい 65 は、顔の先端を欠くが、工具による刻みによってほぼ水平に目が描かれている。頭頂部の左右には小さな綫長の剥離痕跡があり、耳が付着していたものとみられる。全体の形状は、肩幅よりも頭が小さく、首も一定の長さをもつ点に特徴がある。さらに胸部両脇にも径 6 cm ほどの剥離痕跡があり、脇部にはほぼ垂直に取り付く前足が存在したことが窺える (図版 16 - 5)。

66 は胸部後方の破片とみられ、同様に剥離痕跡をもち後足が接合されていたものと考えられる。65 とは直接は接合しないものの、同一個体である可能性も否定できない。胸部の残り 1 片

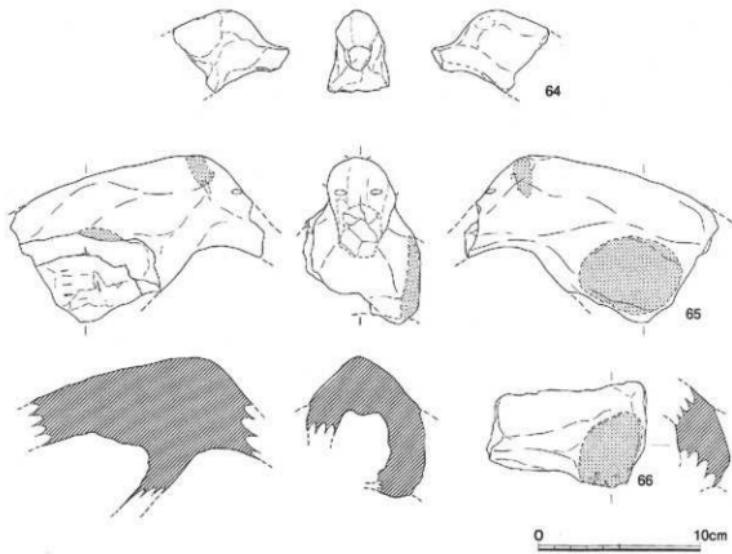


図 12 動物形土製品実測図

も小片だが 65 や 66 に伴うものと推測される。これらの胴内部は中空で、内面には成形に伴う工具や皺状の痕跡が残る。また、外面の剥離面には部分的ではあるが接合を強化するためとみられる小さな刻みが施されている（図版 16-6）。耳や足の存在から四足獣になることは確実であるが、現状では何を表現したものなのか判断に苦しむ。

64 は小型の頭部で、細く突き出した嘴状の先端が残存する。目や耳の表現をもたず、顔の長さも 65 よりも確実に短い。胴部の構造は不明であるが、この個体に関してはその形状から鳥を表現したものである可能性も残される。

いずれも胎土は埴輪と同様なものを用い、表面には赤色顔料を塗布する。 (廣瀬)

## 第3章 将軍山古墳出土埴輪の検討

### 1 配列状況の復元

将軍山古墳の埴輪は、普通円筒埴輪に加えて、器台形円筒埴輪、壺形埴輪の計3種からなることが判明した。さらに後円部墳頂の埋葬施設を調査した小林の記述によると、調査の際に家形埴輪やその他の形象埴輪が後円部墳頂に樹立されていた確証が得られたという（小林 1956）。しかしながら整理作業の過程で形象埴輪の破片がまったく確認されていないことや、後述する円筒埴輪の編年観からすると、将軍山古墳に盾や蓋といった定式化した器財埴輪が伴っていた可能性は薄い。したがって、「その他の形象埴輪」については、本書で公表した動物形土製品の類である可能性が十分考えられよう。ただし、定式化した器財埴輪に先行して出現する家形埴輪については、当古墳においても十分存在した可能性は見込まれる。小林の記述からも後円部墳頂に家形埴輪の配置があったことはほぼ確実と考えられ、さらにそれを取り囲む方形埴輪列や墳頂平坦面を円形に囲繞する埴輪列が存在したことにも十分推測される<sup>(1)</sup>。また、器台形円筒埴輪は後円部北側上段斜面からごく少量出土しているのみであり、後円部墳頂の要所で限定的に使用された可能性が高い。

一方、前方部前面や西側のくびれ部にかけて原位置で出土した埴輪はすべてが普通円筒埴輪であった。よって、各段平坦面は普通円筒埴輪を基本として配列されたとみられる。その樹立間隔は心々15～18mで後の事例と比較するとやや広いが、前期中葉の配列としては一般的なあり方と言える。ところで、原位置で出土した埴輪列中において3個体、底部が打ち欠かれた状態で樹立されていたものがあった。これらは胴部径が他よりも一回り大きく、後述のように墨斑が内外面全体に付着するなどの共通点をもつ。これら3個体の樹立位置は上3、上11、中13であり、列中において規則的に配置されたような状況は窺えない。透孔の形状や配置、突蒂間隔は他の普通円筒埴輪と全く同一であり、また当古墳では朝顔形埴輪が不在とみられることからも、底部打ち欠きの個体は通常のものより段数、器高が上回る大型の普通円筒埴輪であった公算が高い。こうした大型品は、本来は墳頂部の方形埴輪列等での使用を念頭に製作されたものである可能性があり<sup>(2)</sup>、各段平坦面での周縁に転用される際に底部を打ち欠き、通常の普通円筒埴輪との高さ調整を図ったものと推測する（廣瀬 2002）。なお、墳丘裾周りの埴輪列は検出されておらず、当初から存在しなかったとみられる。

これに対して壺形埴輪は、正確な出土位置が不明であるため問題も残るが底部が完存する59は、注記によれば東くびれ部墳頂で原位置を保って出土したらしい。実際に前方部上段斜面からは壺形埴輪の破片が多数出土していることから、前方部墳頂には壺形埴輪の配列が確実視される。また、後円部上段斜面の葺石転落石中からも比較的大きな壺形埴輪片が出土しており、壺形埴輪は後円部墳頂でも一定量配列に用いられたものとみられる。前章でも述べたように、当古墳では

破片資料を含めても明確に朝顔形埴輪と判断できるものは見当たらない。したがって壺形埴輪は朝顔形埴輪を補完するような存在であった可能性が考えられる。壺形埴輪は非常に大型であり図上復元では普通円筒埴輪と器高がほぼ一致する。前方部上段斜面の葺石転落石中からは普通円筒埴輪も一定量出土していることからも、壺形埴輪は埴頂埴輪列中において普通円筒埴輪とともに配列されていた可能性が十分考えられる。

古墳全体の埴輪の樹立本数については、埴頂部の厳密な配列状況や樹立間隔が明確でないため試算が難しい。方形埴輪列については有無が明確でないため試算の対象から除外することとし、仮に後円部・前方部墳頂に壺形埴輪と円筒埴輪からなる埴輪列、後円部・前方部とも中、下段平坦面については全て円筒埴輪による埴輪列を想定し、樹立間隔を後円部墳頂で0.5m間隔、それ以外では1.5m間隔として試算した場合、円筒埴輪約365本、壺形埴輪約40本、总数で400本余りが樹立されていたものと推定される。  
(廣瀬)

## 2 生産組織像をめぐって

次に、将軍山古墳における埴輪の生産組織について検討を加えておくことにする。

まず、普通円筒埴輪については、前章での報告の際に工人差を念頭にa～g類に細分を試み、さらにそれらの類型に属さない製作にさほど熟練していないとみられる工人の製品が小量存在する点を指摘した。ただしそこでの検討については、資料的制約から透孔の穿孔方法などが一律に扱えず、突帯の形状も補充技法を用いる2条目とそれを省略する場合の多い1条目では形態に差異が生じるなど、通常、工人差が表れやすい属性の検討が困難であったために、必ずしも徹底した分類とはなっていない。またようやく近年、分析に活用され始めたハケ目パターンも、当古墳の場合、広葉樹とみられる工具を用いるために隆起が不鮮明で、その同定作業も今回は断念せざるを得なかった。

しかしながら、上記のような分類においても、a類やe類については比較的それぞれの特徴がはっきりしており、かつ該当する個体が一定量存在するため、類型としては安定した存在となっている。他の類型の個体数がさほど多くないことからも、これらa、e類を製作した工人は将軍山古墳における普通円筒埴輪の生産の中心的な存在であった可能性が高い。出土量は少ないが、大型品の製作を担当したb類の工人も同様に評価し得る。一方、ここで見出した類型の他にもさらに複数の工人の存在が見込まれることから、当古墳では比較的多くの工人が普通円筒埴輪の生産に従事したことになる。

筆者が先に検討した池田茶臼山古墳では、全体で調整手法が共通し、同一のハケ目パターンが多数確認されたことから、ごく少数の工人が極めて近い位置関係で円筒埴輪の生産に従事した姿が推測できる(廣瀬2003a)。これと比較すると、将軍山古墳の生産組織は一回り大きな規模を有していたことになるが、それには池田茶臼山古墳よりも将軍山古墳の墳丘規模が大きく、樹立本数も350本を上回ると試算されることとも関係するであろう。生産の中心的存在であったと考

えられるa、b、e類の工人を除くと、その他の製作者はいずれも牛產量をこなすために臨時に動員されたような人々であった可能性が考えられ、とりわけ最下段の割付や基部成形を行わない製作者にはそうした性格が強く推察される。ただし、そうした状況にあっても、多くの個体で低位突帯や各段の割付、透孔の配置が共有されていることからすると、全体としては統制がよく行き届くような密接でまとまりをもった生産組織像を推測することができよう。

一方、器台形円筒埴輪については、後円部北側上段斜面から小片がごく少量出土したに過ぎず、いずれも同一のハケ目をもつ点ですべて同一個体の可能性すらある。したがって、その生産の状況について詳しく検討することはできないが、受口状口縁をとり三角形透孔を配する点、低位突帯をもたず隆起の明瞭な通常のハケ目が残される点で、普通円筒埴輪とはその特徴を大きく違えている。ただし、胎土は肉眼観察上、普通円筒埴輪と大きな違いはない。普通円筒埴輪の中に2個体ながら通常の針葉樹のハケ目が認められる点からも、器台形円筒埴輪と普通円筒埴輪とは基本的に同一の工房で意識的に作り分けられたものであると理解できる。

壺形埴輪については、分類を行う上で胎土の差に着目することが極めて有効である。すなわち、一方は、素地の色調が乳白色を呈する精良な胎土で、器壁内にも炭素が残存しておらず断面も鮮明な乳白色を呈する点できわめて特徴的である。これを胎土aとする。もう一方は、石英や長石等を多く含む円筒埴輪とほぼ同様の胎土であり、これを胎土bとする。こうした胎土の違いに着目すると、胎土aのものは、底部の穿孔面に凹凸を残す傾向があり、さらに口縁部は擬口縁部の突出がとりわけ顕著で、顔料塗布に伴う横方向の擦痕が明瞭に残るなど特徴がまとまる。したがってこれを壺形埴輪a類とする。これに対して胎土bは、穿孔面が平滑なカット状の面を呈するもので、これに対応するとみられる口頭部51では、擬口縁端部の突出が小振りで、顔料塗布の擦痕がそれほど鮮明でなく頸部に縱方向のハケ目が確認できる点でa類とは異なる。これを壺形埴輪b類とする。

このように壺形埴輪は手法と胎土との対応によってa、b類の2者に比較的容易に識別でき、基本的にはこの2者による小規模な牛產が推測される。ただし、55では頸部下端の乾燥単位以前に成形された部分で胎土a類が、それより上部で胎土b類が使用されている。したがって壺形埴輪a、b類では胎土の使用に一定の偏りが認められるものの、その差は工房を越えるような決定的なものではなく、むしろ場合によっては胎土が共有されることがあったと理解できる。また、両者とも器面のハケ、ケズリといった調整手法は細部まで非常に似通っており、広葉樹のものとみられるハケ目原体を用いる点でも共通する。胎土bと広葉樹とみられるハケ目原体の使用は普通円筒埴輪との共通点でもあり、壺形埴輪は普通円筒埴輪とも製作時に一定の関係を有していたことが窺える。

以上の検討から、将軍山古墳における普通円筒埴輪、器台形円筒埴輪、壺形埴輪の3者は、それぞれが一定の距離をもなながらも、基本的には同一の工房で相応に関係をもちつつ生産されたものであると理解される。円筒埴輪に壺形埴輪が共併する事例は近畿中部ではなく、当古墳の壺形埴輪の系譜については、次章で詳述しているように東四国地域との関係が濃厚であ

ると考える。しかしながら、これら3者が共存し相互に関係をもって生産された状況からは、当古墳では3者が同じ思想的脈絡をもつ埴輪として認識されていた点は明らかである。前述のように当古墳では確実な朝顔形埴輪が不在であることからも、壺形埴輪がそれを補完する存在であった可能性も見込まれる。それぞれの埴輪の配置場所にも一定の傾向が見出せることからも、使用の場では3者の埴輪がそれぞれ器種的な脈絡に置き換えられることで全体の配列がなされたものと理解する。

(廣瀬)

### 3 黒斑からみた焼成方法

従来の埴輪の報告では黒斑の付着状況についてさほど詳細な検討はおこなわれてきていません<sup>(3)</sup>。一方、近年、小林正史らによる焼成実験を踏まえた研究によって弥生土器の焼成技術（覆い型野焼き焼成）の理解は飛躍的に深まっている（小林正ほか2003、長友ほか2004）。埴輪の焼成技術も基本的には弥生土器のそれを継承したものと理解できるため、ここでは小林正史らの研究成果に依拠しつつ若干の検討をおこなっておく。観察は資料数の豊富な普通円筒埴輪を対象とし、かつ2段目までがほぼ全周する資料を中心とした（図13、14）。

報告でも述べたように黒斑は外側に2ヶ所一対で付着するものが多い。図13・14には小林らの方法に従い黒斑の付着位置によって外面をA・B面に二分して図化した。内面には基本的には黒斑は付着しないため図化していないが、前述のように底部打ち欠きの3個体には内面にも黒斑がみられる。したがって、この3個体のみは外面のA・B面に対応させて内面も図示した。

まず図を見ても明らかなように、外面の2ヶ所の黒斑は両者で決して均等に付着しているのではない。一方は黒斑が2段目下以下の低い場所に付着する傾向が見出せるのに対し、もう一方は縦長に2段目以上にも黒斑が伸びていき、9～13のように2段目以下に全く黒斑が付着しないものも存在する。図では前者を外A面、後者を外B面として図示しているが、結論的には外A面にみられる黒斑が地面に置かれた燃料を炭素の供給源として形成される「設置面黒斑」で、外B面にみられる黒斑が上部に被せられた覆いからの燃料によって形成された「覆い接触黒斑」であると理解する。

外A面にみられる黒斑は2段目以下の小範囲に付着する場合が多く、不規則でまだらに形成される傾向がある。やや広範囲にみられる場合もその周囲は色調が薄く、黒斑が付着しない部分との境界が曖昧となる傾向が認められる。稀に2条目の突帯付近に黒斑が付着している7や9のような個体もあるが、それらも突帯の端面のみに黒斑が付着している。こうしたあり方は、外A面が焼成時に下側にあって、地面に接した部分のみに黒斑が付着した状況を明瞭に物語っている。また外A面では5や14のように黒斑に枝状を呈する部分が確認される場合があり、これらは薪が直接接触した痕跡である可能性が考えられる。一方、外B面の黒斑は縦長に安定的に付着し、その境界もコントラストが比較的明瞭であるため、藁燃料を中心とする覆いとの接触によって形成された黒斑として理解できる。

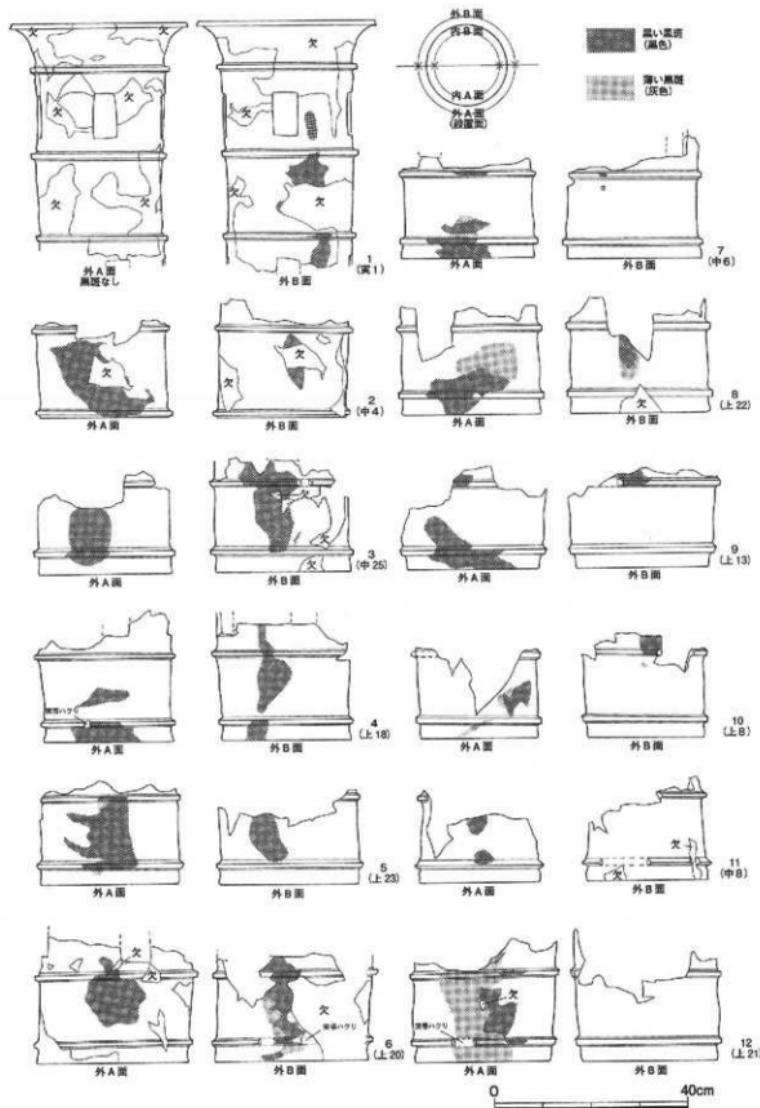


図 13 普通円筒埴輪における黒斑の付着状況 1

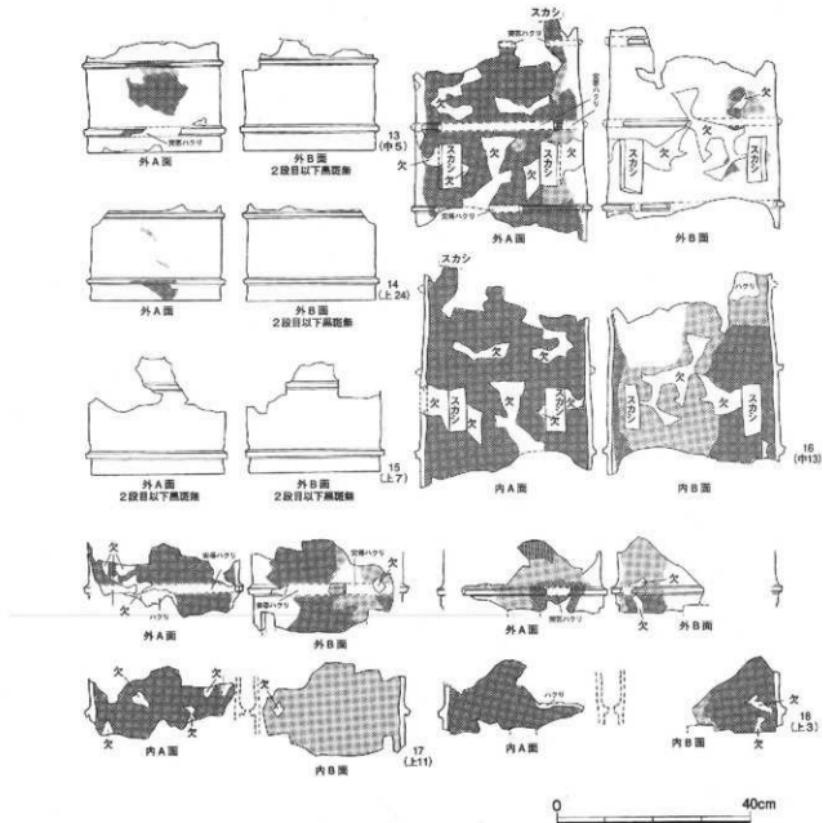


図 14 普通円筒埴輪における黒斑の付着状況2

ところで、3段目～口縁部までが残存した1では外A面に黒斑がみられず外B面のみに綫長に黒斑が付着しているが、こうしたあり方は2段目以下の黒斑の付着状況と対応しており、この個体を通して上部の黒斑のあり方を理解できる。すなわち、將軍山古墳の円筒埴輪では原則として、設置面黒斑は基本的に2段目以下に限られ、外A面では3段目以上には黒斑が付着せず、一方、覆い接触黒斑である外B面の黒斑は2段目よりも上部を中心に綫長に付着するという傾向を読み取ることができる。外A・B面で黒斑の付着範囲に高低の偏りが認められる点については、当古墳の円筒埴輪の口縁部が外反する形状をとることに起因すると考えられる。すなわち各個体は基本的に横置きされているものの、外反する口縁によって若干の傾きが生じていた可能性が高い。

く、設置面黒斑が低い位置に偏るのはそのためとみられる。

一方、普通円筒埴輪の中でも底部が打ち欠かれた状態で樹立されていた大型品と推測される3個体は、内外面ともに全体的にわたって黒斑が広く付着しており、上記の一般的な黒斑のあり方とは大きく異なる。3個体とも、外A面ではほぼ全面に黒斑が付着し、薄くなりつつも一部は外B面にも及ぶ。また、16や17ではそれとは別に外B面に覆い接觸によるとみられる黒斑が認められる。内面はほぼ全面に黒斑が付着するが、内B面では黒斑が薄くなる、あるいは完全に途切れる部分がある。以上の点から、A面よりもB面の方が焼成温度が高く、焼成時にはB面側が上になるよう設置されたことはほぼ間違いない。ただし、黒斑が途切れた部分でも、その色調は一般的なものよりも暗く、全体的に焼成温度がさほど高くなかったことが窺われる。

小林正史らの実験結果を参考にすると、これら3個体にみられる黒斑は「火回り不良残存黒斑」である可能性が高い。円筒埴輪は筒抜けであり透孔をもつため通常は内面にもよく火が回る。よって、焼成不良となるには火回りを遮断する何らかの障害がこれらの埴輪の周囲に存在した可能性が十分考えられる。底部を打ち欠くこれらの3個体が他とは段数の異なる大型品であったことはほぼ間違いない。全体の中での生産量もさほど多くはなかったと考えられることからすると、まずこれらの「大型品」が焼成土坑の中心に数本一括して置かれ、周囲をとり囲むように残りの多くの埴輪が設置されていった状況が強く推察される。すなわち土坑の中心に置かれた「大型品」には薪からの火が十分に行き届かず、また口縁部や底部も周囲の埴輪に塞がれることによって内面にも黒斑が残存する結果となったものと推測する。

なお、15については残存する範囲において黒斑が全く確認できなかった。この点については、  
今日は要因を明らかにすることはできていない。  
(廣瀬)

#### 4 動物形土製品について

通常の動物埴輪よりは小型で、円筒の基台部に載せられていた状況も窺えないため、動物形土製品としたが、胎土は円筒埴輪とほとんど差なく、埴輪とともに製作された可能性がある。

動物形土製品は類例が乏しく、四足獸としては加悦町鰯子山1号墳や同作山1号墳(佐藤1992)、岡山県橋原町月の輪古墳(近藤編1960)等で犬や猪等の出土が知られるにすぎない<sup>14)</sup>。それらと比較すると、将軍山古墳例は非常に大型であり、一般的なものが中実成形するのに対し将軍山古墳例では中空となる点で大きく異なる。

そもそも将軍山古墳例については、何を表現したものか理解に苦しむ。埴輪に表現される四足獸を参考にすれば、鹿、猪、犬、牛などが候補にあがるが、鹿であれば角が強調されるはずであり、また頭や鼻の形からは猪や犬を想定するのも困難である。全体的な形状からは牛である可能性が残されるが、角の痕跡がみられないことや耳の形状が不明である点など問題が残る。

しかしながら、現状では類例が少ないので、将軍山古墳の四足獸の動物形土製品は古墳時代前期の一定の規模をもつ古墳から出土したものとしては最も古い事例となる点で重要である。亦

色顔料の塗布があり、前方部前面の上段斜面から出土していることからも、本来は前方部埴頂における葬送儀礼において重要な役割を占めたものである可能性をもつ。今後、類例の増加をまって系譜や年代、性格等についてさらに検討を深めたい。

(廣瀬)

## 5 塩輪からみた将軍山古墳の築造時期

これまで将軍山古墳の築造時期については、漠然と前期後半段階に位置づけられてきた。将軍山古墳の各種埴輪の系譜や位置づけについては、次章で詳しく検討しているのでそちらを参照して頂きたいが、少なくとも当古墳出土の円筒埴輪が前期前半以来の古い型式的特徴を依然として引き継ぐものであったことが判明した点は、これまでの将軍山古墳の年代観について再検討を促す重要な成果と考える。すなわち、従来の埴輪編年の枠組みで捉えるならば将軍山古墳の円筒埴輪は川西編年Ⅰ期（川西 1978）の範疇に収まることになるが、一方で、当古墳の円筒埴輪にみる外反口縁は、向日市寺戸大塚古墳など他古墳におけるこの種の口縁部と比較してその外反度はさほど強くはない。むしろⅡ期の円筒埴輪の口縁部との型式的な近さを認めることができることからも、Ⅰ期の円筒埴輪の中では新しい段階に位置づけられる可能性が高い。また壺形埴輪については、その系譜案に十分留意する必要があるが、壺形埴輪の大まかな変遷観において器形の大型化は新しい時期の特徴として理解できる。ただし、農中市小石塚古墳（柳本・田中編 1980）や東大阪市美園古墳（渡邊編 1985、畑 1998）出土の壺形埴輪と比較すると、未だ底部を完全に開放して作る段階には至っておらず、この点で長胴化した壺形埴輪の中では古相に位置づけることができよう。

将軍山古墳の築造時期を新しくみるこれまでの見解の多くは、堅穴式石槨出土の副葬品目中に鐵形石製品や方形板革綴短甲のものとされる押付板片<sup>(15)</sup>が含まれる点を重視している。しかしながら壺形石製品については、桜井市メスリ山古墳（伊達編 1977）でⅠ期の円筒埴輪と壺形石製品が共伴していることから、その存在をもって築造時期を大きく下げる考え方ではないと考える。一方で、今のところ方形板革綴短甲と古式の円筒埴輪との確実な共伴例は他に存在しない。したがって将軍山古墳の築造時期を大きく遡らせて考えることも現状では困難である。ただし、その場合でも方形板革綴短甲の初現を前期古墳編年のどの段階に位置づけるかはなお流動的であり、むしろ将軍山古墳における同短甲の存在をもってその初現を円筒埴輪編年のⅠ期末に置くことも全く不可能ではない。したがってここでは、ひとまず将軍山古墳の築造時期を前期中葉でもその後半段階に位置づけることとし、古相の仿製三角縁神獸鏡や堅矧板革綴短甲が出土している佐保川対岸の紫金山古墳よりは若干遅れて築造された可能性を考えておきたい。しかしながらより厳密な位置づけについては、今後、後円部堅穴式石槨出土の副葬品の実体が明らかになった段階で再考を期したい。

(廣瀬・若杉)

## 註

- (1) 免山篠氏が地元の方から聞き取った情報によると、少なくとも後円部墳頂には円形にめぐる埴輪列が存在したらしい。
- (2) 桜井市メスリ山古墳では後円部墳頂の方形埴輪列中に超大型の円筒埴輪が規則的に配設されており、向日市寺戸大塚古墳でも方形埴輪列の周囲に他を上回る径の大きな円筒埴輪が置かれている（京大向日丘陵古墳群調査団 1971）。犬木努はメスリ山古墳の方形埴輪列中における大型の円筒埴輪を、八尾市心合寺山古墳出土圓形埴輪を参考に「圓い」の構造物としての「柱」ないし「杭」を表現したものと理解する（犬木 2002）。
- (3) ただし、京都府山城町平尾城山古墳の調査報告書では付着状況の模式図を提示しながら黒斑のあり方が具体的に考察されており、先駆的な業績として評価に値する（小畠・五島 1990）。
- (4) 周辺地域では安威川下流の溝呂遺跡において鷹形土製品が出土しているが（合田耀 2000）、それらも現状では直接的な関係は認められない。
- (5) かつて野上丈助は符軍山古墳の押付板を堅粕板革縦短甲のものとして紹介している（野上 1969）。一方、近年、橋本達也は方形板革縦短甲を検討する中で同資料を扱っている（橋本 1996・1998）。
- (6) 大賀克彦は御所市鶴都波1号墳における舶載三角縁神獸鏡と方形板革縦短甲の共伴を有意とみなし、自身の編年の前IV期（前期中葉）に出現すると理解している（大賀 2002）。

## 第4章 考察－將軍山古墳出土埴輪の系譜と意義－

### 1 將軍山古墳出土円筒埴輪の系譜と位置づけ

#### a はじめに

三島には北摂山地南側の丘陵上に数多くの前期古墳が存在しており、桧尾川・芥川・安威川・佐保川といった小河川がそれらの丘陵を分けるように南流している。主な古墳を東からみていくと、桧尾川東岸に安満宮山古墳が位置しており、芥川西岸の丘陵上には弁天山A 1号墳、B 1号墳、C 1号墳といった前方後円墳が連続して築かれ、その南には郡家車塚古墳が存在する。さらに西方の丘陵上には開鶴川古墳が築かれており、佐保川流域には西岸に紫金山古墳、東岸には將軍山古墳が位置する。これら三島の前期古墳は全国的に有名な古墳が多いが、これまで当地域の古墳の埴輪に関する情報はほとんど知られてこなかった。しかしながら、近年、京都大学考古学研究室による紫金山古墳の埴輪調査や茨木市史編さん室による將軍山古墳出土埴輪の整理作業によりその内容が明らかになってきたことで、当地域における前期古墳の埴輪について検討できる環境が整いつつある。ここでは將軍山古墳の埴輪の基本的な情報を再度整理した上で、系譜や年代などの問題について考察をおこないたい。

#### b 將軍山古墳出土埴輪の基礎的検討

当古墳からは普通円筒埴輪、器台形円筒埴輪と壺形埴輪が出土している。壺形埴輪については次節でまとめられているため、ここでは普通円筒埴輪と器台形円筒埴輪を中心扱う。

**形態的特徴** 普通円筒埴輪と器台形円筒埴輪の諸特徴は対照的な様相を示している。具体的に挙げると、前者は外反口縁で透孔は方形であり、器面調整はハケ日が不鮮明であり、底部には低位突帯が巡る。これに対し後者は受口状口縁で三角形透孔をもち、針葉樹の工具による明瞭なハケ日がみられ、低位突帯を持たない。このように普通円筒埴輪と器台形円筒埴輪は相異なる特徴をもち、明確に区別できる。

以上の形態的特徴をふまえ全形の復元をおこなうが、器台形円筒埴輪に関しては資料数が少なく復元が困難である。そのため全形復元については、器台形円筒埴輪を除外して検討を進めることする。

**突帯割付方法の復元** 全形の復元には底部高や突帯間隔の理解が不可欠であり、突帯の割付方法が重要となる。そのためにまず割付方法の検討から始めたい。

普通円筒埴輪の底部高は4～5cmと他段の突帯間隔に比べて著しく低い。各段の突帯間隔についてみてみると、2段目の間隔の判明しているものは34を除くといずれも14cm前後をはかる。3段目以上の突帯間隔が判明するものは1、2、10、18であるが、その間隔はすべて約18cmで揃うことが確認できる。このように2段目と他段の突帯間隔との間には差異が認められ、その間

隔差は約4cmである。この差は底部高とほぼ等しく、のことから以下のような突帯割付方法を復元することができる。

まず2条目突帯が底部下端から他の突帯と同じ間隔(18cm)で割付けられ、その後1条目突帯が約4cmで割付けられる。3条目突帯は2条目突帯の上辺から約18cmで割付けられ、4条目以上の突帯もその1段下の突帯を基準に同様の方法で割付けられる。このような割付方法を想定すると、2段目の突帯間隔が他の段より底部高の分だけ短くなることになり、突帯間隔の差が底部高と等しくなることを矛盾無く説明できる。またこの割付方法は、1条目突帯に切られる突帯設定工具の痕跡があることや2つの設定工具痕が近接して底面付近に残存している例があることからも裏付けられる。

以上の割付方法の復元から考えると、当古墳の埴輪の突帯間隔には14cmと18cmという2種類の規格が存在したわけではなく、1条目突帯を除いたすべての突帯は等しく約18cmで割付けられていたと理解できる。

**全形の復元** 以上の割付方法の検討をふまえ、全形復元をおこなう。

普通円筒埴輪の口縁部から胴部にかけての形状は1からほぼ知ることができ、1と原位置出土の個体とを合わせ全形を復元する。1は口縁部から下3段分までが残る資料であるが、上から2段目

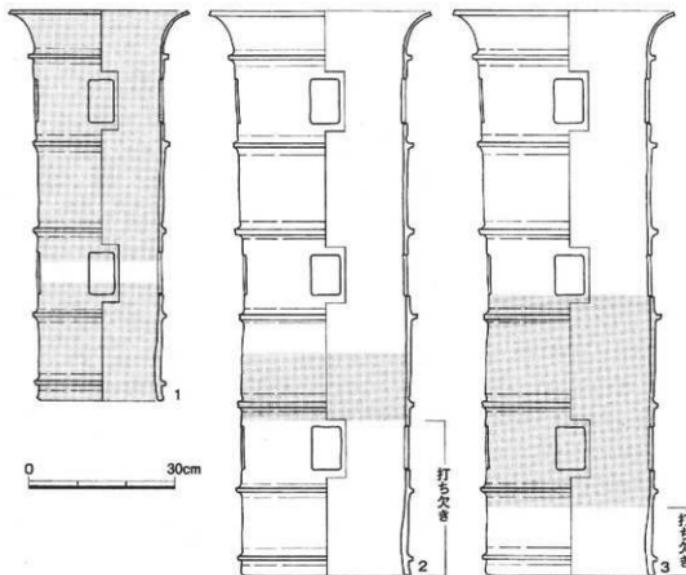


図15 普通円筒埴輪全形復元図(1、10、12、22より作成。トーンは残存範囲を示す。)

と4段目に方形透孔が確認できる。また、原位置出土品で確認できるものはいずれも透孔が（下から）3段目に配される。この透孔の配置パターンと器高や底径など全体のバランスを考慮すると、1の上から4段目が完形時の3段目に相当すると考えられ、全形は5条6段に復元できる。透孔は4方向で3段目と5段目に配置されることとなる。口縁部高が6～9cm、3、4、5段目の突帯間隔が約18cm、2段目の突帯間隔が約14cm、底部高が約4cmであり、器高は（6～9+18×3+14+4）=78～81cmとなる（図15-1）。

また、当古墳には数は少ないが上述の普通円筒埴輪よりひとまわり径の大きい埴輪が存在する（10、12、13）。それらはいずれも径が30cmを超えるもので、前方部平坦面より底部を打ち欠かれた状態で出土した。打ち欠きの目的が器高の統一であったとすると、5条6段に復元した普通円筒埴輪とは突帯条数や器高が異なっていた可能性が高い。これら大型円筒埴輪と考えられるものはわずか3個体しかなく、得られる情報は少ない。確実な復元は困難であるが、打ち欠き前の本来の姿を考えてみたい。

10から得られる突帯間隔は17.5cmであり、通常の普通円筒埴輪の突帯間隔（18cm）と大きな差は認められない。12、13は透孔のあく段で打ち欠かれているが、その段を普通円筒埴輪の1段目と対応させて両者の器高を揃えたとすると、12、13にはさらに上に4段あったと推定される。また、前述の普通円筒埴輪の復元案より3段目と5段目に透孔が穿たれていたと想定すると、打ち欠かれた段は本来（打ち欠き前）の3段目であったと考えられよう。以上より、12、13から想定される復元案は7条8段、器高は115cm前後となる（図15-2）。

一方、10については、非常に残存状況がよく、残存高は約45cmをはかる。原位置出土品で最も残りのよいものが残存高約28.5cmであるので、それよりさらに1段分ほど多く残っていることになるが、10と他の埴輪が同じ深さで樹立されていたとすると、残存にこれほど差が認められるのは不自然である。このことから、10は前方部平坦面の他の埴輪より1段ほど深く埋められていた可能性が考えられる。またこれは10と12、13の打ち欠き位置が異なることとも関連している。12、13では透孔のあく段が打ち欠かれているのに対し、10の打ち欠かれた段には透孔はみられない。それは先の復元案では2段目に相当すると考えられ、打ち欠き後では、10は12、13より1段分高かったと推定できる（図15-3）。そのため、10を他の埴輪より深く埋め、その差を解消し、器高の統一を図ったと理解できる。

以上、大型品の全形について検討してきたが、上記の復元案は口縁部の形態や底部高、透孔の配置パターンが通常の普通円筒埴輪と共通するとみるなど多くの前提に基づいたものであり、あくまでも推測の域を出ない一案であることを明記しておきたい。

#### 樹立状況の復元 それぞれの埴輪の出土状況から、墳丘における樹立位置を考えてみたい。

前方部の中・下段平坦面から原位置で出土したものはすべて普通円筒埴輪で占められており、前方部平坦面には普通円筒埴輪が巡らされていたと理解できる。樹立間隔は心々距離で15～18mである。後円部中・下段斜面からは1のほか多数の普通円筒埴輪片が出土しており、原位置で出土したものは確認されていないが、後円部平坦面にも普通円筒埴輪が並べられていた可能性が

高い。また、後円部上段斜面からは器台形円筒埴輪、普通円筒埴輪がともに出土しており、後円部墳頂には両者が樹立されていたと考えられる。器台形円筒埴輪は後円部上段斜面からのみの出土であるため、後円部墳頂に限定的に使用されていたものかもしれない。なお、壺形埴輪については後円部上段斜面と前方部上段斜面からの出土が多く、後円部・前方部の各墳頂に並べられていたと推定される。

底部打ち欠きの大型円筒埴輪は、出土状況から前方部平坦面に並んでいた普通円筒埴輪に混じって樹立されていたと考えられる。これらの大型品の樹立状況は一箇所への集中的な樹立や、あるいは一定間隔ごとの規則的な樹立といったものではないため、5条6段の普通円筒埴輪の代替品として使用されたと推測できる。おそらく元々は墳頂など別の場所での使用を目的に製作されたのであろう。このような大型品が出土していることから、後円部墳頂における方形埴輪列の存在も示唆される<sup>(1)</sup>。

以上の検討から、当古墳では主として普通円筒埴輪が墳頂や墳丘に並べられ、器台形円筒埴輪や大型円筒埴輪が墳頂などで限定的に使用されていた状況が復元できる。また、大型円筒埴輪の底部を打ち欠き、普通円筒埴輪の代替として使用していたことから考えると、樹立に際しては器高が重要視されていたと理解できる。

### c 周辺古墳出土埴輪との比較

次に周辺の前期古墳との比較をおこなう。三島の前期古墳には安満宮山古墳や弁天山A1・B1・C1号墳、闘鶏山古墳、紫金山古墳などが存在するが、埴輪を出土している古墳は少なく現状では弁天山C1号墳、郡家車塚古墳、紫金山古墳、将軍山古墳の4古墳である。

弁天山C1号墳（原口・西谷 1967）からは、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、楕円筒埴輪などが出土している。普通円筒埴輪や朝顔形埴輪の詳細な特徴は判明していないが、将軍山古墳の円筒埴輪とはほとんど共通点が見出せない。ただし、楕円筒埴輪には低位置突帯が巡っており注意を引く。しかし楕円筒埴輪という特殊な器種であるため、低位置突帯のみをもって将軍山古墳との直接的な系譜関係を想定することは困難である。芥川西岸ではその後、郡家車塚古墳が築造される。郡家車塚古墳からは定型化した鱗付円筒埴輪が出土しており（森田 1994、中村 1995）、4古墳のなかでは最も新規の埴輪の使用が認められる。また将軍山古墳と最も距離の近い紫金山古墳では近年の調査により古式の鱗付円筒埴輪の存在が明らかとなつており（京大考古学研究室 2003・2004）、将軍山古墳の埴輪とは様相を異にするようである。

以上の検討の結果、将軍山古墳の埴輪は他の3古墳の埴輪とは異なる特徴をもっており、三島の地域内では粗型となる埴輪も、その特徴を継承する埴輪も存在しないことが明らかとなった。特に佐保川を挟んで対峙する紫金山古墳とは距離も近接し、墳丘規模も築造時期にもそれほど差がないと考えられるにもかかわらず、樹立されている埴輪の差は大きい。また安威川西岸には安威古墳群が存在するが、前期古墳と考えられる安威1号墳には壺形埴輪が存在するのみであり、円筒埴輪は出土していない。このような状況からは近隣の古墳同士であっても埴輪の情報は共有

されず、各古墳が独自の形態で埴輪生産をおこなっていたものと考えられる。芥川西岸の弁天山C1号墳と郡家車塚古墳であっても樹立されている埴輪は共通点がほとんどなく、佐保川・安威川流域と状況は同じである。

同じ淀川水系に属する向日丘陵の前期古墳や攝津豊島の猪名川流域では、同一首長系譜内であっても埴輪にヒアタスが認められることが指摘されており（廣瀬1999・2003b）、それは南河内の玉手山古墳群でも同様である。三島と類似した状況が地域を越えて看取できる点は重要であり、一地域内で埴輪に連續性が認められない状況は前期古墳に一般的であったといえる。

#### d 低位置突帯の検討

当古墳出土埴輪の最大の特徴は低位置突帯をもつことであるが、上で検討したように地域内でその系譜を辿ることはできない。そこで他地域の前期古墳に低位置突帯の埴輪の類例を求めるとき、大理市東殿塚古墳、同樹山古墳、桜井市メスリ山古墳、奈良市佐紀陵山古墳、高槻市弁天山C1号墳が挙げられる<sup>(3)</sup>（図16）。その中でもメスリ山古墳例と佐紀陵山古墳例はともに超大型品である。佐紀陵山古墳例は残存部分が少なく全体の特徴が不明であるため比較が困難であり、また、盾形埴輪になる可能性も十分考えられる<sup>(3)</sup>。メスリ山古墳では、後円部墳頂の方形埴輪列を構成していた埴輪の中に、低位置突帯が認められるものがある。底径が82cmの超大型品で、高さ75cmのところに突帯が巡る。受口状1縁で、逆三角形透孔といった形態的特徴だけでなく、2段目とそれより上段の突帯間隔がほぼ均等であり、また第1段突帯には突帯間隔設定技法がみられないなど、技術的にも将軍山古墳例とは異なる点が多い。報告では低位置突帯について「器台的な」「脚部の残存した」ものである可能性が指摘されており（伊達編1977）、将軍山古墳の低位置突帯も器台脚部のルジメントである可能性が考えられる。ただし、現在のところ出現期の古墳でもほとんど類例が認められず、その変遷過程が辿れないという点が問題として残される。

一方、東殿塚古墳例、樹山古墳例、弁天山C1号墳例は全て楕円形を呈する。東殿塚古墳例は鱗に透孔が穿たれ古い様相を示すもので、弁天山C1号墳例は立面が台形状を呈する。両者とも他に類例のない特異なものである。また樹山古墳例は上端が8山の鋸歯線を呈し、短い鱗がつく。樹山古墳の楕形埴輪は圓形埴輪への影響が示唆されており（伊藤・豊岡2001）、圓形埴輪にも低位置突帯が巡るものがある点は興味深い。楕形埴輪や圓形埴輪はある空間を囲み遮蔽する施設を表したものとされており、それらにみられる低位置突帯も扉や柵、垣といった実際の圍繞施設の一部を表現したものとも考えられる。円筒埴輪も圓錐を目的とした器物であり、楕円筒埴輪や鱗付埴輪はその意向がより強いものと理解されている。低位置突帯が円筒埴輪に巡る例は少ないので、将軍山古墳の低位置突帯も「囲む」施設と関係する表現として理解できるかもしれない。

以上、低位置突帯について検討をおこなったが、前期では類例が少なく明確な結論は導き出せなかつた。現段階ではその系譜について上の2つの可能性を提示するにとどめておきたい<sup>(4)</sup>。

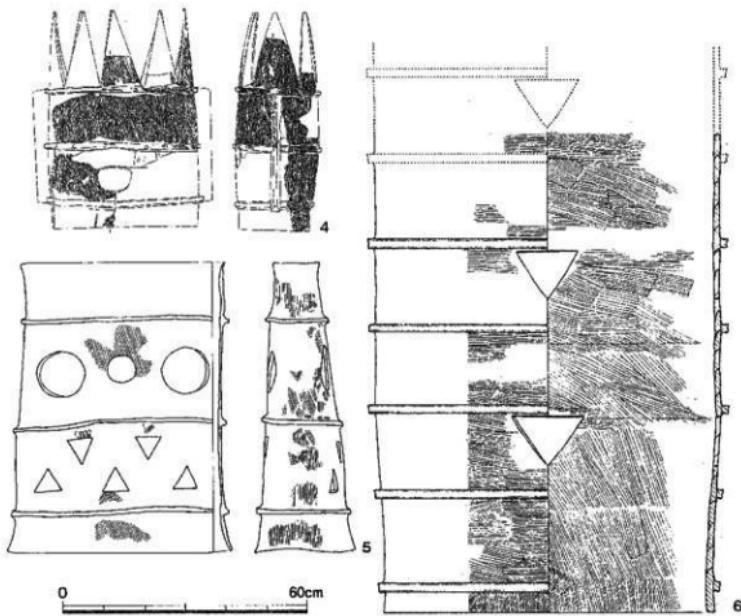
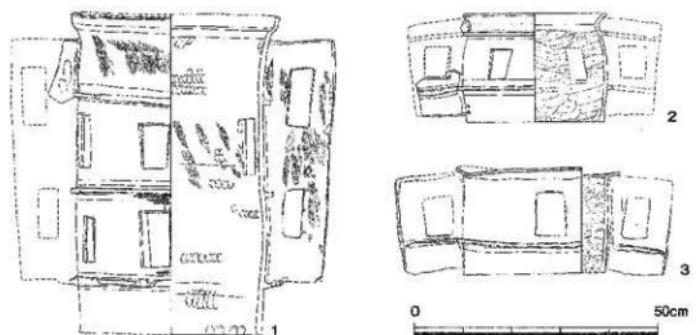


図 16 低位置突帯をもつ埴輪 (1～3 : S=1/10 4～6 : S=1/12)  
1～3 東殿塚古墳 4 楊山古墳 5 弁天山C 1号墳 6 メシリ山古墳

#### e 将軍山古墳出土埴輪の年代的位置づけ

最後に当古墳の埴輪の年代的位置づけをおこなう。

前述のように将軍山古墳の主体を占める埴輪は低位置突帯を特徴とするもので、三島の前期古墳では例をみないものであり、他地域においても類例は少ない。ただし、先の検討でこの低位置突帯は2段目以上の突帯とは無関係に割付けられていることが判明しており、低位置突帯を除いて考えた場合、当古墳の埴輪は底部高と突帯間隔を等しく割付ける前期埴輪に通有なものとなり、他の古墳との比較検討が可能となる。

当古墳の埴輪は外反口縁や一段4孔の長方形透孔といった特徴を有しており、従来の編年的枠組みでは川西編年I期に比定できる（川西1978）。将軍山古墳と同様の特徴をもった埴輪としては、向日市寺戸大塚古墳・広陵町新山古墳周辺埴輪群・柏原市玉手山1号墳・岡茶臼塚古墳などが挙げられる（図17）。透孔に関しては寺戸大塚古墳例・茶臼塚古墳例が一段3孔であり共通しないが、他の形態的特徴はおおむね一致し、系統的差異は認められない。口縁部形態を比較すると、寺戸大塚古墳例は口縁が強く外反しており、将軍山古墳例より古相を呈する。この点から将軍山古墳の埴輪は寺戸大塚古墳例に後出するものと考えられる。

ところで、副葬品からは当古墳の築造年代を古墳時代前期の中でも新しく考える見方が強い。それは後円部の整穴式石槨から鐵形石製品などの他に方形板革綴短甲の一部とされる押付板の破片が出土しているためであるが、方形板革綴短甲については未だその出現時期に諸説があり<sup>(5)</sup>、その出土をもって当古墳の年代を決定することは困難である。ただし、現在のところ方形板革綴短甲と円筒埴輪とが確実に共伴する4例の古墳のうち、3例が川西II期の埴輪と共伴しているという事実は重要である<sup>(6)</sup>。このような状況から当古墳についてあまりに古い築造時期を想定することもできない。以上のような副葬品の問題をふまえて、将軍山古墳の埴輪を川西I期のなかでも新しい段階に位置づけ、築造時期を古墳時代前期中葉の後半段階と考える。

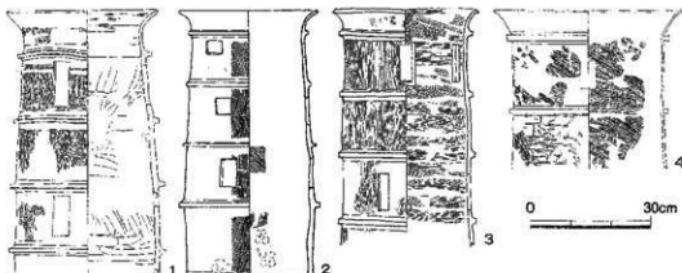


図17 普通円筒埴輪の類例

1 寺戸大塚古墳 2 新山古墳西 3 茶臼塚古墳 4 玉手山1号墳

## f おわりに

以上、将軍山古墳出土埴輪に関して検討を加えてきた。その結果、三島地域内では系譜関係を辿ることができず、一古墳の築造に合わせた単発的・断続的な生産形態の下で埴輪が製作されていたと考えるに至った。そのような状況は既に他地域でも指摘されていたが、それが三島においても確認できたことで、このような埴輪生産が前期古墳に一般的であったという蓋然性がさらに高まった。また第3章で述べられているように、当古墳のほとんどの埴輪が同様の製作技法でプロポーションを均一にして製作されていることからは統制のとれた密接な埴輪製作集団の姿を想定することができる。低位竪突帯に関しては明確な解釈はできなかったが、器台脚部の残存の可能性、もしくは圓錐施設との関係が考えられた。この問題については類例の増加を待って再考したい。原位置出土品約40本を含む将軍山古墳の埴輪は、資料数の少ない前期古墳の埴輪の中で前期中葉の基準となりえる貴重な資料群である。この小文を基礎として、今後さらに他地域との比較検討を深め、古墳時代における埴輪の展開過程やその背景を読み解いていきたいと考える。

(若杉)

最後になりましたが、大阪府教育委員会の竹原伸次氏には小文に関する資料の実見に際しご配慮を賜りました。末節ながら記して感謝いたします。

## 註

- (1) 向日市寺山大塚古墳や桜井市メスリ山古墳の方形埴輪列では、四隅など特定の場所に大型品が配置されていることが確認されている（京大向日丘古墳群調査団1971、伊達編1977）。
- (2) 羽曳野市御旅山古墳の埴輪には報告書で低位竪突帯をもつ底部として同化されているものが存在する（大阪府教委1971）。しかし実見した結果、低位竪突帯が巡る例を確認することはできなかった。突帯直下に残存する透孔の一辺を底面と誤認した可能性が考えられる。
- また、弁天山C1号墳からは岡16-5のはかに、高さ10cmほどに低位竪突帯が巡り、縦に4本の突帯が走る異形の埴輪が出土している。しかし、器高など全形が不明確である上に、胴部に竪位突帯が走るといった形態であるため、当古墳の埴輪とは単純に比較することができず、今回の検討からは除外して考える。
- (3) 虎形埴輪に低位竪突帯が巡るものとしては、羽曳野市五手治古墳例が挙げられる（井原1999）。
- (4) 低位竪突帯は後期の関東でも認められ、近畿でも堺市口置莊埴輪窯出土品にみることができる（江浦編1995）。低位竪突帯の意義に関しては、これら時期の異なる例も含めて検討していくべきであろう。
- (5) 方形板革縁瓦<sup>1</sup>は彷彿三角縁神獸鏡との共伴例が多いが、御所市鶴都波1号墳で舶載三角縁神獸鏡と共にいることからその出現時期を遡らせる意見もある（大賀2002）。
- (6) 方形板革縁瓦と円筒埴輪が共作する古墳としては、天理市和爾上殿古墳、橿原市新沢500号墳、園部町園部塙内古墳、木津町瓦谷1号墳を挙げることができる。

## 挿図出典

### 図 16

- 1～3：松本洋明編 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告 第7集 大垣市教育委員会
- 4：伊藤勇輔・豊岡卓之 2001「鶴山古墳の新資料」『櫛原考古学研究所紀要－考古学論叢』第24冊 奈良県立櫛原考古学研究所
- 5：原口正三・西谷正 1967「弁天山C1号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告 第17輯 大阪府教育委員会
- 6：伊達宗泰編 1977『メスリ山古墳』（『奈良県史跡天然名勝記念物調査報告』第35冊）奈良県教育委員会

### 図 17

- 1：梅本康広編 1999「守戸人塚古墳—第6次調査の成果—」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第49集 財團法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
- 2：泉森 政 1982「大和のはにわ」「開館1周年記念特別企画展 はにわの世界」長野市立博物館
- 3：安村俊史 2004「松岳山古墳群の埴輪」『柏原市立歴史資料館館報』16 柏原市立歴史資料館
- 4：安村俊史編 2001『玉手川古墳群の研究－埴輪編－』柏原市教育委員会

## 2 壺形埴輪の大型化とその背景

－将軍山古墳出土壺形埴輪の検討から－

### a はじめに

将軍山古墳の出土埴輪の内容が徐々に明らかになっていく過程で、発掘調査概報に記された「茶臼山式の壺形土師器」の実体が、長頸・長胴の非常に大型の壺形埴輪<sup>(1)</sup>であったことが判明した点には大きな驚きを覚えた。そもそも近畿地方の大型前方後円墳において、壺形埴輪が円筒埴輪とともに埴丘周縁に用いられる状況は決して一般的ではない。したがって、こうした壺形埴輪が採用された経緯を考えていく作業は将軍山古墳築造の背景を考える上で不可欠であり、また近畿地方や他地域における壺形埴輪の展開を考える上でも非常に重要な鍵を握ると考える。ここでは当古墳出土の壺形埴輪について、その特徴を再度整理し系譜の検討をおこなうとともに、こうした大型の壺形埴輪出現の意義について他古墳の事例も踏まえながら考察を深めていきたい。

### b 将軍山古墳の壺形埴輪の系譜

冒頭でも述べたように、壺形埴輪が同一古墳で円筒埴輪とともに周縁配列に用いられる古墳は、天理市和爾上殿古墳（伊達 1966）、羽曳野市菟井御旅山古墳（大阪府教育委員会 1968・1971）、農中市小石塚古墳（柳本・田中編 1980）などに類例がある程度で、近畿地方では一般的ではない。結論から述べると、当古墳の壺形埴輪は東四国地域で展開していた壺形埴輪に系譜を引くものと考えるが、そう理解する理由は以下の通りである。

まず、胴部の調整手法であるが、内面下半をヘラケズリし、上半に指頭圧痕を残す点が東四国地域の壺や壺の手法と共に共通する。近畿地方の壺では通常、こうした手法を用いておらず、近接する安威1号墳出土の壺形埴輪でも内面はハケ調整を基本とする（本書附篇1）。加えて、一部の破片の外面には一本一本は比較的細筋であるが總じて日の間隔が広い特徴的なタタキ目が確認されている。これはさほど頻繁に確認できるものではないことから、部分的に器形の調整を図った板オサエ状の痕跡として理解すべきかもしれないが、同様のタタキ目は東四国地域の広口・二重口縁壺の体部や口縁部に散見でき、北部九州の事例であるが東四国系の二重口縁壺である福岡県小郡市三国の鼻1号墳<sup>(2)</sup>（片岡編 1985）でも確認できる。また外側のハケ調整において単位の起点が器面に深く明瞭に残される傾向が強いが、この点も東四国地域の壺においてしばしば散見される。将軍山古墳の壺形埴輪は、底部外側にもヘラケズリを加える点で相違もあるが、その他の調整手法は總じて東四国地域の壺と共に共通すると見える。

さらに東四国地域の壺との類似性は、口縁・頸部の製作技法からも傍証される。将軍山古墳では、頸部の下端を乾燥期間前に肩部から連続的に成形しており、この部分が上部の器壁に比べて薄くなる。乾燥期間を経たのちその先端部の主に内面側に広い接合面をとつて分厚い粘土紐が接合され頸部が立ち上げられていくために、そこで器壁が極端に厚くなり内面には小さな稜が生じる。こうし

た工程は、かつて岩崎直也が検討し（岩崎 1984）、近年、藏本晋司が「擬頭部分割成形技法」と呼んでいる東四国地域の壺の頸部成形技法（藏本 1999、399 頁）に共通するものと言える<sup>[3]</sup>。筆者はかつて、近畿地方に遙有の茶臼山型二重口縁壺の頸部成形技法を検討し、茶臼山型壺が屈曲部外面に外輪接合で粘土紐を接合し頸部を立ち上げていくことを明らかにしているが（廣瀬 2001）、将軍山古墳の壺形埴輪の頸部成形技法はこれとは別に東四国地域の技法をほぼ忠実に採用したものであることが理解できる。加えて、擬口縁部の突出が顕著で端部が丸みを帯びる点、二次口縁はゆるやかに外反し端部を丸く仕上げる点にも、東四国地域の二重口縁壺との類似性を認めることができよう（図 19）。

ただし、当古墳出土の壺形埴輪の形態を最も特徴づけているとも言える、胴部や頸部が著しく長い点が問題として残る。現状では将軍山古墳のような大型の壺形埴輪は、東四国地域では確認されておらず、東四国地域の二重口縁壺と比較した場合、どうしても長胴・長頸である点に違和感を覚える。

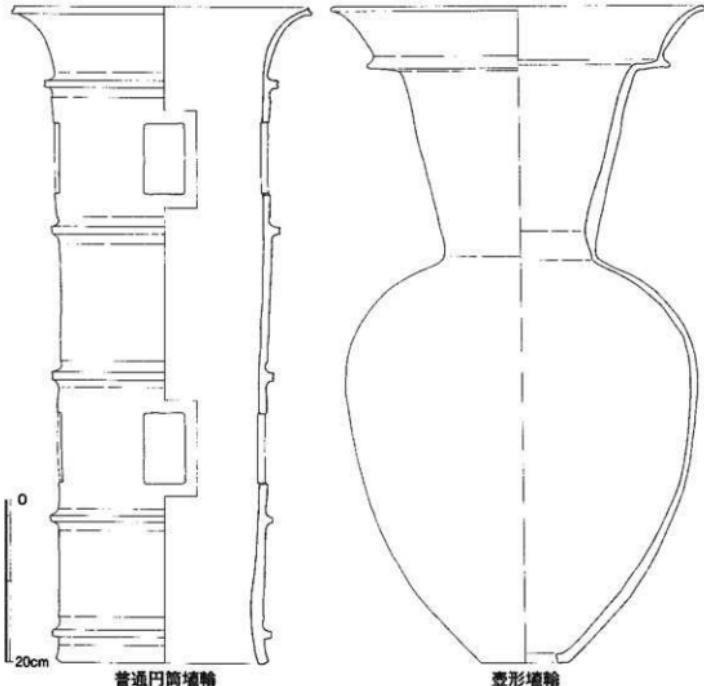


図 18 将軍山古墳出土埴輪復元模式図

ところで前節までに指摘してきたとおり、当古墳の普通円筒埴輪の基本形態は5条6段構成で器高は80cm前後になると復元される。一方、壺形埴輪についても各部位の径や傾きをもとに図上で全形を復元してみたところ、その器高は円筒埴輪のそれにはば対応することが判明した(図18)。したがって、当古墳の壺形埴輪において長胴・長頭化が顕著である点は、普通円筒埴輪と器高を一致させるために器形が全体的に引き伸ばされた結果として理解できるのである。その意味において、当古墳では普通円筒埴輪・壺形埴輪が工具・胎土を通して接点を有し、近しい距離で製作されたと考えられる点は重要である。壺形埴輪には、大きく2種の胎土があり、素地が乳白色を呈する特徴的な胎土は壺形埴輪のみに使用されるが、もう一方の胎土は肉眼観察上、円筒埴輪とほとんど差異がなく、またハケ日・工具も円筒・壺形埴輪ともに条線の隆起が不明瞭な広葉樹のものとみられる板材を用いる点で共通する。したがって当古墳では、壺形埴輪と円筒埴輪とは一定の距離間をもしながらも基本的には同一工房内で製作されたとみてよく、両者の間で器高に関する一定の取り決めが存在した蓋然性は極めて高いと考えられる。

以上のように、当古墳の壺形埴輪にみる長胴・長頭という特徴は、普通円筒埴輪と一体で配列されることを念頭に器高が全体的に引き伸ばされた結果として理解できるものであり、よって粗削となった壺の形態に直接起因するものと考える必要はない<sup>14)</sup>。この点を除けば、上述のような擬口縁および口縁端部の形状、製作技法の一一致は明確であり、将軍山古墳の壺形埴輪の製作には東四国地域の製作者が直接関与した可能性も十分考えられる。

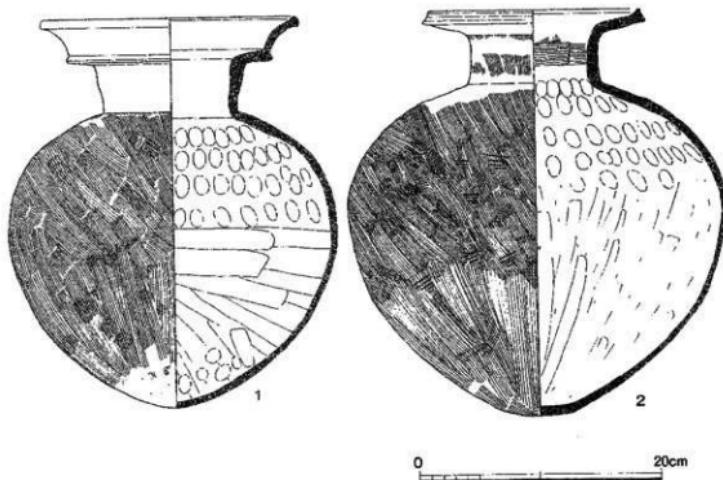


図19 德島県板野町黒谷川郡頭遺跡出土「東阿波型」壺

### c 御旅山古墳出土埴輪の再検討（図20）

以上のように理解した場合、同様に東四国地域の二重口縁壺が埴丘壺の圓錐に用いられていた近畿地方の事例として、羽曳野市森井御旅山古墳の存在が思い浮かぶ。以下、少々長くはなるが、将軍山古墳の壺形埴輪を東四国系と評価するにあたっては御旅山古墳出土埴輪との対比は避けて通れないため、ここで検討を加えておく。

御旅山古墳出土の二重口縁壺に対して、最初に讃岐系のものとしての評価を与えたのは高橋光壽である。高橋は御旅山古墳の壺形埴輪にみる、①外反する頸部に対してそれよりも短い口縁部が取り付く、②胸部が縱長で内面を鋭く削る、③底部の穿孔は親指で外から内に突き破るようにして穿つ、といった特徴が通有の近畿地方の二重口縁壺とは大きく異なる点を主張した上で、それに酷似する壺が香川県三木町権八原C古墳から出土している点を指摘した（高橋克1998）。こうした高橋の理解に対しては、橋本達也が讃岐では当初、二重口縁壺よりも広口壺が主体として用いられる点から、御旅山古墳の壺形埴輪に讃岐からの一方的な影響をみる点に異議を唱えており（橋本2000）、また鐘方正樹も御旅山古墳例を近畿の壺の範疇で捉えた上で長胴化は時期差の指標として理解している（鐘方2003）。一方、藏本晋司は最近、御旅山古墳の壺形埴輪を実見した上で、同資料に対し「円筒埴輪導入以前の東四国地域の伝統の中で理解できるものである」と結論づけ、高橋の見解を大筋で支持するに至っている（藏本2004）。筆者も高橋や藏本の意見に概ね賛成するものであるが、依然、そうした理解が支持を得ていない要因は東四国地域の壺の型式的な整理や、近畿中部の二重口縁壺との比較がやや不十分であった点にあるとみる。

将軍山古墳出土の壺形埴輪を通して述べたように、茶臼山型二重口縁壺に代表される近畿中部の壺と、阿波・讃岐といった東四国地域の壺との差異は、内面調整や頸部の成形技法、さらには口縁部や擬口縁端部の形状においてもっとも顕著に表れる。内面のヘラケズリ調整自体は、近畿中部の壺でも前期前葉からそれを用いるものが現れるため決定的な指標とはならない。両者の内面調整の差異を際立たせているのは、東四国地域の壺では体部全面がヘラケズリ調整されるのではなく、上半にはケズリが及ばず明瞭な指頭圧痕が残される点である。こうした内面調整のあり方は庄内式併行期以来の壺も含めた東四国地域の土器製作の伝統性として評価できるものであり、御旅山古墳や将軍山古墳でもそれが明瞭に確認できるのである。さらに頸部の成形技法についても、頸部下端となる部分を肩部から連続的に薄く立ち上げておき、乾燥期間後にその端部に広い内傾の接合面をとつて本格的に頸部を立ち上げていく状況が御旅山古墳でははっきりと確認できるが、この点も広口壺、二重口縁壺を問わず東四国地域の壺に共通してみられる顕著な特徴であって看過できない。全体的な口縁部の形状についても、擬口縁を突出させ、二次口縁の外反が顕著なものが認められる。以上の点から、御旅山古墳の壺形埴輪が東四国地域の強い影響下にある点は疑いない。

また底部穿孔のあり方については、既に藏本が旨及しているように、高橋が指摘した内側に器壁が突き破られたものに加えて、棒状工具によるとみられる径2cm前後の整った小孔を穿つものが多数確認できる。したがって前者は粗雑に穿孔したために器面を破ったり、突き上げてしまっ

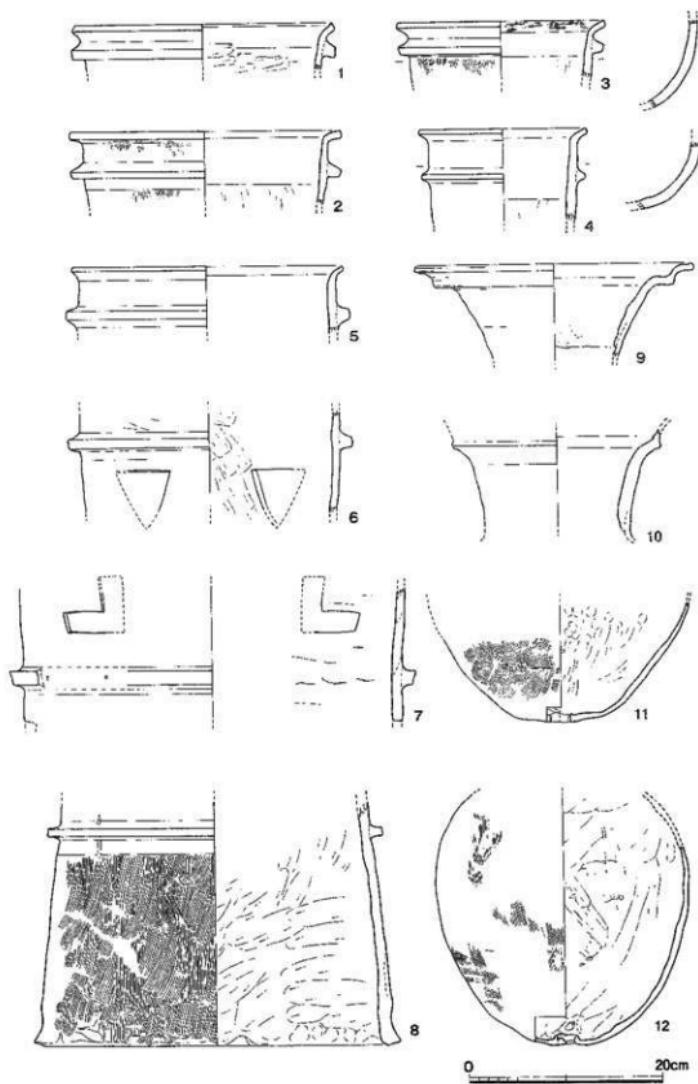


図20 羽曳野市御旅山古墳出土埴輪（大阪府教育委員会所蔵）

た結果である可能性が高く、むしろ棒状工具で搔きとるようにして整った小孔を穿つ後者こそがより基本的なあり方であったと理解できる。歳本は御旅山古墳の壺形埴輪の系譜について二重口縁壺が卓越する阿波に求める方が妥当であるとするが、こうした小孔を穿つ壺形埴輪は今のところ阿波地方では確認されていない。一方で、讃岐地方では当初は広口壺が主体となるものの、そうした小孔が鶴尾神社4号墳（渡部・藤井1983）など出現期の壺形埴輪から伝統的に穿たれている。よって現状では、御旅山古墳の壺形埴輪には阿波よりも讃岐地域の製作者が関与した可能性が高いと考える。近年の香川県綾歌町快天山古墳（近藤・大久保2004）などの調査成果により、御旅山古墳や将軍山古墳が染かれた前期中葉には、讃岐の古墳でも二重口縁壺が採用されていることが明らかになっており、御旅山古墳の壺形埴輪の系譜を讃岐地方に求めることの妥当性は十分にあると考える。

ところで、御旅山古墳には壺形埴輪の他に円筒埴輪も出土している。前方部裾の埴輪列はすべて壺形埴輪であったことからすると、将軍山古墳とは逆に御旅山古墳では墳頂部を中心に円筒埴輪が配列されていた可能性がある。それはともかくとして、これまで公表されてきた御旅山古墳出土の円筒埴輪の実測図中には、将軍山古墳と同様に低位置突帯をもつ底部のように表現されたものが存在する（大阪府教育委員会1971）。よって、当初は将軍山古墳の円筒埴輪との何らかの関係を疑ったが、資料を実見した結果、確実に低位置突帯として判断できる個体は確認できず、逆に底部高22cmを測る通常の円筒埴輪の底部が存在することが判明した（図20-8）。そこでかつての実測図を再度検討してみると、低位置突帯とみられる箇所のうち上部の形状が判明する2点は、突帯の直上から器形が外反する状況が図化されている。したがって、底面のようにして図化された部分は透孔の上辺部分で、最上段突帯付近の破片を図化したものである可能性が高く<sup>(3)</sup>、現状では確実な低位置突帯の埴輪は不在ということになる。

それ以外の特徴を整理すると、御旅山古墳の円筒埴輪の口縁部はいわゆる極狭口縁とされる最上段突帯からの間隔が極めて狭いものが多数確認でき、透孔の形状は確実なもので三角形・鉤形が存在する。3、4は口径が他よりも著しく狭いが、これは横断面の形状から梢円筒埴輪であるとみられ、復元径は梢円の短径ないしはその近似値を示している可能性が高い。内面は各個体ともヘラケズギが顕著で、8の底部内面は細粒の動きが下向きであるため、倒立状態で調整されていると判断できる。突帯間隔設定技法には刺突、ヨコナデがみられる。

以上の観察から御旅山古墳の円筒埴輪は将軍山古墳との共通点は乏しいものの、前期中葉までにとどまる古い特徴をもつことが明らかとなった。一方、御旅山古墳から出土したとされる仿製三角縁神獸鏡はその変遷の古段階のもののみで構成されている（森下1991、福永1994）。すなわち御旅山古墳は、仿製三角縁神獸鏡と古式の円筒埴輪の共存から前期中葉でも後半段階の標識的な古墳として評価し得ることになる。したがって、将軍山古墳の築造時期を理解する上でも、上記のような御旅山古墳の年代観は大いに参考になるが、両古墳の円筒埴輪にはほとんど共通点がみられないため、円筒埴輪によって前後関係を直接検討することは困難である。一方、壺形埴輪が大型化したことからすると、将軍山古墳は御旅山古墳よりもやや後出する段階の築造であ

ることが見込まれる。ただし両古墳の壺形埴輪は、穿孔の手法や口縁部形態の差が著しく直接的な系譜関係にあるとは考え難く、両古墳縗造時に東四国地域からそれぞれ個別に影響を受けて製作されたものと理解する。

#### d 大阪湾沿岸地域にみる壺形埴輪大型化の背景

近年、各地で壺形埴輪の研究が精力的に取り組まれており、それらによって既に大まかな変化の方向性は明らかとなっている（吉田 1999、古屋 1998、君嶋 2000・2002、竹中 2004 など）。すなわち、壺形埴輪の変遷は、焼成前穿孔を加え圓錐配列を開始した段階に始まり、最終的に本来の土器の器形を大きく逸脱し極端に大型化、形骸化していく流れにあることは大筋では間違いない。ただし、列島各地で一定の多様性をもって展開した壺形埴輪に対して系統・系列関係を見出し、それごとに編年を組み立てる作業は資料的な制約もあってほとんど進行しておらず、上記のような変化の方向性を壺の系統・系列を越えて一律なものとして認めてよいかどうかは未検証の段階にある。そもそも特定の地域内のみで壺が系列立てて編年を組めるだけの展開を遂げていない場合も十分想定され、とりわけ、壺形埴輪の配列が主体とならない近畿中部では一層作業が困難を極める。

以下では、これまでに述べてきた将軍山古墳の埴輪に対する基本的な認識を踏まえて、大阪湾沿岸地域を中心として壺形埴輪の大型化の過程について若干の検討を試みることにするが、将軍山古墳を前後する時期の壺形埴輪の類例は、摂津では茨木市安威1号墳（本書附編1）、高槻市闘鶏山古墳<sup>16)</sup>（高橋公編 2002）、豊中市小石塚古墳（柳本・田中 1980）、河内では八尾市美園古墳（渡邊編 1985、畠 1998）、そして先に検討した羽曳野市御旅山古墳等を挙げうるに過ぎない。しかかもこれらは相互に直接的な系譜関係を有しているわけではないため、細かな差異に基づいて型式学的な組列を検討する作業は有効でない。したがって、ここでは副葬品や円筒埴輪の年代観を参考に、壺の大型化、形骸化の過程を捉えていく。

まず、壺の形状について大まかに分類すると、安威1号墳、闘鶏山古墳、御旅山古墳が土器本来の形状を維持する部類に相当するのに対し、将軍山古墳、小石塚古墳、美園古墳は土器の形状を逸脱した大型の壺形埴輪となる。御旅山古墳では若干長胴化の傾向がみられるものの、後者との間には大きな飛躍がある。一方、大型化を遂げた後者については、将軍山古墳が依然として底部を明確に製作した上で穿孔を行うのに対して、小石塚古墳や美園古墳では完全に底部を開放して製作する点で一層、形骸化が進んでいるといえる。

ではそれぞれの時期を、共伴遺物を参考に検討してみよう。まず、安威1号墳第1主体からは鍬形石、車輪石、石鉗の出土が知られるが、先行する第2主体は未調査のため第1主体の時期よりも若干遅る可能性がある。闘鶏山古墳では全体像は明らかでないものの、第1主体部では舶載三角縁神獸鏡2面や鍬形石の副葬が確認されている。一方、御旅山古墳は前述のように仿製三角縁神獸鏡の副葬開始期に位置づけられる。したがって、これら3古墳の年代は大きく前期中葉段階とみてよく、御旅山古墳が他の2古墳よりは若干後出しその後半段階に位置するものと考える。

これに対して、大型の壺形埴輪が出土した将軍山、小石塚、美園の3古墳では、将軍山古墳で鐵形石製品や方形板革縦短甲のものとみられる押付板が出土しているものの、他の2古墳では副葬品の内容が不明であり、焼造時期を絞り込むことは難しい。ただし、美園古墳では壺形埴輪に定式化した家形埴輪が伴っており、前期後葉まで焼造時期が下がるのが確実と考えられる。一方、将軍山、小石塚古墳で共伴した円筒埴輪は定式化以前の古い様相をもつことから、両古墳については御旅山古墳よりも大きく後出するとは考え難い。上述した底部の形骸化の流れからも、将軍山古墳については前期中葉でも後半段階にとどまるものと理解できる。また、小石塚古墳についても円筒埴輪の型式を重視し、前期中葉の末に位置づける。

以上の検討から、大阪湾沿岸地域で壺形埴輪が大型化を遂げる時期は概ね、将軍山古墳が焼造された前期中葉の後半段階とみてよいと考える。また、御旅山古墳と将軍山古墳の時期差はそれほど大きくは見積もないことからすると、壺形埴輪の大形化は漸移的な変化ではなく御旅山古墳と将軍山古墳の間で飛躍的に生じたものと理解できる。先に将軍山古墳における壺形埴輪大型化の要因を共伴する普通円筒埴輪と一緒に配列することを念頭に器高が全体的に引き伸ばされた結果として理解したが、この点はそうした飛躍的な変化の実体を考える上で重要な意味をもつ。つまり、御旅山古墳では、もともと地的に異なる埴輪様式にあった円筒埴輪と壺形埴輪とが同一古墳で共存するにとどまつたのに対し、将軍山古墳ではさらに両者で器高を一致させるという方向で一定の同一化が志向されていくという経過を読み取ることができる。壺形埴輪が飛躍的に大型化を遂げた背景はまさにそこにあると言つてよい。

この壺形埴輪と円筒埴輪の器高に着目する観点は、小石塚古墳の壺形埴輪を理解する上でも有効である。小石塚古墳の壺形埴輪は前述のように、底部を筒状に開放したまま成形する点で将軍山古墳よりも形骸化が進んでいると言えるが、一方で全体の器高は55cm前後に復元でき、将軍

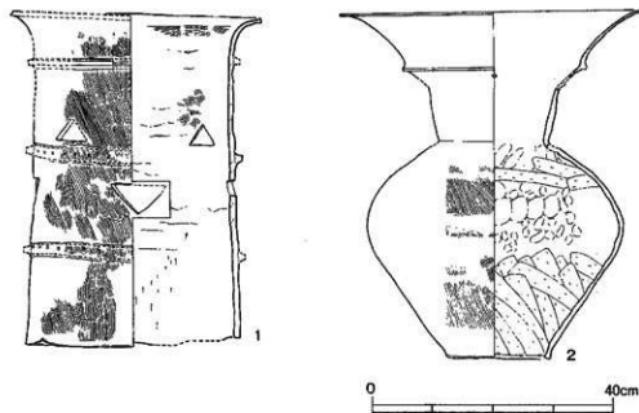


図21 豊中市小石塚古墳出土埴輪

山古墳よりもかえって小型化している。しかしこの一見矛盾したようにみえる現象も、小石塚古墳の壺形埴輪の器高が共伴する3条4段の小型の円筒埴輪を意識したものと理解すれば合理的に説明することができる（図21）。

その上で、近畿中部ではこうした円筒埴輪と壺形埴輪の共伴例が今のところ大阪湾沿岸地域の大型古墳において集中して確認される点が注目される<sup>(1)</sup>。小石塚古墳の壺の系譜については判然としないところもあるが、御旅山古墳と將軍山古墳の壺形埴輪については、それぞれ個別に東四国地域の影響を受けたものとして理解できる点は詳述してきた通りである。つまり、既に奈良盆地を中心に円筒埴輪の配列が普遍化しつつあった近畿中部にあって、その周縁にあたる大阪湾沿岸地域であったからこそ、東四国地域など他地域との交流を通じて円筒埴輪と壺形埴輪の両者が一古墳で共存する現象が生じ得たのであり、またそれが壺形埴輪大型化の前提でもあったのである。

前期後半以降、列島各地においても器高が60cmを超えるような大型の壺形埴輪が登場し展開を遂げるが、以上のような大阪湾沿岸のあり方からみると、そうした列島各地における壺形埴輪の大型化についても、近畿中部の円筒埴輪を中心とする埴輪様式と既に各地で確立していた壺形埴輪様式とが積極的に交流・接触し始めたことを契機としている公算が大きい。実際に、愛知県犬山市青塚古墳<sup>(2)</sup>（赤塚編2001）や神奈川県横浜市長柄・桜山第1・2号墳（柏木・依田編2001）では、円筒埴輪と大型化した壺形埴輪が共伴していて示唆的である。ただし、列島各地で大型化を遂げた壺形埴輪はその器形が極めて多様であることから、一元的な伝播によるものではなく、系統・系列を越えた多元的な情報共有の結果であった可能性が極めて高い。しかしながら、たとえそうした間接的な伝播であっても、内部空間の遮断や隠蔽をより視覚的に訴える円筒埴輪からの影響を全く考慮せずに、列島各地における壺形埴輪の大型化を理解することはもはや困難であろう。將軍山古墳における壺形埴輪のあり方は、こうした列島各地の状況を読み解く上でも極めて重要な問題を提起していると言える。

#### e おわりに

以上のように、この小文では將軍山古墳出土の壺形埴輪について検討を加え、その系譜や器形の大型化の要因について考察するとともに、そこから派生する壺形埴輪の展開をめぐる諸問題についても議論してきた。以下、ここでの論点を整理しつつ今後の展望を述べてまとめとしたい。

まず將軍山古墳の壺形埴輪の系譜については、製作技法や口縁部の特徴から東四国地域に求められることを指摘した。從来からこの古墳については、後円部に築かれた堅穴式石室が結晶片岩を多用し、かつ埋葬頭位が東西優位となる点から東四国地域との関連が説かれてきており（都出1986）、ここでの壺形埴輪の評価はそうした指摘と整合する<sup>(3)</sup>。また、淀川流域の庄内式から布留式中頃にかけての外米系土器を検討した山田隆一の成果によると、淀川右岸地域の拠点的集落には西日本諸地域のものとともに讃岐・阿波系の土器が一定量流入してきており、それらの集落が淀川流域の物流拠点となった可能性が極めて高い（山田2003）。とりわけ、安威川下流の溝呑

遺跡から多くの阿波系二重口縁壺や結晶片岩材が出土している点は（合田編 2000、伊藤編 2000）、将軍山古墳築造の背景を理解する上で示唆的である。

一方、近年の調査成果によると、香川県綾歌町快天山古墳からは、将軍山古墳や御旅山古墳などに併行する近畿中部の前期中葉段階の特徴を有する円筒埴輪が出土していて、東四国地域では西日本の他地域よりも若干先行して近畿中部に直接系譜を引く埴輪が波及していく状況が明らかになってきた<sup>49)</sup>。こうした現象は、東四国地域の壺形埴輪の大坂湾沿岸地域への流入と表裏の関係として捉えることができ、この時期に両地域間の相互交流が活発化している状況を窺うことができる。ただし、将軍山古墳の築造をめぐる地域間交流については、今後、墳丘形態や葺石、前方部南側で検出されている箱式石棺、および後円部竪穴式石室等、古墳全体の詳細な構造等が明らかになった段階で、より多角的な視点から捉えなおす必要があると考える。

また、将軍山古墳の壺形埴輪は、底部が開放した状態で製作され始める直前の様相を呈しており、共伴した円筒埴輪の年代観からも、近畿中部における大型化した壺形埴輪の初現例として評価することができる。重要なのはそうした大型化した壺形埴輪の出現が、巨大古墳が集中する奈良盆地ではなく、将軍山古墳や小石塚古墳など近畿中部でもその周縁地域において確認できる点である。ここでは、当古墳において壺形埴輪が大型化している要因を円筒埴輪と一緒に配列されることを念頭に器高の一一致が図られた結果と考えたが、他地域の壺形埴輪様式との接触が生じやすい大坂湾沿岸に位置したからこそ、将軍山古墳ではそうした製作段階での一定の融合が成立し得たと理解する。

さらにこうした将軍山古墳の検討成果からは、前期後葉以降に列島各地で急速に進行する壺形埴輪の大型化、長胴化が、近畿中部の周縁地域、あるいは各地域の拠点的な古墳において円筒埴輪と壺形埴輪とが接触しそこで一定の同化が志向されたことを契機とする可能性が示唆される。各地の大型前方後円墳では、必ずしも近畿中部に直接系譜が迫るものではないが、円筒埴輪が実際に壺形埴輪に伴う例が散見される点はそうした理解に整合的であるし、東日本の壺形埴輪においてしばしば胴部や口縁部に透孔が穿たれる点も円筒埴輪との関係を考慮すると理解しやすい。すなわち、赤塚次郎による段階区分の第4段階（赤塚 2001）に相当する壺形埴輪の広域的な大型化は、それぞれの地域での自律的で漸移的な変化というよりも、地域的な壺形埴輪様式がその枠組みを維持、温存しつつも、近畿中部地域の円筒埴輪を中心とする埴輪様式に触発されそれに接近し始めた状況を示すものとして評価することができよう。東日本ではこうした壺形埴輪の大型化が、前方後方墳が衰退し前方後円墳や円墳が増加していく動きと対応することも極めて示唆的である。こうした地域側の姿勢こそが、次の段階の本格的な近畿中部からの埴輪様式の受容を準備するものであったと考える。

以上のような壺形埴輪の展開をめぐる理解については、各地の壺の系統・系列関係の把握や共伴遺物に基づいた詳細な変遷を把握した上でさらに検討を深める必要があることは言うまでもない。しかしながら、壺形埴輪の大型化の背景については、一定の見通しが得られたのではないかと考える。将軍山古墳出土埴輪が提起する問題は、以上のように、三島地域における前期古墳の

動向のみならず、列島規模での埴輪や古墳の展開を理解する上でも極めて重要な意味をもつ点を強調して、この小文を終えることにしたい。

(廣瀬)

この小文を作成するにあたっては、多くの方々からご助言、および資料見学のご配慮を賜った。とりわけ大阪府教育委員会の小浜成氏には、収蔵庫の中で埋もれていた御旅山古墳の埴輪を汗、埃塗れになりながら共に搜索して頂き、資料を検討できる環境を整えて頂いた。その際に作成した御旅山古墳出土埴輪の実測図掲載には大阪府教育委員会からのご快諾を得た。末筆ながら深くお礼申し上げます。

## 註

- (1) ここでは、底部に焼成前穿孔を施し埴丘を周縁配列するようになった段階以降の壺は埴輪の範疇で理解している。大型化、形骸化を遂げた段階からを厳密な意味での「壺形埴輪」として、それ以前を二重口縁壺の周縁配列として捉える立場も存在するが(君嶋 2002など)、供獻土器を仮器化して埴丘を周縁する点で円筒埴輪と底部穿孔「二重口縁壺」は性格を等しくしていると言える。実際に羽曳野市御旅山古墳のように同一古墳で円筒埴輪と底部穿孔「二重口縁壺」とが共存する場合があることからすると、両者は広い意味で埴輪としての思想的脈絡を共にしていると理解できる。むしろ、広義の埴輪として捉えた上で両者の距離感を議論する方が豊かな古墳時代像を描くことにつながる我认为。
- (2) 三国の鼻1号墳の壺形埴輪は、長らく北部九州における「畿内系二重口縁壺」の典型例として扱われてきた(蒲原 1989など)。しかしながら最近、藏本晋司は東四国地域に系譜をひく二重口縁壺として三国の鼻1号墳例を取り上げている(藏本 2004)。筆者も2002年7月に同資料を実見した際に東四国系の二重口縁壺である確信を得ている。
- (3) ただし、この頭部成形技法について藏本は、「まず頭部に芯となる直立する円筒状の瓶口縁をつくり」として、頭部が分割して成形される点を強調するとともに、補強のための外側への粘土紐の付加を積極的に認めており、筆者とは若干理解が異なる。特に藏本が、「擬頭部(11縫)」と表現する部分は実際には肩部から連続的に成形された部分であることから、頭部を「分割」して成形することに本質的な意味があったとは考え難い。茶臼山型二重口縁壺や伊勢原二重口縁壺も肩部上端を乾燥期間前に若干立ち上げるが、乾燥期間後の立ち上げ開始位置が頭部屈曲部よりもかなり高い位置に置かれ、かつ広い接合面をとって内側接合される点に最大の特徴がある。こうした技法がとられた理由については、製作工程上、最も負荷のかかる頭部の下端を手め肩部から連続的に成形し乾燥させておくことでそこに一定の強度を持たせ、効率よく上部を立ち上げていくことが意識されたためではないかと考える。
- (4) 岡山県津市田邑丸山2号墳で非常に長頭の壺形埴輪が出土しているが(小堀編 2000)、現状では将軍山古墳との直接的な系譜関係は存在しないものと理解している。
- (5) 大阪府教育委員会 1968『羽曳野市井御旅山前方後円墳発掘調査概報』に掲載された受口状口縁のようにして表現された埴輪についても傾きを誤認している可能性があり、実際は壺形埴輪の口縁部ではないかと考える。
- (6) 現状では底部片が出土していないため厳密には壺形埴輪とは断定できないが、出土しているのがほぼ壺に限

られること、主体部が存在しないとみられる前方部からも一定量の破片が出<sup>11</sup>していることからも、底部に穿孔を有する壺形埴輪である可能性を考える。

(7) ただし、天理市和爾上殿古墳では墳頂外周埴輪列で円筒埴輪が使用されている一方で、主体部上に設置された方形埴輪列には壺形埴輪が用いられていたことが明らかになっている（伊達 1966）。さらに近年、天理市マバカ西古墳では吉備系のものとみられる大型の壺形埴輪が出土している（青木 2003）。また埴輪でない可能性もあるが、瓦谷古墳群では肩部や頭部に文様をあしらった講岐系とみられる人型の複合口縁壺が出土している（石井他 1997）。

(8) 青塚古墳では近畿中部に直接系譜が迫れる縛付のものを含む円筒埴輪が大型化した伊勢型二重口縁壺と共に伴っている。ただし、両者の胎土は自然科学的な分析結果からも大きく異なることが明らかになっている。円筒埴輪の配置が前方部墳丘の方形墓壇の周囲に限られることからも、円筒埴輪の生産・樹立は壺形埴輪のそれよりも別にかつ連れてなされた可能性も考えられる。

(9) 羽曳野市御旅山古墳の壺形埴輪が同じく東四国地域に系譜が求められることに加えて、柏原市松岳山古墳や正手山1号墳における積石塚風の葺石の採用（高橋 1997）、磐ノ山產（柏原市安福寺所在石臼、松岳山古墳長経開石）、火山產（岸和田市久米田貝吹山古墳）の石棺の流入など、大阪湾沿岸地域では東四国地域との密接な交流をとりもつた前期古墳が点在する。

(10) この他、徳島市奥谷1号墳出土の円筒埴輪も、同様の時期に位置づけられる可能性が高い（三宅 2000）。

#### 挿図出典

図 17 青原康夫編 1987『黒谷川郡頭遺跡』Ⅱ 徳島県教育委員会

図 18 1～8、10・11：筆者実測 9・12：一瀬和夫 1989『御旅山古墳』『古墳時代前半期の古墳出土の土器』第Ⅲ分冊 第25回埋蔵文化財研究集会

図 19 1：廣瀬 覚 2003『揖津猪名川流域における前期古墳の埴輪とその系譜』『古代文化』第55巻第9号

2：柳本照男・田中晋作編 1980『史跡大石塚・小石塚古墳』農中市教育委員会

## 第5章 おわりに－課題と展望－

以上のように、将軍山古墳出土埴輪の整理作業を通して、これまで間に閉ざされてきた将軍山古墳の実体にわずかではあるが光をあてることが可能になってきた。古墳が消滅するという非常に残念な結果と引き換えにではあるが、全長100mを超えるような大型の前期古墳が広範囲にわたって調査された事例は皆無に近く、将軍山古墳の調査から得られた総数50個体を超える埴輪は、1基の前期古墳から出土したものとしては最も多い部類にある。ここでの検討から得られた埴輪の年代観や系譜をめぐる理解は、今後、三島地域の古墳の展開を考える上で重要な意味をもってこよう。さらに埴輪の配列方法や、焼成、工人編成といった生産に関する具体的な情報は、古墳づくりの実体を復元していく上で大きく貢献するものと考える。しかしながら、依然として残された課題も多い。

まず、本書では埴丘調査の内容や成果について十分検討を加えることができていない。これについては、今後、発掘調査に携わった方々から情報の提供を賜わるとともに、残された図面や写真類の整理を通してできるだけその全容の解明にあたりたい。埴丘の規模や構造、葺石のあり方等を正確に把握するとともに、本書によって得られた埴輪の内容についても出土状況を踏まえ遺構論として再検討していく作業が大きな課題となる。

一方、後円部墳頂に存在した竪穴式石槨の詳細な構造や、その内部に残された副葬品の具体的な内容についてもあわせて検討することができれば、将軍山古墳の全体像がより明確となることは間違いない。本書では、埴輪の型式的な特徴に基づいて将軍山古墳の築造時期を前期中葉の後半段階（4世紀中頃）として理解したが、この点は副葬品の詳細が明らかになった時点でさらに検討を深めたい。また、当古墳の右鄰については、結晶片岩を多用し東西頭位を志向する点で、かねてより東四国地域との関係が指摘されてきている（都出1986）。前章第2節では将軍山古墳出土の壺形埴輪の系譜を東四国地域に求める見解を提示したが、さらに埋葬施設や埴丘、葺石の構造を詳細に捉え、そこから多角的に地域間交流のあり方を検討していく必要がある。

ところで、佐保川対岸に築かれた紫金山古墳は、将軍山古墳と築造時期や埴丘規模が近似するにもかかわらず、埴輪の内容や埋葬頭位が大きく異なっており非常に興味深い。紫金山古墳については、現在、京都大学考古学研究室によって整理作業が進められており、今後、両古墳の実体が明らかになるにつれて、両者の総合的な比較検討がますます重要な意味をもつくるものと予想される。さらに、6世紀代に将軍山古墳の周囲に築かれた後期古墳の実体についても、石室の図面や出土遺物を整理しその実体や位置づけを明らかにすることで、この地域の古墳の動向を鮮明にしていきたい。

こうした課題を克服していくことで、将軍山古墳築造の背景をより豊かに理解することが可能となる。残念ながら現在は地上から完全に姿を消した将軍山古墳であるが、この古墳が発する情報は今なお三島や茨木の地域史を理解する上で多大な影響を有しており、またその評価は広く古

墳時代像全体を再構成する上でも看過できないものとなる。本書を通して、こうした将軍山古墳の重要性が再認識されれば幸いである。

(廣瀬)

## 引用・参考文献

- 合田幸美編 2000『清叶遺跡（その1・2）』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第49集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 青木勘時 2003「大和における古墳出現前後の土器様相とその特質」「古墳出現期の土師器と実年代」（財）大阪府文化財センター
- 赤塚次郎 1979「円筒埴輪製作覚書」「古代学研究」第90号
- 赤塚次郎編 2001『史跡青塚古墳調査報告書』犬山市埋蔵文化財調査報告書第1集 犬山市教育委員会
- 赤塚次郎 2001「壺形埴輪の復縫」赤塚編 2001 文獻収録
- 石井清司他 1997『瓦谷古墳群』京都府遺跡調査報告書第23冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 泉森 俊 1982「大和のはにわ」「開館1周年記念特別企画展「はにわの世界」長野市立博物館
- 伊藤 武編 2000『清叶遺跡（その3・4）』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第50集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 伊藤勇輔・豊岡卓之 2001「鶴山古墳の新資料」「櫛原考古学研究所紀要・考古学論攷」第24冊 奈良県立櫛原考古学研究所
- 大木 努 2002「円筒埴輪という裝置」「東アジアの考古学」II 墓制② 同朋社
- 井原 秃 1999「野々上遺跡」「羽曳野市内遺跡調査報告書－平成7年度－」羽曳野市埋蔵文化財調査報告書36 羽曳野市教育委員会
- 岩崎直也 1984「四国系土器群の撤出」「大阪文化誌」第17号
- 梅本廣広編 1999「寺」大塚古墳－第6次調査の成果－「向日市埋蔵文化財調査報告書」第49集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
- 江浦 洋編 1995「H型莊遺跡」近畿自動車道松原すみさき線および府道松原泉大津線建設に伴なう発掘調査報告 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」「小羽山古墳群」清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 福井県清水町教育委員会
- 大阪市立博物館 1965「将軍山古墳調査概報」「大阪市立博物館報」No.4
- 大阪府教育委員会 1968「羽曳野市奈井御旅山前方後円墳発掘調査概報」
- 大阪府教育委員会 1971「羽曳野市奈井御旅山古墳の調査」「南河内石川流域における古墳の調査」大阪府文化財調査報告第22報
- 奥井哲秀 1982「茨木市安威0号墳、1号墳の調査」「大阪文化誌」第15号 財団法人大阪文化財センター
- 小畠三秋・五島昌浩 1990「円筒埴輪について」「京都府平尾城山古墳」山口大学人文学部考古学研究室研究報告6集 山口大学人文学部考古学研究室

柏木善治・依田亮一編 2001「長柄・桜山第1・2号墳測量調査・範囲確認調査報告書」神奈川県教育委員会・財團法人かながわ考古学財団

片岡宏二編 1985『三国の鼻遺跡』三国の鼻1号墳の開発』小都市文化財調査報告書第25集 小都市教育委員会

堅田 直 1968『茨木市将軍山古墳石室移築報告』考古学シリーズ3 帝塚山大学考古学研究室

雄方正樹 2003『古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年』『埴輪論叢』第4号

蒲原宏行 1989「北部九州出土の鏡内系二重環壇」『古文化論叢』第20集(中)

川西宏幸 1978「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2号

君嶋俊行 2000「関東における壺形埴輪の成立に関する観察」『奥津城研究』創刊号

君嶋俊行 2002「関東における壺形埴輪の成立過程」『土壤考古』第26号

京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団 1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54号第6号

京都大学文学部考古学研究室編 1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館 思文閣

京都大学大学院文学研究科考古学研究室 2003『紫金山古墳発掘調査現地説明会資料』

京都大学大学院文学研究科考古学研究室 2004『紫金山古墳発掘調査現地説明会資料』

宮内庁葬墓課課編 2003『出土品展示目録 墓輪IV』宮内庁葬墓課

國下多美樹・中塙良輔 2000「寺山大塚古墳第7次(4PTBSM-7地区)発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集 財團法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会

藏本 齐司 1999「中間西井坪遺跡7出土土器について」『中間西井坪遺跡II』四回横断山動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 香川県埋蔵文化財研究会

藏本 齐司 2004「吉岡神社古墳の再検討」『研究紀要 XI 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター』

小泉 玲子 1999「(3) 横形埴輪」『野毛人塚古墳-東京都世田谷区野毛1丁目所在の古墳保存整備・発掘調査記録一』第1分冊 本文篇 世田谷区教育委員会

小林正史・久世建二・北野博司 2003「黒斑からみた弥生土器の複い型野焼きの特徴」『日本考古学』第16号

小林 行雄 1956「茨木市将軍山古墳調査概報」『日本考古学協会報』別冊6(第17回総会研究発表要旨) 日本考古学協会

小野利幸編 2000「山邑丸山古墳群 田邑丸山遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第67集 津山市土地開發公社・津山市教育委員会

近藤武司・大久保徹也 2004「铁天山古墳発掘調査報告書」綾歌町教育委員会

近藤義郎編 1960「月の輪古墳」月の輪古墳刊行会

佐藤 晃一 1992「史跡蛭子山古墳・作山古墳整備事業報告」加悦町文化財調査報告第15集 加悦町教育委員会

高橋 克壽 1997「古墳の造営主体」『別冊歴史叢書 日本古代史(王権)の最前線』新人物往来社

高橋 克壽 1998「古墳時代の壺形-埴輪」『考古学による日本歴史』12 雄山閣

高橋公一編 2002「關越山古墳第1次調査概要報告」高槻市文化財調査概要XXIX 高槻市教育委員会

竹中 克繁 2004「九州壺形埴輪研究序論」『熊本古墳研究』第2号

伊達 宗泰 1966「和爾上殿古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第23冊 奈良県教育委員会

- 伊達宗泰編 1977 「メリリ山古墳」『奈良県史跡天然名勝記念物調査報告』第35冊 奈良県教育委員会
- 辻川 哲郎 1999 「円筒埴輪の突帯設定技法の復元」『埴輪論叢』第1号
- 都出比呂志 1986 「窓穴式石室の地域性の研究」大阪大学文学部国史学研究室
- 長友朋子ほか 2004 「弥生時代における覆い型野焼きの受容と展望」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』
- 中村 兩彰 1995 「郡家車塚古墳」「島上遺跡群」19 高槻市文化財調査概要XXI 高槻市教育委員会
- 野上 犀助 1969 「摂津の古墳」古美術鑑賞社
- 野上 犀助 1970 「攝河泉における古墳群の形成とその特質」『考古学研究』第16卷第3号・第4号 考古学研究会
- 橋本 達也 1996 「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雷野山古墳の研究』八日市市教育委員会
- 橋本 達也 1998 「堅版板・方形板革縫短甲の技術と系譜」『青丘学术論集』第12集
- 橋本 達也 2000 「四国における古墳祭造地域の動向」「前方後円墳を考える」古代学協会四国支部第14回大会
- 畠 幸子 1998 「古墳時代前期の土器・土製品」「河内平野遺跡群の動態」IV 大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 原口正三・西谷正 1967 「弁天山C1号墳」「弁天山古墳群の調査」大阪府文化財調査報告 第17輯 大阪府教育委員会
- 廣瀬 覚 1999 「寺戸大塚古墳出土の埴輪をめぐって」「向日市埋蔵文化財調査報告書」第49集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
- 廣瀬 覚 2001 「茶臼山型二重口縁並と前期古墳の朝顔形埴輪」「立命館大学考古学論集」II
- 廣瀬 覚 2002 「前・中期古墳の埴輪配列」『季刊考古学』第79号 雄山閣
- 廣瀬 覚 2003 a 「埴輪の伝播と工人論」「埴輪」第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 廣瀬 覚 2003 b 「摂津猪名川流域における前期古墳の埴輪とその系譜」「古代文化」第55卷第9号
- 福水 伸哉 1994 「彷彿三角縁神獣鏡の誕生と製作背景」『考古学研究』第41卷第1号
- 古屋 紘之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義」「駿台史学」第104号
- 松本洋明編 2000 「西殿塚古墳・東殿塚古墳」天理市埋蔵文化財調査報告 第7集 天理市教育委員会
- 三宅 良明 2000 「奥谷1号墳」「前方後円墳を考える」古代学協会四国支部第14回大会
- 森下 章司 1991 「古墳時代彷彿鏡の変遷とその特質」「史林」第74卷第6号
- 森田 克行 1994 「郡家車塚古墳」「島上遺跡群」18 高槻市文化財調査概要XXII 高槻市教育委員会
- 安村 俊史 2004 「松岳山古墳群の埴輪」「柏原市立歴史資料館報」16 柏原市立歴史資料館
- 安村俊史編 2001 「玉手山古墳群の研究 I 塹輪編一」柏原市教育委員会
- 柳本照男・田中晋作編 1980 「史跡大石塚・小石塚古墳」豊中市教育委員会
- 山田 隆一 2003 「淀川流域の古墳時代初頭集落について」「関西大学考古学研究室開設五周年記念考古学論叢」
- 横山 浩一 1978 「崩毛目工具に関する基礎的実験」「九州文化史研究所紀要」第23号
- 吉田 野々 1999 「畿内における壺形埴輪からの「試考」」「埴輪論叢」第1号
- 渡邊昌宏編 1985 「美園」大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センター
- 渡部明夫・藤井雄三 1983 「鶴尾神社4号墳発掘調査報告書」高松市教育委員会

## 將軍山古墳出土埴輪観察表

- ・底径において、( ) 内のものは復元値を示し、※のついているものは最大径を示す。また\*のつくものは胴部径を示す。
- ・底径は特記していない場合、最大径と最小径の平均で算出している（壺形埴輪は除く）。なお、最大径・最小径は 0.5 cm 単位で計測している。
- ・口径において、( ) 内のものは復元値を示し、※のついているものは最大径を示す。また、\*をついているものは胴部径を示す。#をついているものは底径を示す。
- ・残存率は 1/16 単位で測定している。
- ・表中で特に単位を示さない場合、数値は cm を用いて表示している。
- ・円筒埴輪の調整については特記していない場合、外面がタテハケ、内面がナデである。それ以外の場合も備考欄に記述してある。

### 普通円筒埴輪底部・胴部

出土位置	実測箇 番号	分類	部位	残存率	底径	口径	基部高	2段目 突唇間隔	底面～ 2条目突唇	備 考
左前中 1	—	a	底部	全周	24.0	12~18	4.0	—	—	内面縦方向の江模あり。削尖縮長方形で深い。
右前中 2	—	他	底部	全周	24.0	9.9~13	4.0~4.5	—	—	1段目突唇側面の字。基部成形せず。軸欠損長方形。
上 1	5	a	底部	15/16	24.5	12~19	4.0	—	—	外面コナデ。タテハケ先行する。
J. 2	14	c	底部	全周	28.5	11~16	4.5~5.0	13.5~14.0	18.5~19.0	削尖縮長方形で浅い。
J. 3	12	b	胴部	5 / 8 (34角)	9.0~13	—	—	—	—	底部打ち込み、外面面に黒斑、内面膨脹口狭あり。削尖縮長方形で小さく、「」寄り。
上 4	33	他	底部	全周	25.0	11~14	4.5	—	—	突唇間隔の字。基部成形せず。削尖縮長方形で下寄り。
J. 5	11	bか	底部	3 / 8 (30.0)	10~18	4.2	—	—	—	突唇無し。削尖縮長方形で上寄り。
上 6	—	a	底部	全周	26.0	13~18	4.0~4.5	—	—	—
上 7	18	e	底部	全周	27.75	13~16	4.5	14.0	18.0~19.0	外面3段目赤色顔料残。内面縦方向の妊娠あり。
J. 8	8	a	底部	全周	24.5	13~18	4.0~5.0	13.5~14.0	17.5~19.0	底面に粘土塊貼り付け。突唇ナデ条線残る。
上 9	27	f	底部	7 / 8	26.25	9.9~15	5.0	13.0~14.0	18.5~19.0	内面底端部付近に縦方向の妊娠あり。
上 10	33	他	底部	5 / 8 (30.0)	13~16	4.5	13.5	18.0	—	外面ハケノ羽根。
J. 11	13	bか	底部	7 / 8 (32.0) *	10~13	—	—	—	—	底部打ち込み、ノーマル間隔、外周一面黒斑タテハケ、突唇無し。内面縦方向に浅い。削尖縮長方形で小さい。
上 12	17	d	底部	5 / 8 (29.5)	12~16	4.0~4.5	14.0	18.0	—	外面2段目赤色顔料付着。突唇低い。外面設定工具残る。
上 13	16	d	底部	全周	29.25	11~20	4.5~5.0	13.5~14.0	18.0~18.5	1条目突唇低い。
上 14	—	f	底部	3 / 8 (26.0)	10~17	—	—	—	—	—
J. 15	—	他	底部	1 / 8 (28.0)	16~19	4.0	—	—	—	内面縦方向の江模あり。突唇無し。

出土位置	実測図 番号	分類	部位	残存率	直径	器壁	底部裏	2枚目 実基面間	底面— 2枚目裏面	備 考
上 16	—	d	底部	1 / 4	(27.0)	13~16	4.0~4.5	—	—	1条目穴開孔。外側2段目赤色顔料付着。 内面擦痕付の状態。
上 17	25	f	底部	全周	27.25	0.8~1.5	4.5~5.0	13.5~14.0	18.0~18.5	外側ナメ(タチ)ハケ。斜尖端長方形。
上 18	22	e	底部	全周	27.75	1.1~1.9	4.5	—	18.0	斜尖端長方形孔。内面擦痕明瞭。2条 穴開孔。2段目に赤色顔料付着。
上 20	30	g	底部	15/36	31.5	0.8~1.6	4.5~5.0	13.5~14.0	18.0~18.5	斜尖端長方形。上寄り。
上 21	29	s	底部	全周	27.5	1.0~1.6	4.5	14.0~14.5	18.5~19.0	空窓ナメ各部現れ。外側2段目赤色顔料付 着。斜尖端長方形。
上 22	28	s	底部	全周	28.75	1.1~1.9	4.5	—	18.5	空窓ナメ各部現れ。外側3段目赤色顔料付 着。
上 23	26	f	底部	全周	28.25	1.0~1.6	4.0~4.5	13.5~14.0	17.5~18.5	—
上 24	19	e	底部	全周	26.5	1.1~1.9	4.0~4.5	13.5~14.0	18.0	灾害設定工具痕残存。空窓現れ。内面擦 痕明瞭。
上 25	23	e	底部	全周	28.0	1.0~1.6	4.5	14.0~14.5	19.0	外側ヨコハケ。外側3段目赤色顔料付着。 内面擦痕明瞭。
上 26	—	e	底部	全周	27.0	1.0~1.7	4.5	—	—	外側2段目赤色顔料付着。
中 1	—	g	底部	1 / 4	(28.0)	1.0~1.5	4.5	—	—	内面赤色顔料付着。
中 2	4	s	底部	全周	23.5	1.1~1.5	4.0	—	—	外側ヨコ(ナメ)ハケ。底端部分に厚膜。 内面擦痕干渉あり。
中 3	36	g	底部	全周	24.25	1.0~1.4	4.0~4.5	—	—	—
中 4	34	g	底部	全周	27.75	0.9~1.3	1.5~2.0	17.5	19.0~19.5	底面附近に1条目穴穿。空窓現れ。底部成 形です。
中 5	24	f	底部	全周	26.75	0.9~1.5	4.5	13.5~14.0	18.5	空窓設定工具痕残る。
中 6	21	e	底部	全周	28.5	1.2~1.8	4.0	—	18.0	空窓設定工具痕残る。内面擦痕明瞭。斜 尖端長方形。
中 7	—	f	底部	全周	24.75	1.1~1.5	4.0	—	—	斜尖端長方形。
中 8	37	g	底部	全周	25.75	1.1~1.6	3.5~4.0	14.0~14.5	18.0	1条目穴穿断面三角形。内面擦痕方向の直 角あり。斜尖端長方形で深い。
中 9	7	a	底部	7 / 8	27.0	1.0~2.0	4.0~4.5	14.0	18.0~18.5	斜尖端長方形で深い。
中 10	—	g	底部	3 / 8 1 / 8	(24.0)	1.1~1.6	4.0	—	—	1条目穴穿定。内面擦痕干渉残る。
中 11-1	15	e	底部	全周	26.25	1.1~1.5	5.0	—	—	斜尖端長方形で深い。
中 11-2	20	e	底部	7 / 8	28.0	1.1~2.0	4.0~4.5	13.5~14.5	18.0~18.5	外側設定工具痕残る。外側3段目赤色顔料 付着。
中 12	—	f	底部	全周	26.25	1.1~1.6	4.5~5.0	—	—	外側ナメ(タチ)ハケ。内面擦痕干渉の圧痕 あり。斜尖端長方形で小さく、下寄り。
中 13	10	b	側面	全周	35.5*	1.0~1.3	—	—	—	底面付近もしくは内面に凹痕。径大きい。赤 色顔料わずかに残る。3段目以上の空窓開 口は17.5cm。斜尖端上寄り。
中 14	—	a	底部	1 / 16	—	1.7~2.1	4.0	—	—	—
中 15	—	g	底部	全周	28.5	1.0~1.5	4.5~5.0	—	—	空窓現れ。
普通円筒 A 内面擦痕干渉 無し中 等石中	3	a	底部	全周	26.0	1.6~2.0	4.0~4.5	—	—	底面に粘土塊貼り付け。内面にくさび形の 工具印。斜尖端長方形。
普通円筒 B 内面擦痕干渉 無し中	6	a	底部	全周	22.5	1.1~1.8	4.0	—	—	—
普通円筒 C 内面擦痕干渉 無し中	35	g	底部	5 / 8	(30.0)	0.7~1.1	4.5~5.0	—	—	外側ナメ(タチ)ハケ。底部成形せず。1条目穴 穿定。空窓現れ。斜尖端上寄り。斜尖端長方 形で上寄り。
普通円筒 D 内面擦痕干渉 無し中	—	e	底部	1 / 4	(27.0)	1.1~1.9	4.0	—	14.0	18.0
普通円筒 E 内面擦痕干渉 無し中	—	d	底部	3 / 8	(32.0)	1.1~1.6	4.5	—	—	内面擦痕干渉が現れる。空窓現れ。斜尖端長 方形で上寄り。

出土位置	実測図 番号	分類	部位	残存率	高さ	幅	底部高	2段目 支承間隔	表面～ 2条目支承	備 考
普通円筒輪 東くじれ中央 鉢右中	—	a	底面	1 / 8	—	16 ~ 20	4.0	—	—	—
普通円筒輪 くじれ中央段	—	a	底面	1 / 8	—	12 ~ 20	4.0 ~ 4.5	—	—	1条目支承被覆。
普通円筒輪 出土場所不明	76	b	底面	1 / 8	(24.5)	14 ~ 18	—	—	—	低位置突起なし。

### 普通円筒埴輪口縁部・胴部

出土位置	実測図 番号	分類	部位	残存率	口径 断面径	高さ	口縁部高	5段目 支承間隔	4段目 支承間隔	備 考
普通円筒輪 後内側北中央 直心中	1	a	口縁～ 断面	全周	36.5 27.0	0.9 ~ 1.0	9.3	17.5 ~ 18.0	17.0 ~ 18.5	外面に赤色顔料残る。
普通円筒輪 島上場所不明	2	a	口縁～ 断面	1 / 4	(20.0) # (20.0) *	0.7 ~ 1.2	—	17.5	18.0 ~ 18.5	外面に赤色顔料残る。
普通円筒輪 後内側下段 鉢右中	9	bか	口縁	1 / 4	(41.0)	0.8 ~ 1.3	—	—	—	方形切欠き端面は5.0cm。外面のみ赤色顔料。
普通円筒輪 島上場所不明	32	—	口縁	1 / 8	(28.0) *	0.8 ~ 1.0	6.0	—	—	外面に赤色顔料残る。
上 7 5. 32	18	c	口縁～ 断面	1 / 4	(35.0) (29.5) *	0.7 ~ 1.3	7.6	17.0	—	4条目支承の上に、突起ナゲに平行する凹溝がある。底面下7cm同一關係と考えらる。

### 器台形円筒埴輪

法記	実測図 番号	分類	部位	残存率	口径	高さ	口縁部高	支承間隔	底面高	備 考
器台形1 E8	38	—	口縁	1 / 8	(38.0) *	0.6 ~ 1.0	—	—	—	ハケメ明瞭。内外面に赤色顔料残る。
器台形2 E9	40	—	口縁	1 / 8	(37.0) *	0.6 ~ 1.0	—	—	—	ハケメ明瞭。内外面に赤色顔料残る。
器台形3 E9	43	—	口縁	1 / 16	(36.0) *	0.7 ~ 1.0	—	—	—	ハケメ明瞭。内外面に赤色顔料残る。
器台形4 E8	41	—	胴部	1 / 16	(35.0) * #	0.8 ~ 1.0	—	—	—	ハケメ明瞭。
器台形5 E8	42	—	胴部	1 / 16	—	0.8 ~ 1.0	—	—	—	ハケメ明瞭。外面のみ赤色顔料。
器台形6 E8	44	—	胴部	1 / 4	(28.0) *	1.1 ~ 1.5	—	—	—	ハケメ明瞭。軸位置突起なし。底面は板ナゲ。

### 壺形埴輪

出土位置	実測図 番号	分類	部位	口径	底面	土	外側調査	内側調査	備 考
不明	45	a	口縁部 ～胴部	(50.2)	—	a	顔料塗布による 横方向の擦痕	顔料塗布による 横方向の擦痕	内面の顔料は胴部中央付近まで塗布。
不明	46	a	口縁部	(45.4)	—	a+b	顔料塗布による 横方向の擦痕	顔料塗布による 横方向の擦痕	内面の顔料は胴部中央付近まで塗布。
不明	47	a	口縁部 ～胴部	(46.5)	—	a	顔料塗布による 横方向の擦痕	顔料塗布による 横方向の擦痕	内面の顔料は胴部中央付近まで塗布。上下は粗粒 のコロケを認めめた。
不明	48	a	胴部	—	—	a	タケハケ、およ び顔料塗布による 横方向の擦痕	無溶剂痕が残る	内面の顔料は胴部中央付近まで塗布。上下は粗粒 のコロケを認めめた。
後円形水桶上段	49	a	底面	—	10.8	a	上方へのハラケ ズリ	ヘラケズリ、ユ ビナゲ	器壁2cm前後と厚い。穿孔部には凹凸が残る。
不明	50	a	胴部	—	—	a	顔料塗布による 横方向の擦痕	顔料塗布による 横方向の擦痕	内面の顔料は胴部中央付近まで塗布。下部は粗粒 のコロケによる擦痕が残る。
後円形水桶上段	51	b	選部	—	—	b	タケハケ、顔料 塗布による 横方向の擦痕	顔料塗布による 横方向の擦痕	外側の顔料塗布の擦痕はさほど顯著ではない。
上 19付近	52	—	耳口 連か	(30.0)	—	b	摩滅	摩滅	—

出土位置	実測回 番号	分類	部位	口径	底径	断土	外観調査	内面調査	備 考
前方部上段 鉢台中	53	—	出口 縦か	(32.4)	—	b	摩耗	擦減	1段階性に複数個状の擦耗あり。 内面に剥落立ち上げ開始時の新土被覆合度が明確 に現る。
前方部上段 右側部	54	b	頭部	—	—	b	側方向の擦耗	摩減	—
前方部上段 右側部 (鉢底)	55	a	頭部	—	—	a+b	側方向の擦耗	側方向の擦痕	底部の毛根期間潜伏で、底七gからbに変化。
不明	56	b	底部～ 頭部	—	(40.0)	b	底部は下方への ヘラケズリ、 上部はタクノイケ	下方はヘラケズ リ、上半には角 面出現	穿孔面は平滑。
不明	57	b	底部～ 頭部	—	(30.0)	b	タチノイケ、ドナ ヘラケズリ	ヘラケズリ、ユ ビナデ	穿孔面は平滑。
前方部東上段 右側中	58	a	底部	—	9.0	a	下方へのヘラケ ズリ	側方向のヘラケ ズリ	穿孔面には凹凸が残る。
東くびれ上部 原底?	59	b	底部	—	9.6	b	下方、および側 方(4cm)へのヘラケ ズリ	側方向のヘラケ ズリ	穿孔面は平滑。
前方部西上段 右側中	60	しか	頭部	—	—	—	タカキ日焼	ヘラケズリ、ユ ビナデ	—
不明	61	しか	頭部	—	—	—	タカキ日焼	ユビナデ	—
前方部東上段 右側中	62	しか	側部	—	—	—	タチハア、タブ キ日焼	ユビナデ	—
前方部東上段 右側中	63	しか	頭部	—	—	—	タカキ日焼	ユビナデ	—

## 附篇1 安威1号墳出土の壺形埴輪

### 1 安威1号墳について

安威1号墳は尾根筋にそって主軸を東西にむける墳長約45mの前方後円墳で、現在、北陵中学校のグラウンドの一角に残されている。かつては安威古墳群中の西端に位置し、群中で最も古い古墳と考えられてきたが、1978年の中学校建設に伴なう発掘調査（奥井1982）において、1号墳のすぐ南西で0号墳が発見されたことにより、現在では0号墳に統いて築造された古墳である可能性が高まっている。後円部墳頂には墳丘主軸に並行する2基の粘土椁が確認されている。南側の1号粘土椁は、1949年にその一部が調査され、棺内中央から石飼、車輪石各1点が出土するとともに、棺東側で漆腹が検出されている（免山1964）。2号粘土椁は未調査であるが1978年の調査の際に、1号椁の北側の下部でその存在が確認されている。規模は1号椁の方が若干上回るが両者は墓塚を共にしており、2号椁の方が先行して築かれている点が明らかとなっている。

1978年の緊急調査では、あわせて墳丘調査も実施されている。その際、一部残存した葺石によつてかろうじて前方後円墳であったことの確認が得られている。ここで公表する壺形埴輪は、この時の墳丘調査によって出土したもので、調査区のほぼ全域からその小片が出土している。これらには壺以外の器種は認められず、また底部には焼成前の穿孔が認められる。原位置を保つて出土したものはないが、墳丘のほぼ全域から出土していることからも、墳丘の周縁に用いられた壺形埴輪として理解してよからう。ただし、全形が判明するものではなくいずれも小片であるため、全体の個体数等も定かではない。

### 2 壺形埴輪の観察

1～26は口縁部、頸部付近の破片で、1点のみ単口縁とみられる破片があるが(13)、それ以外は二重口縁をとる。6～8では一次口縁が緩やかに湾曲しており、外反する頸部に取り付くものと推測される。7や8は口縁部の器壁が厚く、二次口縁の残存部分において未だ外反する状況が窺えないことから、頸部に対して比較的口縁部が長い形状をとることが推測される。それらに対応する肩部の破片が9～12とみられ、肩部上端から明確な屈曲部をもたずに頸部が立ち上がりしていく状況が窺える。

一方、20～26は直立する頸部の破片で、器壁が薄手ではば直線的に立ち上がるものと、厚手で若干内湾気味に立ち上がるものの2者がある。18、19は一次口縁が直線的であるため、それら直立する頸部に対応するものであろう。13は外面下端に鋭いヨコナデが確認できるため、そのすぐ下部が頸部屈曲部とみられる。長さや傾き、外面上部のヨコナデのあり方から、直口壺(単口縁)の口縁部と判断する。

調整は、外面はタテないしナナメハケの後、頸部・口縁部はヨコナデされる。内面はヨコハケ

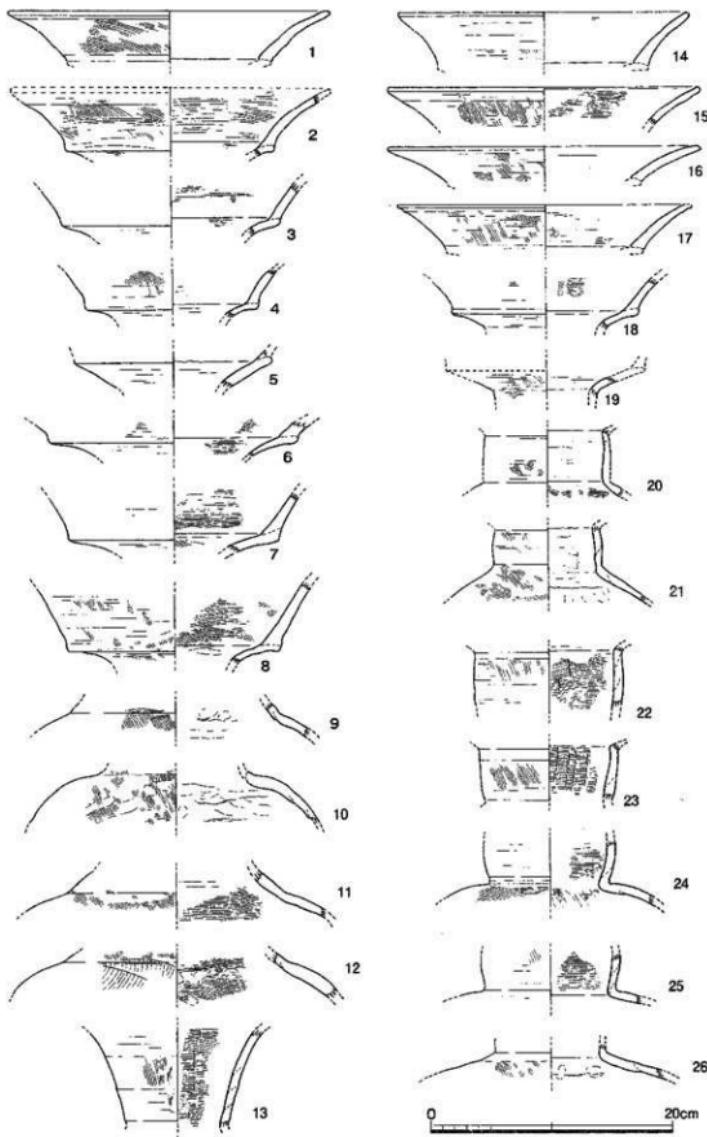


图 22 安徽 1 号墓出土耳形埴輪实测图 1

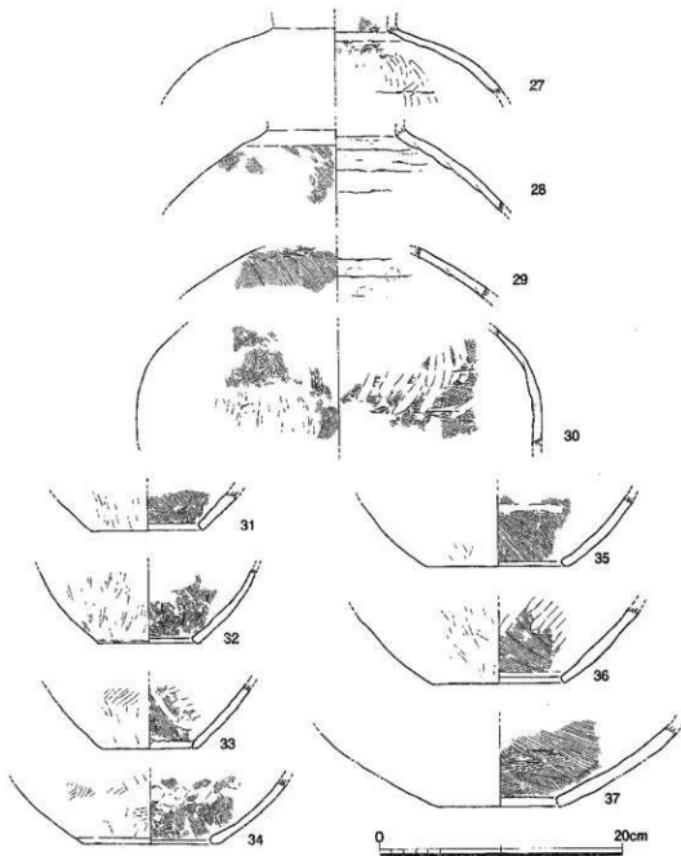


図 23 安成 1 号墳出土壺形埴輪実測図 2

で、のちにそれをナデ消すものがある。また頭部のヨコハケは 23 のように工具を静止しながら断続的に施すものもある。ハケ目は全体的に目が細かいが、12 の肩部外面に残されたハケ目は目が粗く単位の上端が頭部下端に接触している。

27 ~ 30 は肩部から体部にかけての破片で、30 から体部最大径は 32cm ほどと推測される。外側は 27 が摩滅している他はいずれもタテ・ナナメハケで 29 は上端にヨコハケ、30 は体部中央付近に下方へのヘラケズリが認められる。内面にはそれぞれ粘土縫の接合痕がよく残るが、28・29 は 3cm ほどの単位で連続的にそれが確認できる。27・30 はハケメののちにユビナデが加えら

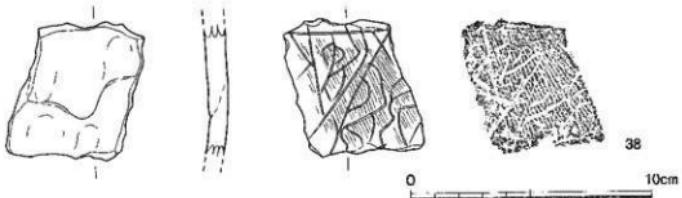


図24 安威1号墳出土壺形埴輪実測図3

れる。

底部には径8~12cmほどの穿孔が焼成前に穿たれる。器壁が薄手のもの32~34と、やや厚手のもの31、35~37があり、後者は穿孔が器壁に対してほぼ垂直に穿たれる。外面には下方へのヘラケズリが加えられるが、33や34にはそれに先行して12の肩部外面に見られたものと同様の粗いハケメが施されているのが確認できる。内面はヨコ・ナナメハケで、後にユビオサエ・ナデを加えるものもある。

ところで、以上のような出土埴輪の中には、1片のみ直弧文風の紋様を刻んだものがあつた(38)。線刻はさほど深く刻まれておらず、また小片であるため全体のモチーフを明らかにすることは困難だが、破片上端の水平線に直交・斜交する線刻によって生じた単位内をさらに「く」の字状の一部山線を加えた小単位で埋めていく様子が窺える。内面にはハケメがみられず、28や29と同様に明瞭な粘土紐接合痕が確認できることから、肩部付近の破片である可能性が考えられる。

### 3 評 價

以上のようにいずれも小片のため不明な点もあるが、ここで当古墳の壺形埴輪の内容について総括し、その編年的位置づけについて検討しておきたい。

まず器形は、体部が球形を呈するもので、依然として土器本来の形状を保っている点が注目される。一方、口縁部では單口縁のものが一定量含まれる可能性があるものの大半は二重口縁であり、頸部は外反するものと、直立するものとの2者が存在する点に特色がある。さらに後者に関しては頸部、一次口縁、二次口縁の長さがそれぞれほぼ均等の値を示すものと推測される。調整は、内外面ともハケおよびナデ調整を基本とするが、体部下半には原則的にハケ調整の後、ヘラケズリが加えられる点で丁寧に仕上げられている。

こうした特徴のうち編年的な位置づけを行う上でまず着目できるのは、口縁部形態の2者のうち頸部が直立し一次口縁がほぼ水平に開くタイプについてである。いわゆる茶臼山型二重口縁壺に共通する器形であり、体部下半を丁寧にヘラケズリする点も箸墓古墳出土の茶臼山型壺と共通

すると言える。ただし、当古墳例は全体的に器壁が薄く典型的な茶臼山型壺よりもやや小型である。周辺の集落遺跡での土器様相が十分明らかになっていない段階では厳密な位置づけは困難であるが、頸部が直立し、頸部・口縁部の比率がほぼ均等なものは布留式でも古相段階に多い。布留2式以降は直線的な頸部をもつ二重口縁壺自体が減少するとともに、頸部の形状も外開きに変化していく傾向が認められる。したがって布留3式以降に下ることは考え難い。

一方、頸部が外反するタイプの口縁部は、大きく山陰系の二重口縁壺からの影響が考慮される器形で、布留式古相には姿を現しやがて茶臼山型の器形を払拭し布留式の二重口縁壺として定式化していく流れが理解される。近年、調査がなされた高槻市鶴鳴山古墳から出土した二重口縁壺（壺形埴輪か）においても頸部が外反するタイプが確認できることから（高橋編 2002）、前期中葉（布留2式併行期）頃には周辺地域でもそうした器形の壺が定着してきている様子が窺える。一方、隣接する将軍山古墳の壺形埴輪は、壺形埴輪大型化の初現例として理解できることから（本書第4章）、当古墳の壺形埴輪はそれを下することはないと考えられる。

冒頭でも述べたように、当古墳の後円部には2基の粘土櫛が存在し、1号櫛からは鍍形石、車輪石、石鉗が各1点出土しているが、先行する2号櫛の副葬品の内容は不明である。したがって、当古墳の築造時期は1号櫛の時期よりも幾分、遅る可能性がある。以上の点を勘案すると現状では、安威1号墳の築造時期は将軍山古墳よりもやや先行する前期中葉でも中頃、近畿地方の土器編年では布留2式の時間幅の中で理解しておくのが妥当と考える。  
(廣瀬)

#### 引用・参考文献

- 奥井哲秀 1982 「茨木市安威1号墳、1号墳の調査」『大阪文化誌』第15号  
免山 篤 1964 「安威古墳群」『茨木の文化財』第3号  
高橋公一編 2002 『鶴鳴山古墳第1次調査概要報告書』高槻市文化財調査概要XXX 高槻市教育委員会

## 安威1号噴出土壺形埴輪観察表

左口縁部・頸部・底部は全て復元径である

実測回 数	部位	口径 部径	腹部径	底部径	外 四 面 楕 圓	内 面 調 查	備 考	出 土 場 所
1	口縁部	26.6	—	—	ナナメハケ	摩滅		■区くびれ部付近
2	口縁部	—	—	—	ナナメハケ、ヨコナデ	ヨコハケ		■区Eトレンチ背面壁面
3	口縁部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコハケのち ヨコナデ		■区前方端部裏石黄色土層
4	口縁部	—	—	—	ヨコハケのち ヨコナデ	ヨコナデ		■区裏石2段目黄色土層
5	口縁部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		■区裏石裏面土中
6	口縁部	—	—	—	タテハケ、ヨコナデ	ヨコハケ		■区裏石裏面土層
7	口縁部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコハケ、ヨコナデ		■区裏石1段目～2段目
8	口縁部	—	—	—	タテ・ナナメハケのち ヨコナデ	ヨコハケ		■区後円部裏石2段目
9	肩部	—	—	—	タテハケ	ヨコナデ、ユビオサエ		■区黄色土層中
10	肩部	—	—	—	タテハケのち上上がり のヨコナデ	ナナメナデ	内面の粘土被覆が極明瞭。	■区前方端部裏石黄色土層
11	肩部	—	—	—	ナナメハケ	ヨコハケ		■区前方端部裏石黄色土層
12	肩部	—	—	—	タテハケ	ヨコハケ	外面側部のハケ目、削い	■区裏石3段目黄色土層
13	口縁部	—	8.6	—	タテハケのちヨコナデ	ヨコハケ	半口縁とみられる。	■区裏石側面土中
14	口縁部	24.0	—	—	タテハケのち ヨコナデ	ヨコハケのち ヨコナデ		■区裏石2段目
15	口縁部	25.8	—	—	タテハケ、横方向の擦痕 有り	ヨコハケのち ヨコナデ		■区前方端部裏石黄色土層
16	口縁部	24.0	—	—	タテハケのち ヨコナデ	ヨコハケ		■区前方端部裏石黄色土層
17	口縁部	24.4	—	—	タテハケのち ヨコナデ	ヨコハケのち ヨコナデ		■区前方端部裏石黄色土層
18	口縁部	—	—	—	タテハケのち ヨコナデ	ヨコハケのち ヨコナデ		■区2段目経行黄色土層
19	頸部	—	8.6	—	ナナメハケのち ヨコナデ	ヨコナデ		■区黄色土層
20	頸部	—	10.6	—	タテハケのち ヨコナデ	■区裏石1段目：ヨコハケ ■区裏石2段目：ヨコナデ		■区裏石2段目黄色土層
21	頸部	—	9.2	—	タテ・ナナメハケ	ナナメ・ヨコナデ		■区裏石裏面土
22	頸部	—	12.4	—	タテハケのち ヨコナデ	ヨコハケ		■区裏石2段目黄色土層
23	頸部	—	11.4	—	ナナメハケ	新規的なヨコハケ		■区前方端部裏石黄色土層
24	頸部	—	11.0	—	ナナメハケのち ヨコナデ	ヨコナデ、 ■区裏石裏面はタ 方角の入り口		■区黄色土層
25	頸部	—	11.6	—	ナナメハケのち ヨコナデ	ヨコハケ		■区前方端部裏石黄色土層

実測回 数等	部位	口縁 標高	面部縦	面部横	外 四 面 量	内 四 面 量	備 考	出 土 地 場
26	肩部	-	9.2	-	タコハケ	ユビオサエ	内面の粘土結合部明瞭。	b区2段目黄土層
27	肘部	-	10.2	-	摩滅	スピナデ、上面には先行するタコハケ百り		b区砾石3段目褐色土層
28	肩部	-	-	-	ナナメハケ	ヨコナデ	内面の粘土結合部明瞭。	a区後内部砾石2段目
29	肩部	-	-	-	ナナメハケ、肩部上端リ ヨコハケ	ヨコナデ	内面の粘土結合部明瞭。	a区後内部砾石2段目
30	体部	-	-	-	ナナメハケ、下方への ハラケズリ	ヨコハケのち スピナデ		b区西石最下段黄色土層
31	底部	-	-	8.6	下方へのハラケズリ	ヨコ・ナナメハケ		a区前方隅部砾石黄色土層
32	底部	-	-	9.0	下方へのハラケズリ	ナナメハケ	器壁や厚い。	a区砾石2段目黄色土層
33	底部	-	-	8.2	ナナメハケのち 下方へのハラケズリ	ヨコハケのち 不規方向のスピナデ		b区砾石3段目黄色土層
34	底部	-	-	11.2	ナナメハケのち 下方へのハラケズリ	ナナメハケ スピナデ	器壁や厚い。	b区砾石最下段
35	底部	-	-	11.6	下方へのハラケズリ	ナナメハケ	器壁や厚い、内面ハケ の上に小粒土塊付着。	b区Eトレーンチ黄色土層
36	底部	-	-	10.8	下方へのハラケズリ	ナナメハケ、右上がりの スピナデ		a区前方隅部黄色土層
37	底部	-	-	10.6	下方へのハラケズリ	ナナメハケ	器壁や厚い。	a区黄色土層
38	体部				ナナメハケ	ユビオサエ	輪削による複文まり、内 面の粘土結合部明瞭。	a区前方隅部黄色土層

## 附篇2 阿為神社所蔵三角縁唐草文帯二神二獸鏡

### はじめに

安威古墳群の南方に所在する阿為神社に、一面の鏡が所蔵されている。かつては南西約1kmの鏡古墳に由来すると推定されることもあったが、この塚の時期と銘書きの記載から、ほかの近隣古墳に副葬されていた可能性が指摘されている（樋口1952）。18世紀以前の出土であるため、出土地の推定は不可能に近いが、伝来地や鏡の時期などを勘案すれば、近隣の安威古墳群や茨木将軍山古墳に包蔵されていた可能性もある。そこで本章では、本鏡の紹介と位置づけをおこない、さらには本鏡が当地域にもたらされた背景とその意義について簡単に触ることにする。

### 1 紹介（図25、図版20）

目録番号97番の三角縁惟念此銘唐草文帯二神二獸鏡（京都大学文学部考古学研究室編1989）であり、同型（范）鏡には鳥取県普段寺山1号墳出土鏡（中原1988）、鳥根県大成古墳出土鏡（古谷1999）、大阪府石切鏡前神社藏鏡（樋口1992）の3面がある。

鏡背径約24.05cm、鏡面径約23.1cmをはかる。反りは約4mm。縁部外斜面長・外区厚・内区厚は、それぞれ1.1cm・0.3～0.5cm・0.15cmで、全体的に薄手である。縁部から鉢にかけて一筋のひびが入っているほかは、欠損箇所のない完形品である。やや綠青がふいているもの地肌は綠銀色を呈し、鋒上がりは非常に良好である。内区などに土がわずかに付着し、鉢には布帛をはがした痕跡があることから、本鏡が出土品であることが察知される。

縁部は、外斜面が急角度で直に、内斜面が緩傾斜でわずかに内反りしつつ立ち上がり、斜縁に近い小ぶりな三角縁をなす外区の外側には、外周突線が一条めぐる。外区～内区外周文様帶は、外側から鋸齒文帯、複線波文帯、鋸齒文帯、段落して櫛齒文帯、唐草文帯、斜格子文帯で構成される。鋸齒文は小ぶりで、複線波文は若干鑄潰れた箇所がある。唐草文帯は、唐草文(13単位)と錢文(9単位)ないし小乳(4単位)を交互に配している。唐草文はS字状の基体の末端が三葉状にわかれて、長辺両側に蕨手状文が配される。錢文は中心の微小突起を方格と正円が囲い、「五」の字があらわされたものが一つある。斜格子文には、4箇所の小乳が配置されている。小乳は神獸像のほぼ真下に位置し、割付意識がうかがえる。この小乳の一つの頂部が崩れているが、これは鑄造時の欠損のようである。

内区は、4乳の間に二神と二獸を鉢をはさんで各1体ずつ対向させる、配置J1の神獸像配置である（小林1971）。神獸像は表現④に分類されるものである（岸本1989）。神像は西王母と東王父が1体ずつ配される。西王母は廉几のような神座に坐す。齊髪の頭部はやや斜め前方を向き、頬はふくよかで表情はたおやかである。両袖が巻き上がった左衽の上衣を着け、組んだ足の上で結手するようである。右肩からは三本の翼状の雲気が立ち上がり、両膝脇には鋭い四山の文様が

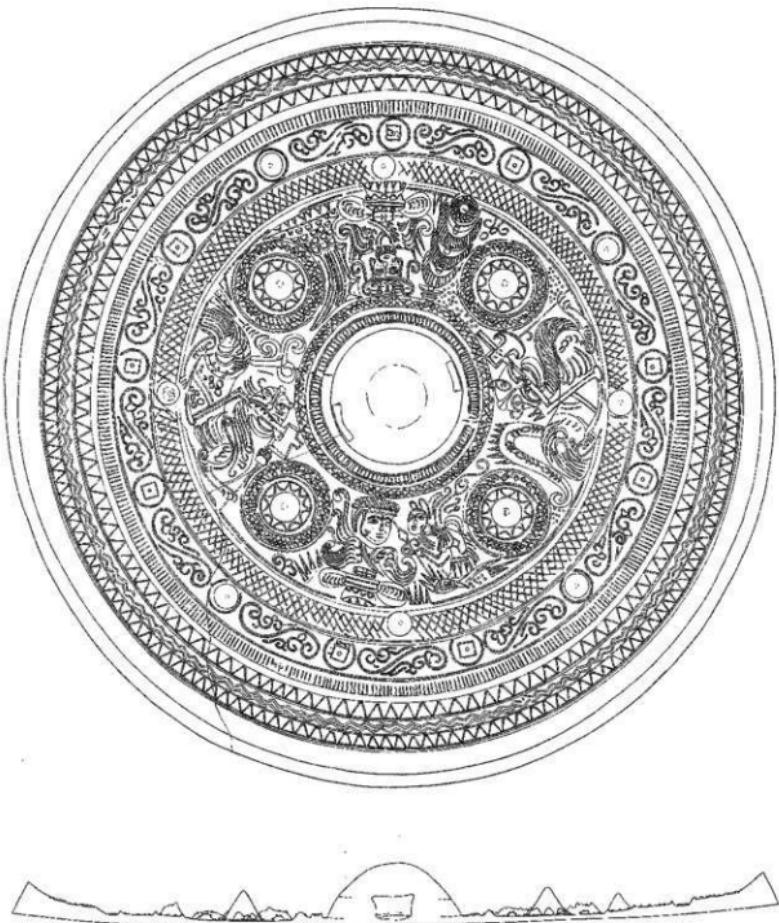


図 25 阿為神社所藏三角縁唐草文帶二神二獸鏡平面図・断面図 (S=2/3)

施される。像の左には、槧戟の一種を手にし、頭に兎耳、背に羽を生やした羽人が控える。東王父は、頭部より下は西王母とほぼ同じであるが、両側から旒の垂れる冠を戴き、顔には鬚器をたくわえる。像の左には「重疊山文様」(種口 1952)を、右には施節文をおき、両肩から三本の長三角状の雲気が衝き上がる。獸像はおそらく龍像と虎像を1体ずつ配している。両者ともに、斧銚を街えつつ反時計回りの方向に疾駆する姿態をあらわしている。頭部をやや傾け、前後脚1本

ずつ前方に踏みだし、羽翼はよく発達している。龍像は直刃の斧を銜え、胸部に鳞文とおぼしき小円文を表現する。前脚が、先端に施がついた細棒である執物を握る。虎像は円刃の鉾を銜え、先端が二叉になった槧載状の執物を前脚でつかむ。乳は一種の振座乳を配しており、斜格子文の施された断面半円形の環が、径 1.2 cm・高さ 0.9 cm の乳を囲う。乳の基部に 10 前後の半円連弧形の浮文が配されているのは、珍しい表現である。

鉢座は、乳座と同様の斜格子文と櫛齒文が一重ずつめぐる。鉢は径 4.2 cm と大ぶりであるが、高さ 1.9 cm とやや低平である。鉢孔は、幅約 1.1 cm 高さ約 0.7 cm で、その下底は鏡背面よりわずかに高いが、龍像側に開口する鉢孔の下底は鋳潰れていて、鏡背面との段差が不明瞭である。

范傷は、龍像の腰部から尾を経て鉢にいたる傷、縁部付近から外区から虎像を賀き鉢にいたる傷、龍像腰部下端付近から外区に延びる傷が顯著であるほか、こまかな傷が数箇所で観察できる。また、内区外周の櫛齒文や鉢座の櫛齒文などに鋳潰れがみられる。

## 2 位置づけと意義

近年の編年研究に照らせば、本鏡の時期は、新納泉・澤田秀実・岸本直文が 5 段階編年の第 4 段階に（新納 1991、澤田 1993、岸本 1996）、福永伸哉が 4 段階編年の第 3 段階に（福永 1996）位置づけている。このように本鏡は、いわゆる船載三角縁神獸鏡のうち、最新ではないがかなり新しい段階の製作とみることで見解の一致をみている。

系譜的位置づけについては、本鏡が属する表現④が、画象鏡と関連の深い「二神二獸鏡群」に分類されていることが示すように、本鏡の二神二獸配置や龍虎の区别、脇侍の表現や内傾の緩い縁部の立ち上がりなどは、画象鏡との強い関連を示唆する（西田 1971、岸本 1989）。東王父左脇の「重疊山文様」からも、画象鏡の雲氣座との接点がうかがえる。

本鏡は、二つの研究視角を深めた点で、三角縁神獸鏡の研究史上、重要な位置を占める。第一に、同範鏡／同型鏡の議論の嚆矢となったことである。すなわち、普段寺山 1 号墳出土鏡の鉢帶・乳座の振座・鉢座の有筋重張文座および櫛齒文座が、本鏡ではそれぞれ斜格子文帯・斜格子文座・斜格子文座および櫛齒文座に改変されていることから、両鏡が同型鏡の技法により製作された可能性が提起されたのである（樋口 1952）。近年では、さらに精緻な観察から、普段寺山鏡→石切鏡→本鏡→大成鏡の製作順序が復元され、普段寺山鏡から石切鏡の間に踏み返しが介在した偶然性が論じられている（藤丸 2000）。この事実を受けいれるならば、いわゆる同範鏡論の重要根拠となっていた製作の同時期性について再考が必要になる。ただし、資料に即して同型鏡の可能性が指摘された目録番号 93 鏡（網干 1975、八賀 1984）や、同型か否かは判然としないが改作の可能性が指摘される同 88 鏡・同 124 鏡をみると、前者は本鏡と系統および時期が、後者は本鏡と時期が近似しており、時期や系統に由因する技法である可能性も残される。三角縁神獸鏡の時期・系統と製作技法との関係を追究していく必要があるだろう。また、同一の同型鏡群内や踏み返し鏡群内における時空間差については、仕上げ研磨の方法や鉢孔・断面の形態、さらには成分

分析を駆使して検討することで、解決の道が開けるであろう。諸研究成果を勘案するかぎり、こうした鏡群内で大きな時空間差は見積もれないと考える。

第二に、三角縁神獸鏡とほかの魏晉鏡の単位文様を比較し、両者の併行関係を探る大きな契機になったことである（樋口 1952）。本鏡に関しておこなわれた、魏晉鏡との唐草文の比較は、以後にも引き継がれ、近年ではほかの単位文様や銘文のスタイル、鈎孔などの技法面をふくめて総合的に魏晉鏡との併行関係が議論されるにいたっている（田中 1985、福永 1996、車崎 1999）。

このように本鏡は、三角縁神獸鏡の研究を大きく進展させる契機になった鏡であり、その豊富な情報量から、今後も研究が進められるべき重要な鏡である。

最後に、本鏡が当地域から出土した可能性が高いことについて、その意義を簡単に述べる。東方の弁天山古墳群などをふくめた当地域には、安満宮山古墳から塚原古墳群にいたるまで、古墳時代前期のあらゆる時期の三角縁神獸鏡が流入している。このことは、当地域が畿内中枢地域と長期にわたり連絡と関係を築きつけたことを示唆している。また、本鏡が属す新相の中国製三角縁神獸鏡や同時期の倭製鏡は、畿内地域を核とする中国地域東部～東海地域西部の内側に分布が凝集するのであるが、当地域には本鏡のほかにも弁天山C1号墳や郡家車塚古墳から、この時期の三角縁神獸鏡および倭製鏡が出土しており、全国的な趨勢と合致している。

さらに範囲を限定し、阿為神社付近から本鏡が出土した可能性を認めるならば、近隣の紫金山古墳出土鏡と本鏡とのあいだに興味深い関係が看取される。すなわち、紫金山古墳には中相の中国製三角縁神獸鏡1面と古相の「彷製」三角縁神獸鏡9面および同時期の倭製鏡1面が埋葬されており、その中間にあたる新相の中国製三角縁神獸鏡を欠いている。ところが本鏡は、まさにその新相の中国製三角縁神獸鏡である。つまり、近隣の複数古墳間で時期的にジグザクな鏡剖葬がなされているのである。ここで示唆的なのが、近隣する茨木将軍山古墳と紫金山古墳が、その埴輪の系統も埋葬頭位もことなることである（本書第4章）。こうした差異の背景として、被葬者の系統や他地域との提携関係や造墓集団の相違がストレートに差異に結びついた可能性と、両古墳において意図的に差異化がはかられた可能性とを、ひとまず想定することができる。こうした脈絡で本鏡と紫金山古墳出土鏡の関係を考えるならば、本鏡がもたらされた時期に紫金山古墳の被葬者（集団）と畿内中枢との関係が稀薄であったとみなすか、あるいはこうした他律的な差異を想定するのではなく、近隣古墳にたいして自主的に差異化をはかったとみなすかという、二つの可能性がでてくる。この問題は、当地域にかぎらず当該期の有力集団関係を考へるうえで重要であるが、しかし本鏡の出土地が不分明な以上、さらに踏みこむことは不可能である。本書のようないくつか古墳の詳細な検討を積み重ねてゆくことで、この問題への理解はおのずと深められていくものと考える。

（下垣仁志）

本鏡の実見観察にあたり、阿為神社宮司森川正啓氏に便宜をおはからいいただきました。また、樋口隆康先生には、貴重な写真図版を拝覧させていただきました。記して篤く感謝いたします。

## 引用・参考文献

- 柄干善教 1975 「一角縁神獸鏡についての二、三の問題－岩井文常二神二獸鏡の同型鏡に関連して－」『椎原考古学研究所論集』創立三十周年記念 古川弘文館 pp.231-264
- 岸本直文 1989 「三角縁神獸鏡製作の工人群」『史林』第72巻第5号 史学研究会 pp.1-43
- 1995 「三角縁神獸鏡の羅年と前期古墳の新古」『考古学研究会40周年記念論集 展望考古学』考古学研究会 pp.109-116
- 京都大学文学部考古学研究室編 1989 『椿井大塚山古墳と一角縁神獸鏡』京都大学文学部
- 車崎正彦 1999 「副葬品の組み合わせ－古墳出土鏡の構成－」石野博信編『季刊考古学』別冊8 前方後円墳の出現 雄山閣出版 pp.53-74
- 小林行雄 1971 「三角縁神獸鏡の研究－形式分類編－」『京都大学文学部紀要』第十二 京都大学文学部 pp.96-120
- 澤田秀実 1993 「三角縁神獸鏡の製作動向」『法政考古学』第19集 法政考古学会 pp.17-37
- 田中 琢 1985 「日本列島出土の銅鏡」西鶴定生他「三角縁神獸鏡の謎」角川書店 pp.40-64
- 中原 齊 1988 「特集 会見町普段寺1号墳出土の一角縁神獸鏡」『鳥取埋文ニュース』No.19 鳥取県埋蔵文化財センター pp.1-7
- 新納 泉 1991 「椎現山鏡群の型式学的位置」近藤義郎編『椎現山51号墳』椎現山51号墳刊行会 pp.176-185
- 西山守夫 1971 「三角縁神獸鏡の形式系譜総説」『東京国立博物館紀要』第六号 東京国立博物館 pp.195-239
- 八賀 晋 1984 「仿製一角縁神獸鏡の研究－同鏡にみる范の補修と補刻－」『学叢』第6号 京都国立博物館
- 橋口隆康 1952 「同型鏡の二三について－鳥取普段寺山古墳新出鏡を中心として－」『古文化』1-2(橋口隆康著1983  
「展望 アジアの考古学－橋口隆康教授退官記念論文集－」新潮社 pp.9-20に再録)
- 1992 「三角縁神獸鏡総説」新潮社
- 福永伸哉 1996 「船載三角縁神獸鏡の製作年代」『背豪山論叢』史学編第30号 大阪大学文学部 pp.1-22
- 藤丸昭八郎 2000 「三角縁神獸鏡の製作技術について(予稿)－製作工程に「踏み返し」が介在する同范(型)鏡群の場合－」『北九州市立考古博物館 研究紀要』第7号 北九州市立考古博物館 pp.29-67
- 古谷 級 1999 「三角縁神獸鏡」渡辺貞幸編『荒鳥古墳群発掘調査報告書』安来市埋蔵文化財調査報告書第27集 安来市教育委員会 pp.62-64

# 図 版



図版 1 普通凹筒埴輪 1





7  
(中9)



8  
(上8)



10  
(中13)



13  
(上11)



14  
(上2)



11  
(上5)



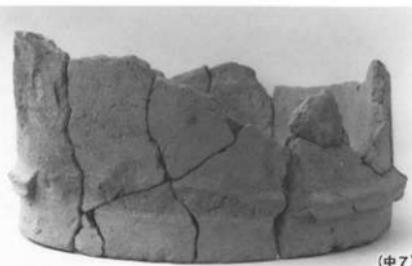
15  
(中11-1)



12  
(上3)

18  
(上7)20  
(中11-2)22  
(上18)21  
(中6)19  
(上24)23  
(上25)

圖版 4  
普通圓筒埴輪 4







31  
(上10)



(上6)



(上26)



(左くびれ中1)



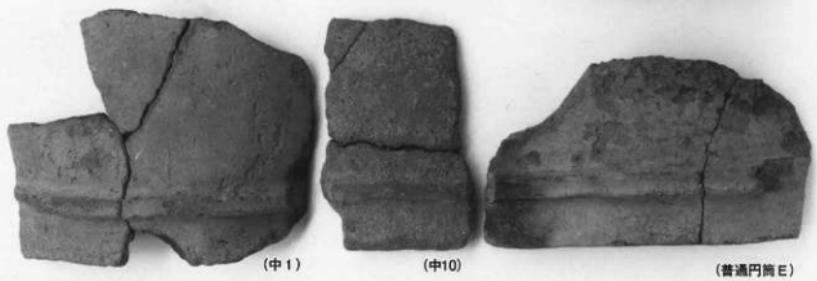
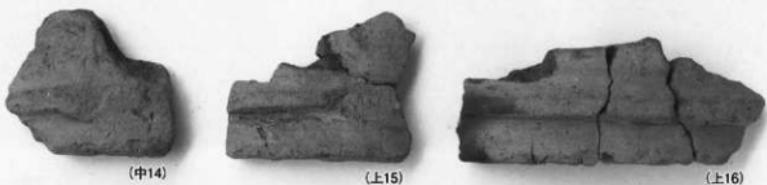
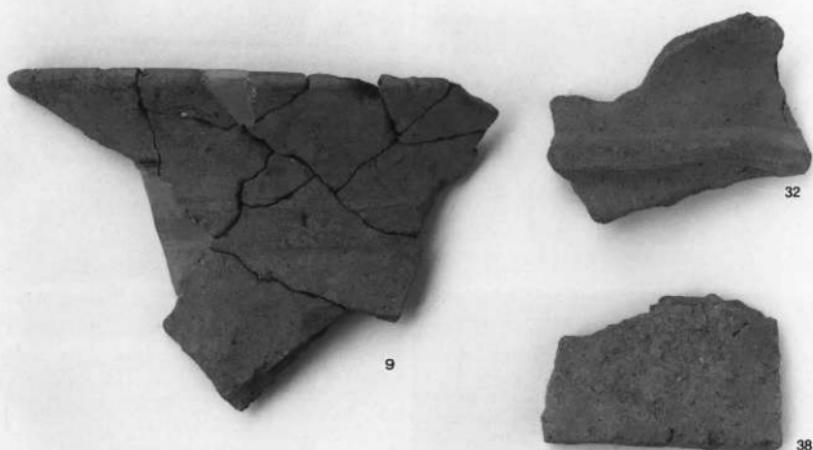
(中12)



(左くびれ中2)

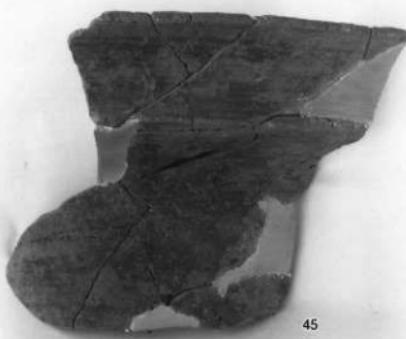


18  
(上7)





47



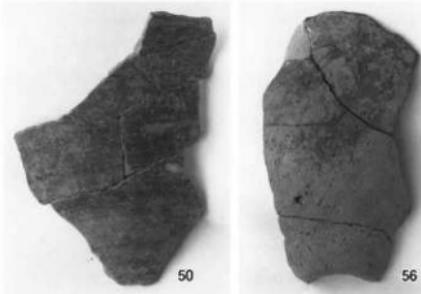
45



48



58



50

56



51



49



57



46



53



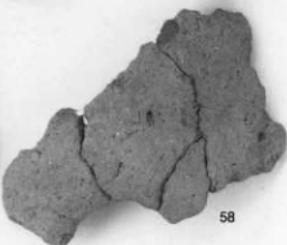
52



54



55



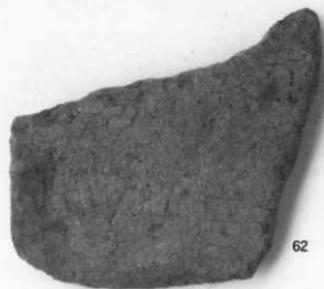
58



60



61



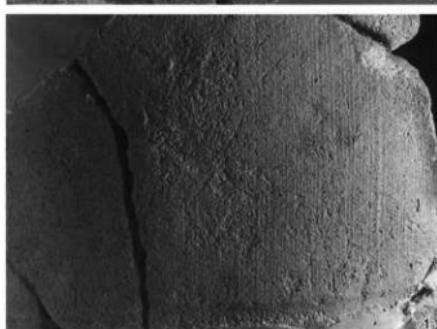
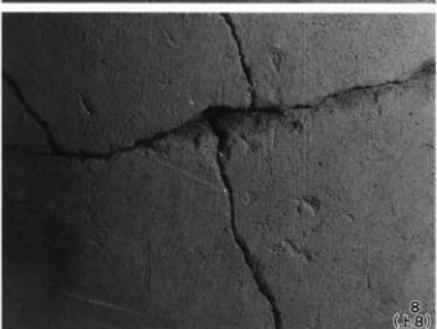
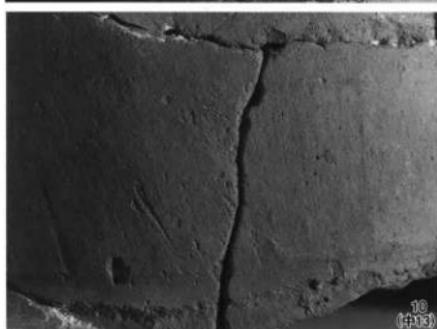
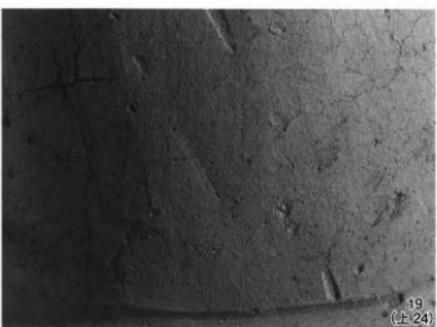
62



63



図版 11 普通凹筒埴輪細部 1 (外面調整)





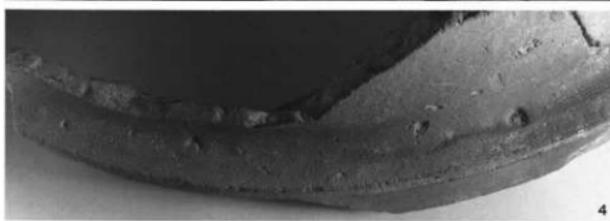
規格工具の圧痕(中 6)



規格工具の圧痕(上 24)



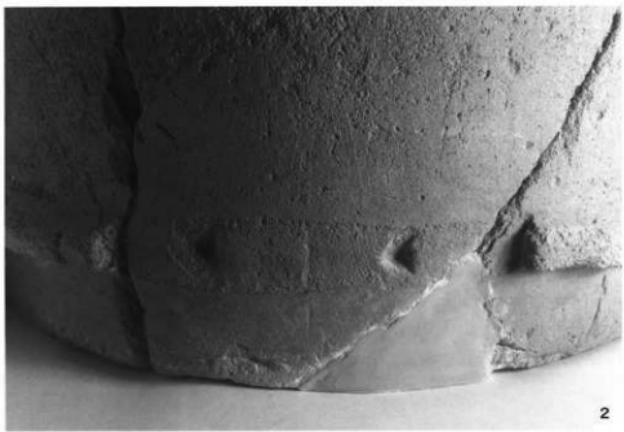
突帯剥離面の刺突(中 13)



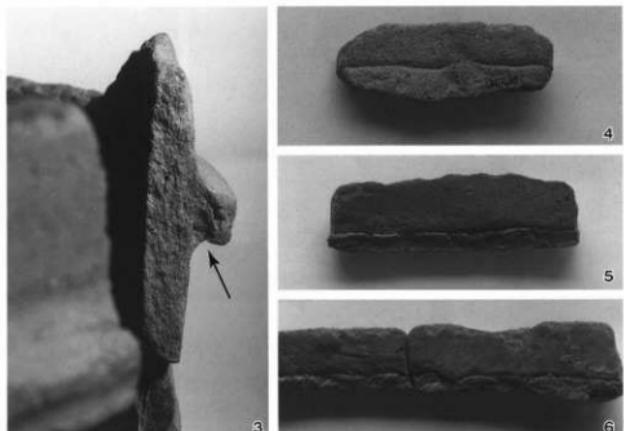
突帯上面に残る規格工具の痕跡  
(上 3)



突帯剥離面の刺突 (中 11 - 1)

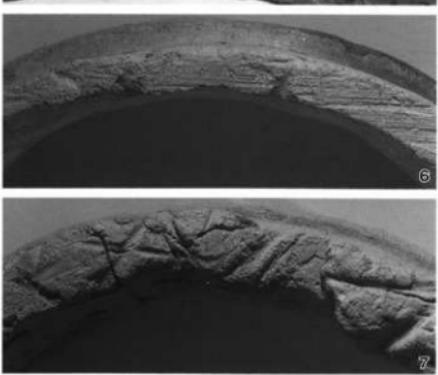
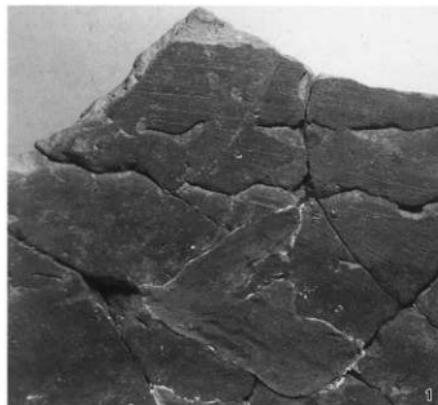


突帯剥離面の刺突 (中 9)

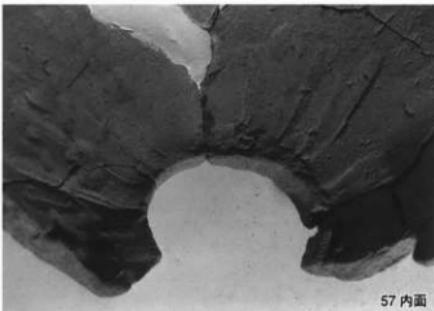
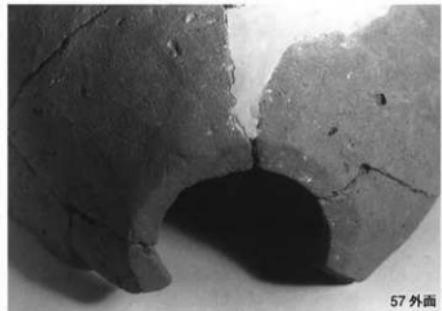
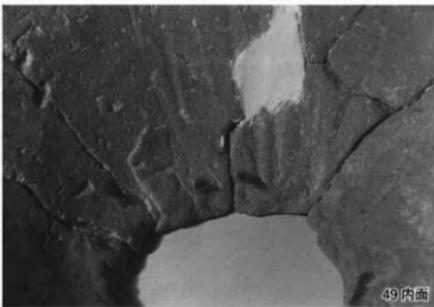
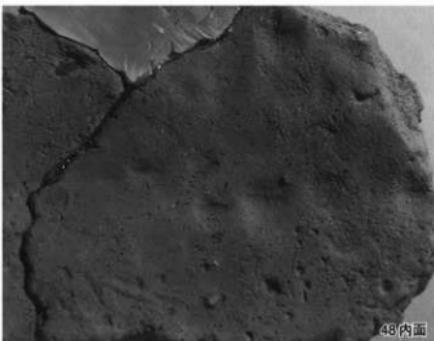
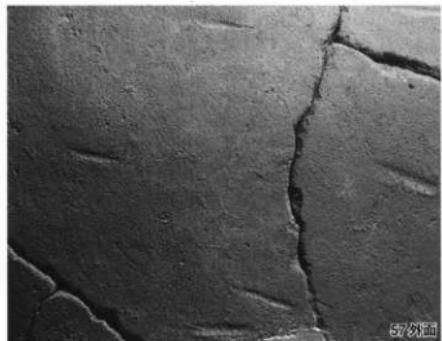
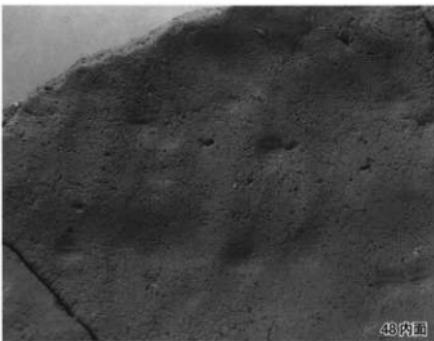
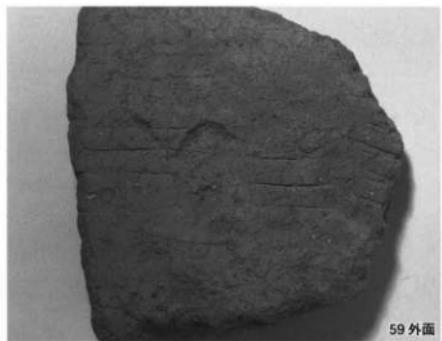


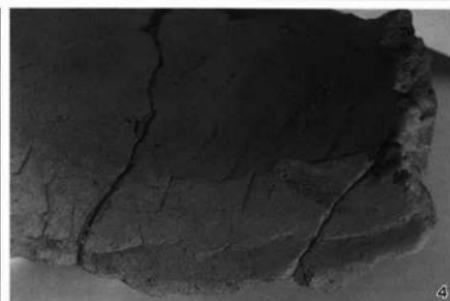
突帯補充技法の痕跡

3 - (上 22) 4 - 出土位置不明  
5・6 - (中 13)



1・2 中 13 腋部内面 3 中 8 基部内面 4 中 2 基部内面  
5 上 10 基部内面 6 上 24 底面 7 上 8 底面

壺形埴輪細部  
(胴部・底部)



1 壺形埴輪頸部斷面 (55)

4 壺形埴輪頸部內面 (47)

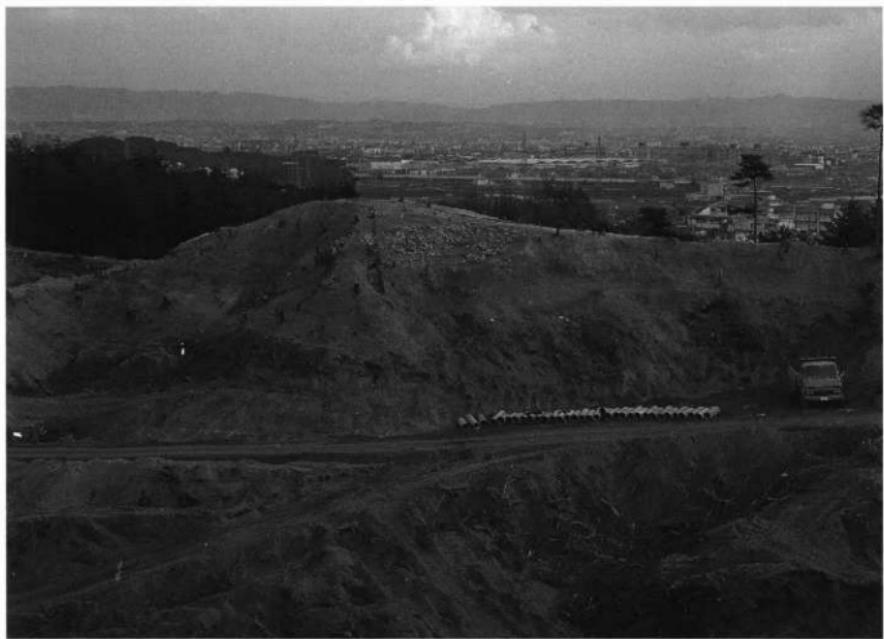
2 壺形埴輪頸部內面 (54)

5 動物形土製品側面 (65)

3 壺形埴輪頸部外面 (47)

6 動物形土製品側面 (66)

図版 17  
安威1号墳調査風景 1



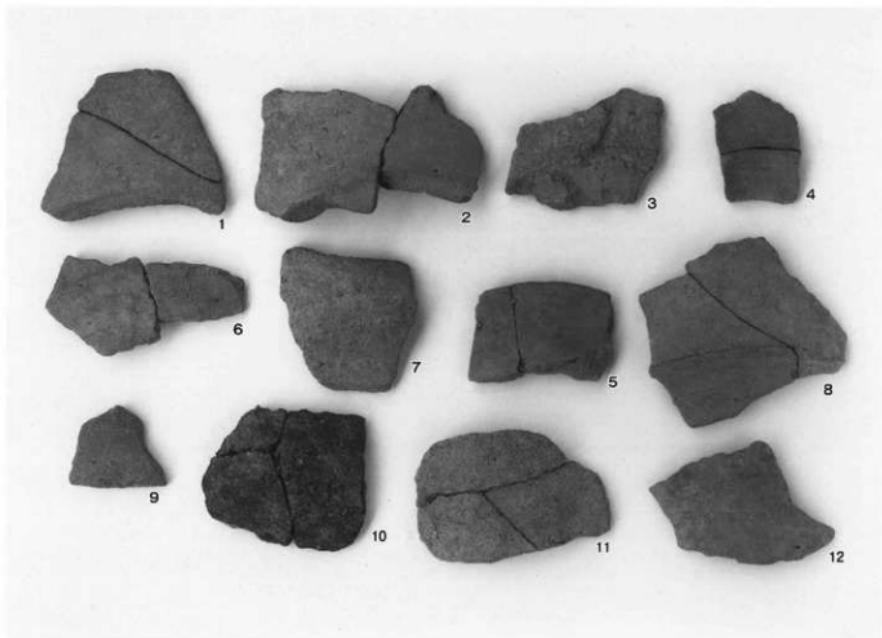
北より



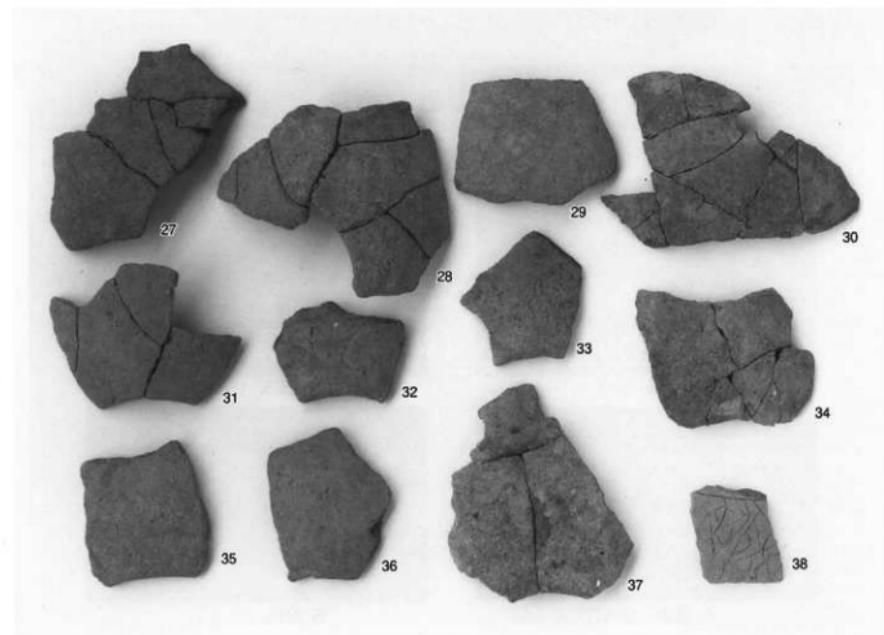
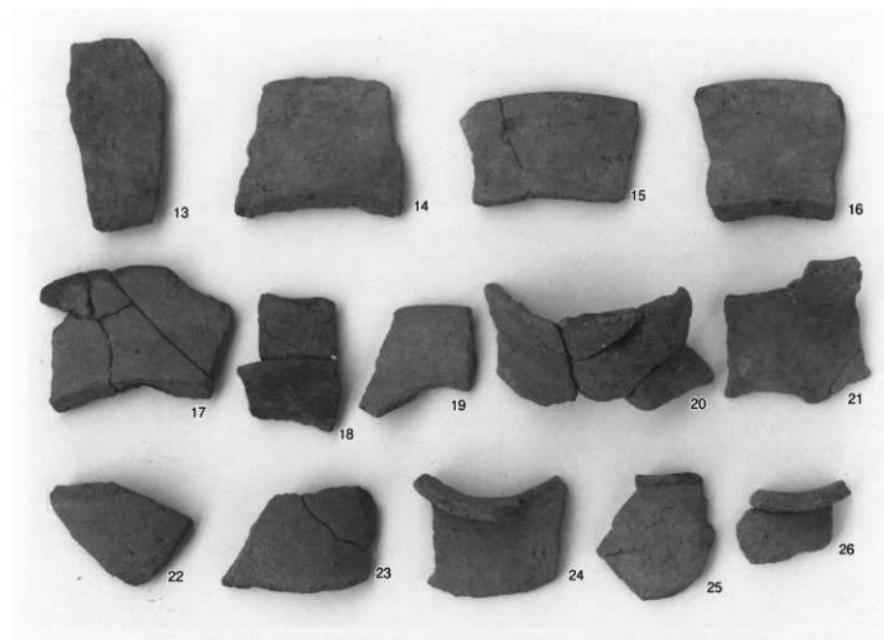
東より



蓋石檢出狀況



図版 19  
安威1号墳出土壺形埴輪2





1 鏡背 (S=2/3)



2 西王母 (S=1/1)



3 東王父 (S=1/1)



4 龍像 (S=1/1)



5 虎像 (S=1/1)



新修 茂木市史 史料集8

將軍山古墳群 I  
—考古学資料調査報告集1—

平成17(2005)年3月 発行

編 集 茂木市史編さん室

発 行 茂木 市

〒567-8505

茂木市駅前三丁目8番13号

印 刷 株式会社トウユー